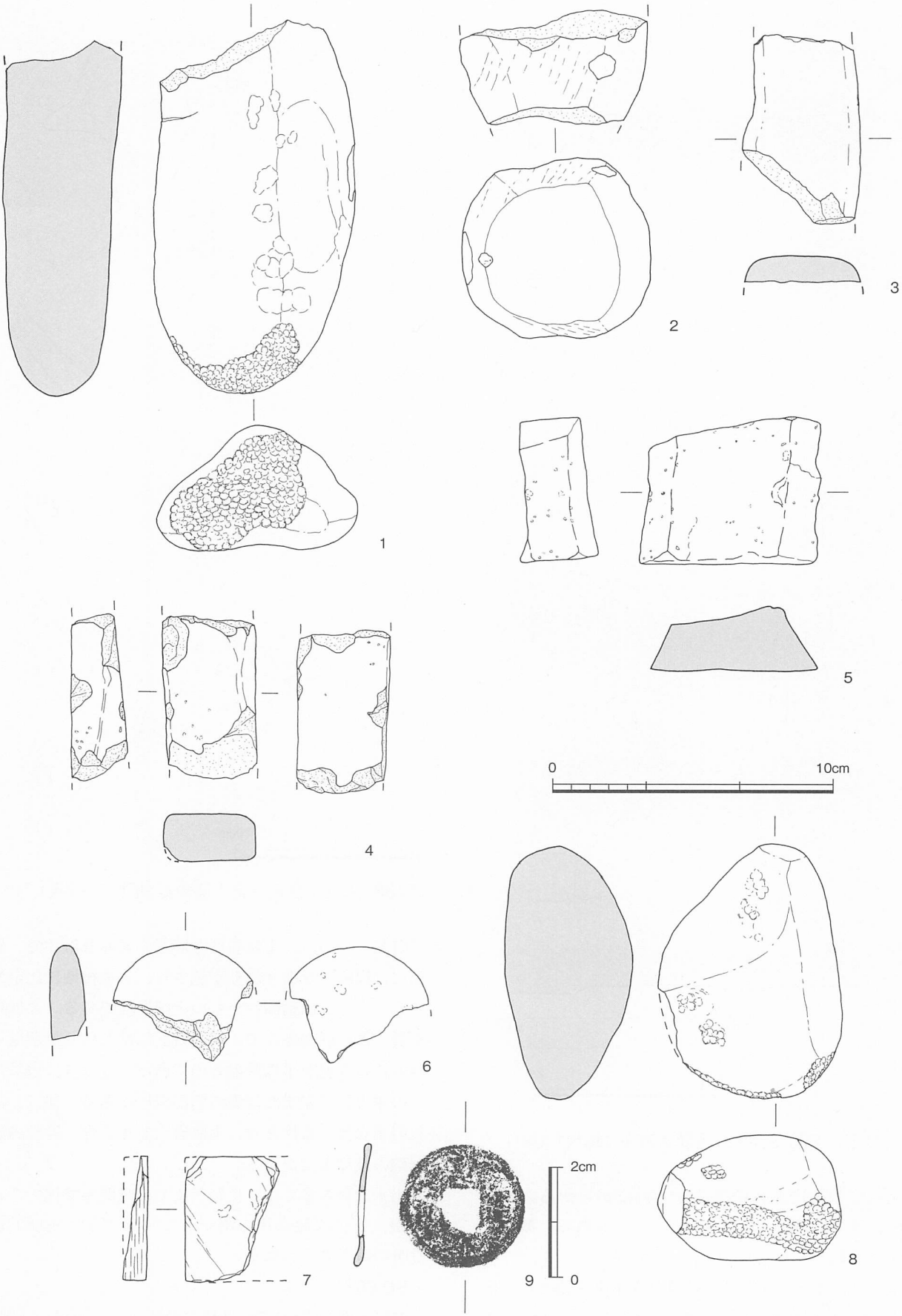


図137　B区 SD-601出土遺物実測図２（縮尺1/1・1/2）

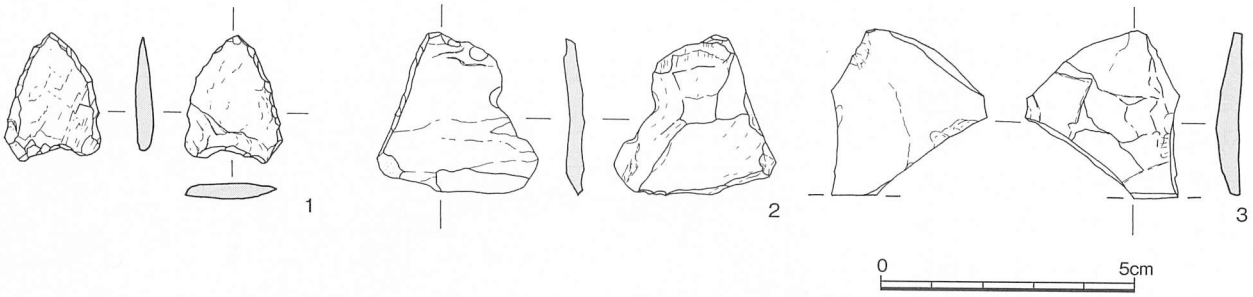


図138　B区 SD-601出土遺物実測図３（縮尺2/3）

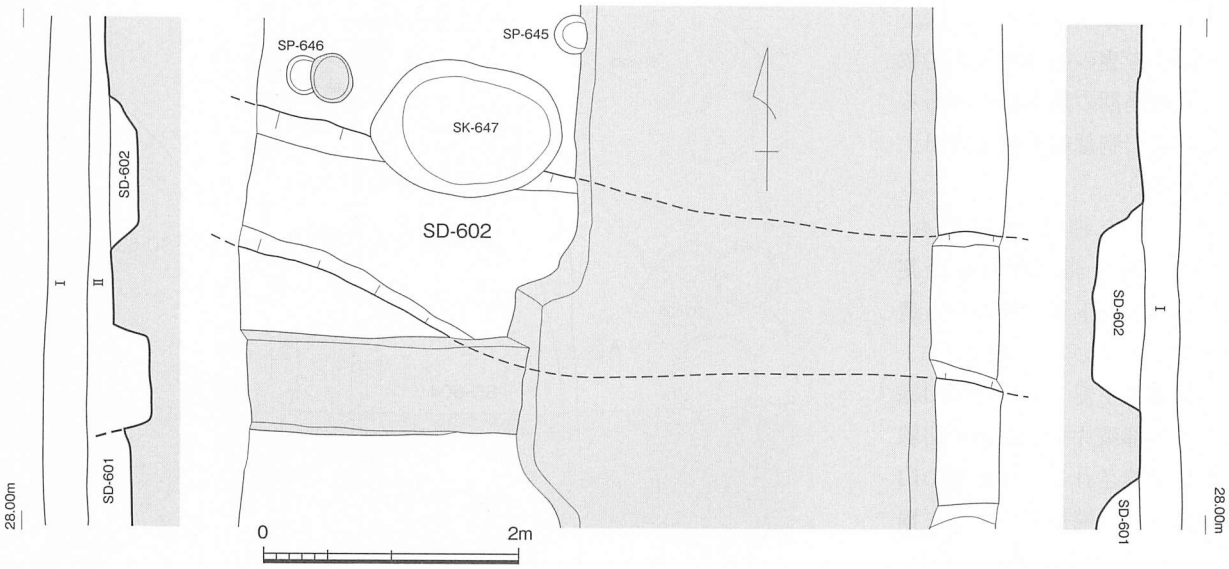


図139　B区 SD-602遺構実測図（縮尺1/60）

で破壊されている。攪乱部を挟み東側では北西方向にのびるが、西側では北東方向から南西方向にのびた後、一度屈曲し北西方向へと続く。かなり蛇行しながらのびる溝である。底面はほぼ平坦で、大きな凹凸は見られない。埋土は茶褐色～黒褐色砂質シルトで、最上部には、小さな角礫や粗砂が混じるやや灰色みをおびた茶褐色砂質シルト層が堆積していた。

出土した遺物には、弥生土器（図142- 1～10）、土師器（図142-11）、須恵器（図142-12）がある。２は溝底から出土。他は埋土中から散発的に出土している。１は壺の口縁部から肩部の破片で、口縁部は短く、肩部は大きく張り出す。２は甕の口縁部破片で、端部を上方に摘みあげ、端面に２条の凹線文を施す。頸部と肩部との屈曲部外面には、突帯を貼り付け、指頭による押圧刻目が施される。内面屈曲部直上には沈線が１条巡る。弥生中期後葉に比定できる。３は甕の口縁部の破片で、横ナデによって端部近くで、外方に少し折

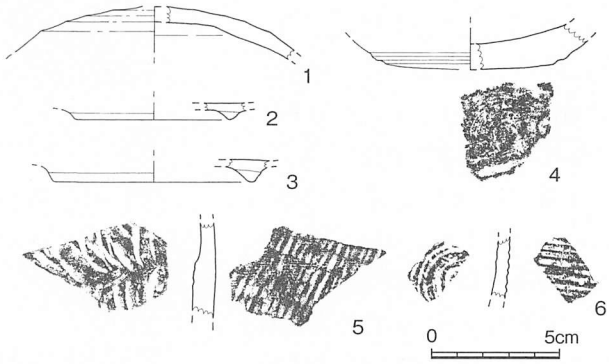


図140　B区 SD-602出土遺物実測図（縮尺1/3）

れ曲がり、端部は丸くおさめる。４は鉢の口縁部破片。５は壺の頸部から肩部にかけての破片で、外面にはヘラ状工具の角を押捺した刺突文が巡る。６は壺の底部破片で、縦方向に擦過痕が見られる。７も壺の底部で、内面はケズリ調整が施され、板状工具の押さえつけ痕

が残る。8は高坏の脚部破片で、柱部下部から大きく外方に裾が開き始める部分にあたる。9は甕の底部片。平底である。10は甕の底部で丸みをおびた小さな底面をもつ。外面にはタタキ痕が残る。弥生後期後葉～終末に比定できる。11は土師器甕の肩部破片。12は古墳後期の須恵器の壺または甕の胴部破片である。他に、弥生土器あるいは土師器の壺や甕の胴部破片が30数点、古墳後期の須恵器坏身あるいは坏蓋の胴部細片が1点出土している。

こうした埋土以外にも、SD-603の最上面に堆積した茶褐色砂質シルト質土層からも遺物が出土している（図143）。1～15は弥生土器。1は壺の口縁部から頸部破片で、端面に凹線文が2条施される。2は甕の口縁端部片で、端部をわずかに摘み出す。3は壺の肩部破片で、外面にはヘラ状工具を用いた刺突文が施される。4～6は甕の頸部～肩部の破片で頸部の付け根に突帯1条を貼り付ける。4・6の突帯には指頭、5の突帯には板状工具による刻目が施される。7・8は壺の底部片で、7は平底、8は上げ底気味である。9～11は甕の底部破片。10、11は上げ底。12は鉢の口縁部破片で、口縁部は斜め上方に直線的に伸びる。13は鉢の胴部上半部の破片で、口縁部は外方に大きく屈曲する。14は高坏の脚端部片である。15は上げ底気味を呈する鉢の底部片である。いずれもは弥生中期後葉～後期前葉に比定される。

16～29は古墳後期の須恵器で

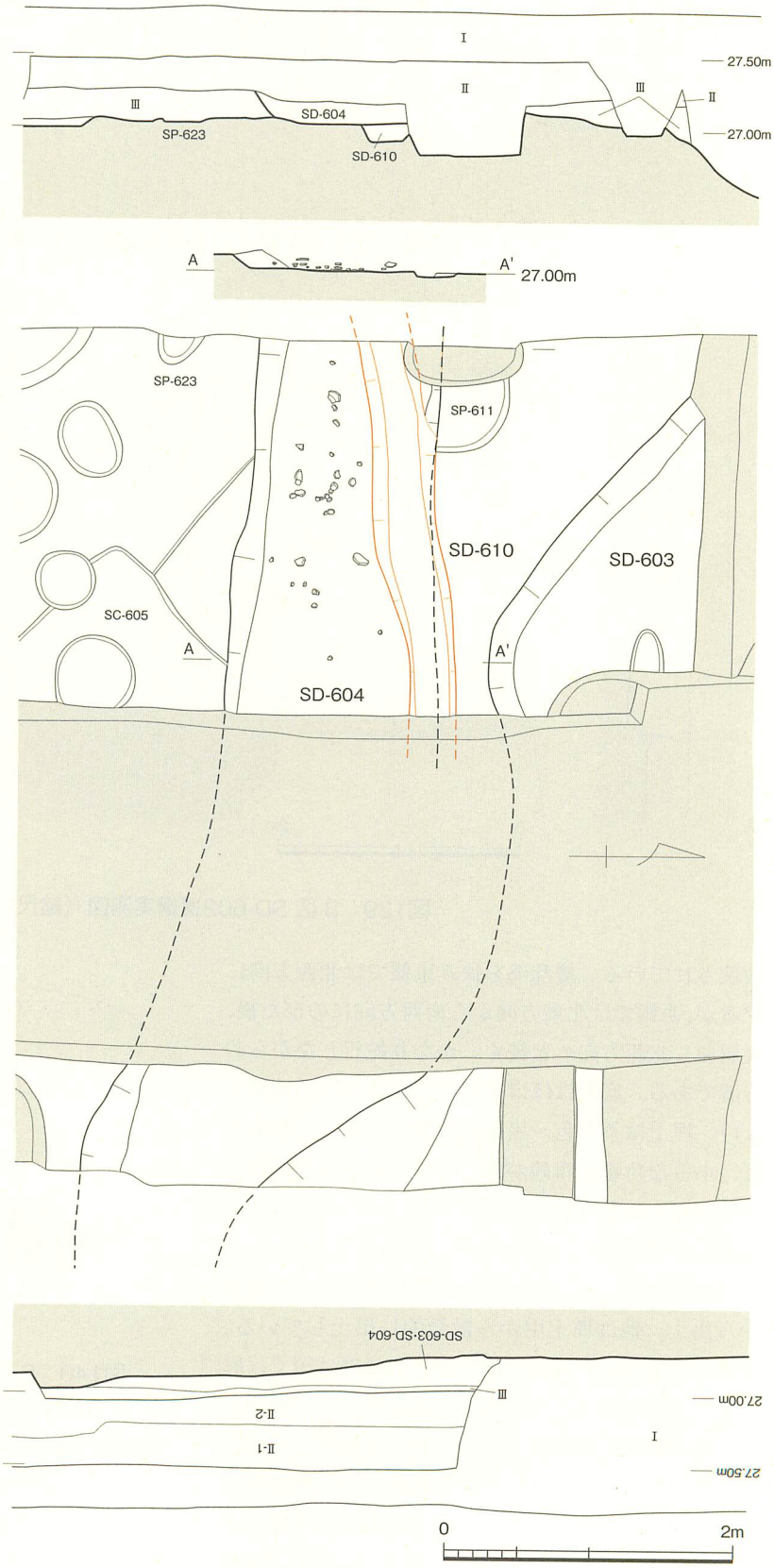


図141　B区 SD-603・604・610遺構実測図（縮尺1/50）

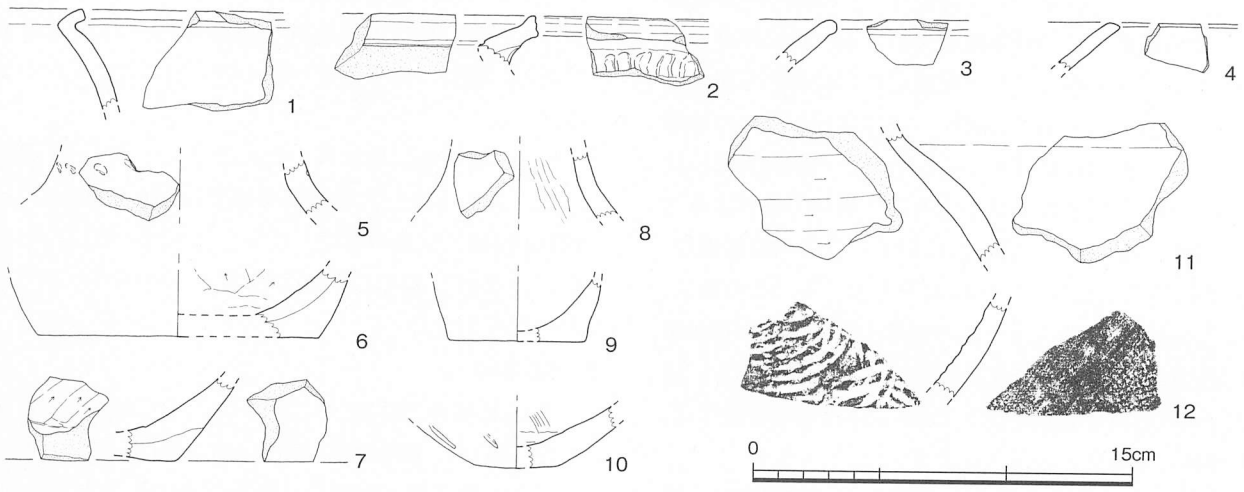


図142　B区 SD-603出土遺物実測図（縮尺1/3）

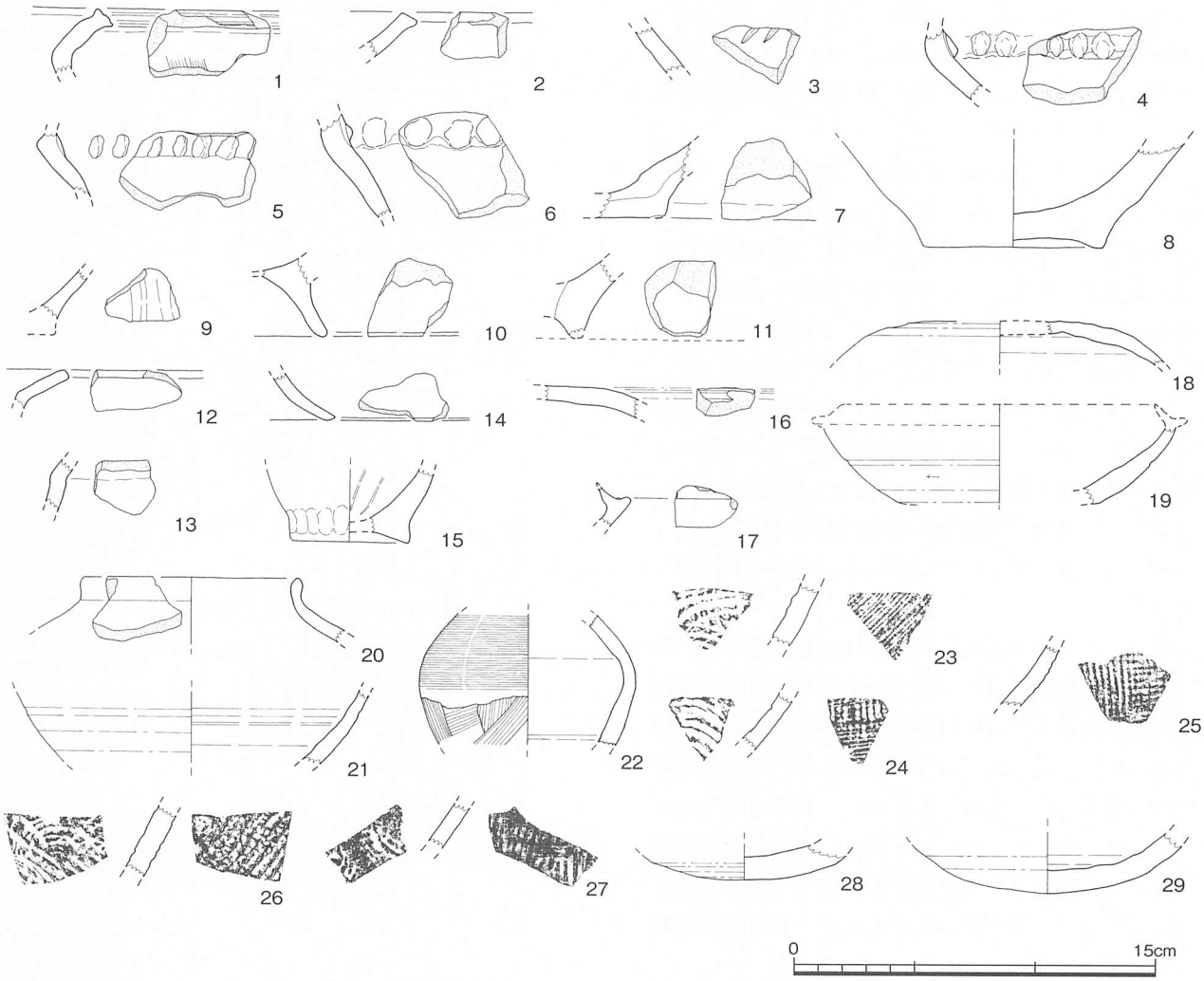


図143　B区 SD-603上面出土遺物実測図（縮尺1/3）

ある。16・18は坏蓋の天井部破片。17は坏身の口縁部から受け部破片。口縁端部を欠損する。19は坏身の胴部から底部片である。20は短頸壺の口縁部から肩部破片。21は壺の胴部下半の破片。22は穿孔がないため壺としたが、瑳の可能性もある。肩部から胴部外面にはカキメ調整、底部外面は不定方向へ板状工具によるケズリ調整が施される。23～27は壺または甕の胴部破片。28・29は壺の底部片で、29は丸みをおびる。この他に、弥生土器・土師器の壺や甕の胴部小片、弥生中期後葉に見られる口縁端部を上方に摘みあげた甕の小片、近世陶磁器の破片２点が出土している。近世陶磁器片は、上層部のⅡ層からの混入品と考える。

以上の出土遺物と埋土の特徴から、SD-603は古墳後期に比定できる。

SD-604

Ｂ区北部DG・DH-38・39区に位置し、SC-605・SC-606を切り、SD-603に切られている（図141、図版27）。東西方向にのびる溝で、幅1.28m、深さ15cmを測る。

埋土は、やや灰色みをおびた茶褐色シルトで、小礫・粗砂が混じるが、SD-603の埋土ほどは多くない。

遺物は、埋土下部、底面付近や底面に貼り付いた状態で、須恵器や土師器の小片が点々と出土した。

溝底付近および底面に張り付いた状態で出土した遺物には、図144-２～４・６～11・13～15がある。２～４・６～９は弥生土器。いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。２は壺の口縁部破片で、端面には凹線文が２条以上施される。３は甕の口縁端部の破片。４は壺の肩部破片。６は壺の平底の破片である。７・８は上げ底の甕である。９は甕あるいは鉢の上げ底の破片である。

10・11・13～15は須恵器。10は坏の底部破片で、平底である。外底面にはヘラ切り痕が残る。11は蓋坏の天井部片である。13は坏身の底部片。14は短頸壺の口縁部から肩部片で、張り気味の肩部から、頸部が直立し、口縁端部は尖り気味におさめる。15は壺あるいは甕の胴部破片である。11・13～15はいずれも古墳後期に比定できる。図示した以外にも、弥生土器の大型壺の胴部破片１点、壺や甕の胴部破片が十数点出土している。

この他、埋土下部から、図144-１・５・12が出土している。１は弥生土器壺の口縁部。端面には幅広の凹線文が４条施される。５は弥生土器壺の頸部から肩部破片である。１は弥生中期後葉、５は弥生中期に位置づけられる。12は古墳後期の須恵器坏蓋の天井部破片である。他に、弥生土器の壺や甕の胴部破片10点がある。

以上、溝底面に貼り付いた状態で出土している遺物には、弥生土器と古墳後期の須恵器がある。ただし、図144-10は、平底の坏で、こうした形態の坏は古墳後期にはない。古代の須恵器と考え、SD-604の時期を古代と考えておく。

SD-610

Ｂ区北端のDH-39区に位置し、SD-604底面で検出した（図141、図版27）。東西方向にのびる溝で、幅35～45cm、深さ26cmを測り、断面は逆台形状を呈する。

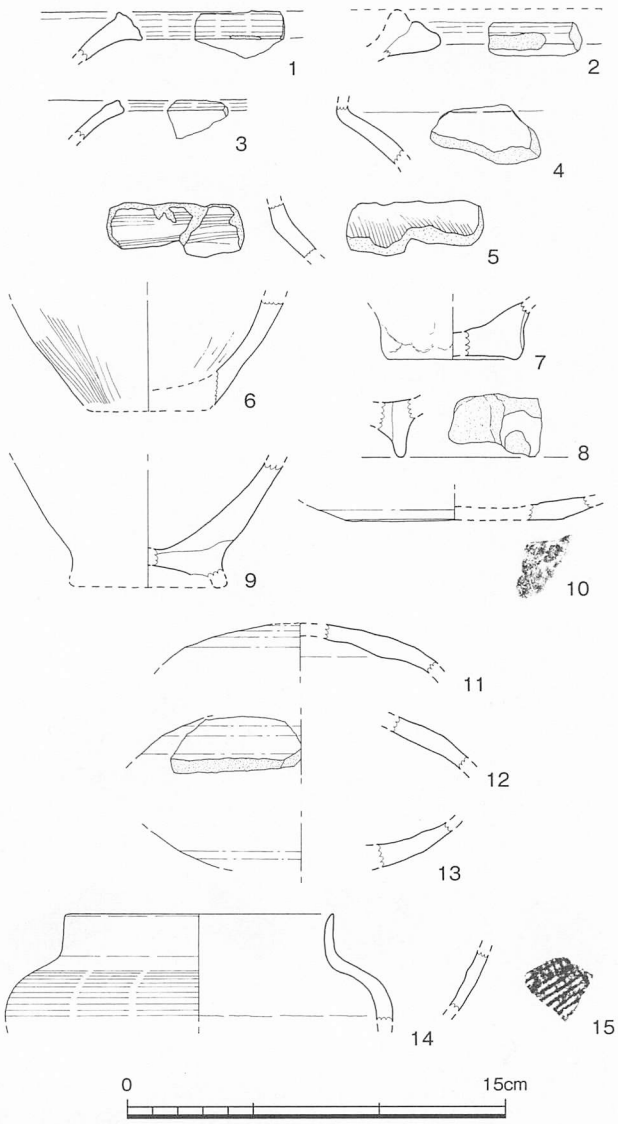


図144　Ｂ区SD-604出土遺物実測図（縮尺1/3）

SD-604に切られ、SP-611を切っている。

埋土は、SC-605やSC-606に近い、やや茶色みをおびた黒褐色砂質シルトである。

埋土から散発的に遺物が出土している。５点を図示した（図145）。１は壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部付け根には、指頭による刻目を施した突帯が１条巡る。２は平底と考えられる底部近くの壺の胴部下半部の破片である。３は壺の口頸部破片で、口縁端部は欠損する。４はミニチュア高坏である。１～４は弥生中期～後期。５は古墳後期の須恵器坏身の破片である。口縁部内面にあまい段をもつ。この他、弥生土器あるいは土師器の壺や甕の胴部破片が５点、近世陶磁椀の口縁部破片が１点出土している。近世の陶磁器片１点は、SD-610が近世のSP-611と切り合い関係にあることから、混入品と判断した。

以上、SD-610は古墳後期の溝と考える。

SD-627

Ｂ区中央部のDH-36・37区に位置する。北西から南東にのび、撹乱部分で屈曲し、さらに東にのびる。幅1.1m～1.9m、深さ90cmを測る。逆台形に近い断面をもち、底面は緩やかに窪む。

遺物は、埋土上面から弥生中期の壺頸部片・胴部片が各１点、埋土から近世の陶磁器２点と土師器小片が少量出土している。

SD-627は近世の溝である。

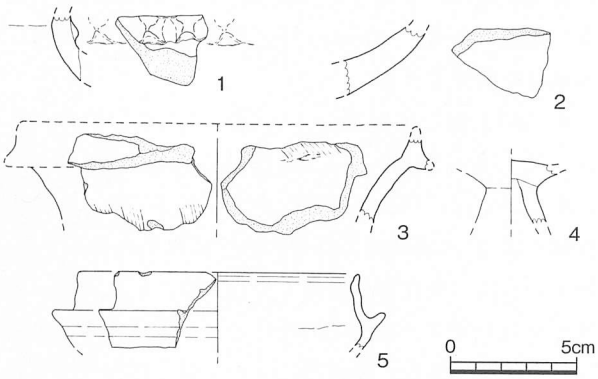


図145　Ｂ区 SD-610出土遺物実測図（縮尺1/3）

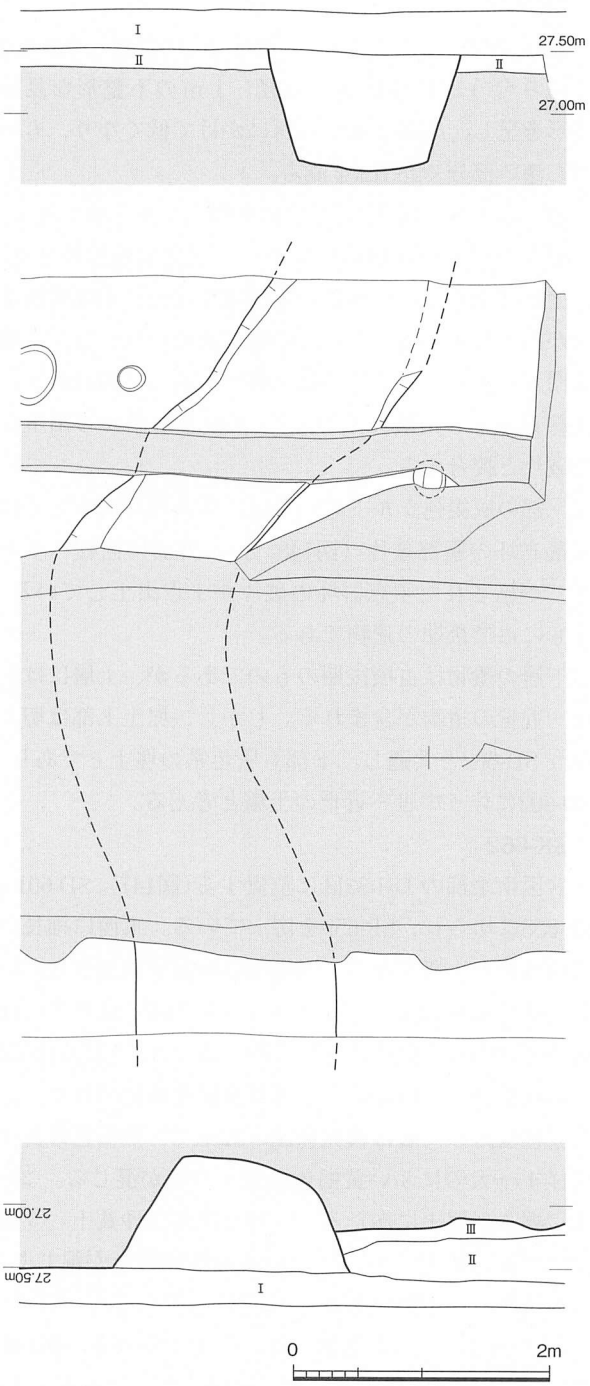


図146　Ｂ区 SD-627遺構実測図（縮尺1/60）

5　土壙

Ｂ区では18基の土壙が出土した。いずれも埋土ａの遺構であるが、SK-663・666・675・684・690・695・697・705・710・713・725・732・733・735・739の15基は弥生時代、SK-647・662・693の３基は古墳時代の土壙である。

SK-647

Ｂ区南部のDH-33区に位置する（図147）。SD-602と切り合う。長径1.5m、短径1.１mの不整形な長楕円形を呈し、底面は東から西にかけて低くなり、もっとも深い部分で28.7cmを測る。

埋土の上部は粗砂層、下部は灰褐色シルト層である。

埋土上部の粗砂層の中位から、近世陶磁器片２点、弥生土器あるいは土師器の胴部破片４点、土師器埦１点が出土している。土師器の胴部破片の中には、古墳後期と考えられる土師器甕の破片がある（図148-１）。直線距離で６m離れたDI-31・32区Ⅲ層中から出土した破片と接合する。

下部の灰褐色シルト層からは、須恵器坏身もしくは無蓋高坏の胴部破片（図148-２）、外面に回転ヘラケズリが施された須恵器坏の破片が１点出土している。ともに古墳後期の遺物である。

下層の遺物は古墳後期のものであるが、上層には古代～近世の遺物が含まれる。しかし、埋土上部は切り合うSD-602と共通し、下部も灰色系の埋土ｃであり、SD-602に伴う中世～近世の土壙と考える。

SK-662

Ｂ区南端部のDH-32区に位置する（図147）。SD-601・SP-658に切られ、SP-659を切っている。東西に細長い長楕円形の土壙である。東端部は撹乱で破壊されている。推定長径1.15m、短径70cm。中央部に深さ７～16cmほどの円形の掘り込みをもつ。掘り込み部分は径50～65cmを測り、ほぼ中央で立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡の①層は復元径20～22cmで、黒褐色砂質土に径１cm大のにぶい黄褐色砂質土の塊が混じる。②・③は掘り形埋土にあたる。②層は黒褐色砂質土。③層は、黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土が混じり、全体に明るい色調である。

埋土から出土した遺物には、弥生土器の壺（図148-３・４）、高坏（図148-６）、甕（図148-７）がある。３・６は掘り形埋土の③層から出土している。３は、口縁部が外方に大きくひらく壺で、弥生中期に比定できる。４は底部近くの胴下半部の破片である。６点の破片が接合するが、接合する破片間でも焼成具合や色調が異なる。焼成失敗品の可能性があるが確定できない。５と同一個体と考えられる。６は、高坏の坏部破片で、外面には凹線文が施され、直下に板状工具の角を押し当てた刺突文が巡る。７は「く」字形に短く緩やかに屈曲する口縁部をもつ。口縁上面がわずかに内湾する。弥生後期前葉のものと考える。７はⅢ層出土遺物と接合している。

この他、SK-662上面のⅢ層部分からは、弥生土器壺の底部（５）、土師器甕の口縁部（８）が出土している。５は、前述したように、４と同一個体の可能性が高い。８は、口縁端部は面取り調整を施し、古墳後期に比定できる。

確実に埋土から出土した遺物は弥生中期～後期前葉の時期幅をもつ。したがって、SK-662は弥生後期前葉に埋積した遺構と考える。なお、Ⅲ層部分から出土した古墳後期の甕（図148-８）については、Ⅲ層中に掘り込まれた遺構に伴う可能性を考えておきたい。

SK-663

Ｂ区南半部のDH-32区に位置する。北端部を攪乱で破壊され、SP-664・665に切られる。残存長125cm、最大幅45cm、深さ10cmの浅い船底状を呈する土壙である（図147）。埋土は黒褐色砂質土で、下部にはにぶい黄褐色砂質土が少量混じる。埋土の遺物の多くは、底面よりやや浮いた状態で出土している。鉢の口縁部破片（図149-２）、磨石（図150-１）がある。図149-２は、口縁部が頸部から大きく外反する。弥生後期前葉～前葉に比定できる。図150-１は、花崗岩製で、両端部に擦過痕を観察できる。

SK-663上面のⅢ層部分から出土した遺物には、弥生土器の壺（図149-１）、須恵器の坏身（図149-３）がある。１は、やや不安定な小さな底部である。弥生後期。３は、古墳後期の坏身の底部破片がある。また、埋土からは、炭化物片が多く出土した。炭化物周辺の埋土を持ち帰り、水洗選別を行い、一辺５mm未満の炭化材を確認できた。樹種等については分析を行っておらず不明である。

Ⅲ層部分から出土した遺物は、切り合い関係から考

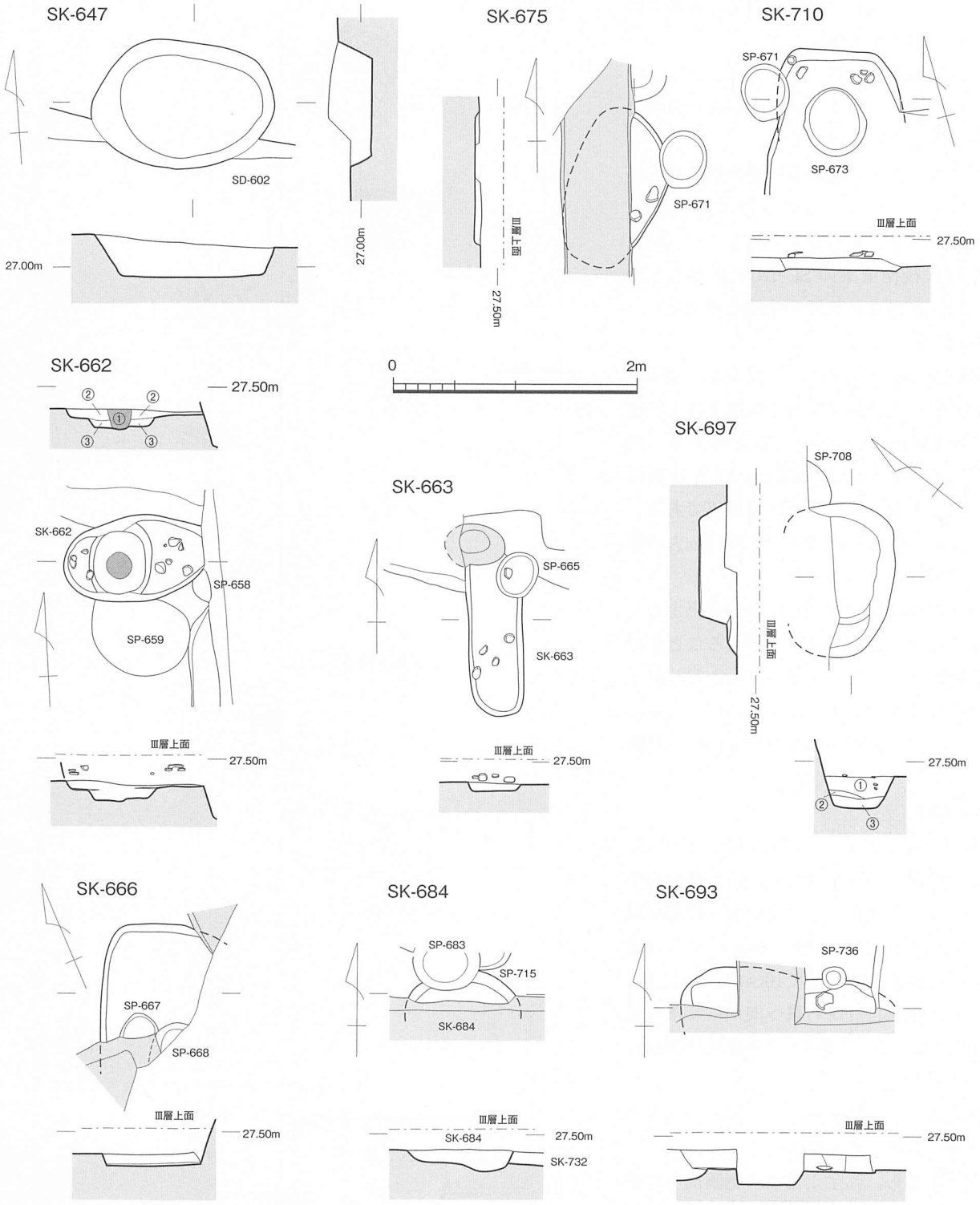


図147　B区 SK-647・662・663・666・675・684・693・697・710遺構実測図（縮尺1/50）

え、上部遺構に伴う可能性が高い。埋土の出土遺物は、破断面が磨滅した小片が多いが、いずれも弥生後期までの遺物で、埋土 a に分類できるので、SK-663は弥生後期の遺構と考えた。

SK-666

B区南東部の DH-31区に位置する。隅丸の長方形あるいは方形の土壙と考えられる（図147）。遺構の大半は調査区外へのびる。最深部で10cmを測る。SC-670を

切っている。底面はほぼ平坦で、底面ではSP-667・SP-668を検出した。

埋土は黒褐色砂質土で、直径２～５cmの花崗岩円礫や、径１cmほどのにぶい黄褐色砂質土塊が点々と混じる。

埋土から弥生土器の壺や甕の胴部破片が４点出土しているが、小片で図示できない。また時期的な特徴も明らかでない。しかし、弥生時代後期前葉のSC-670を切ることから、SK-666はそれ以降の土壙と考える。

SK-675

Ｂ区南端のDI-32区に位置する。SP-671に切られ、西半部は撹乱で破壊されているが、小型の隅丸方形の土壙と考える（図147）。残存長1.1m、幅30cm。深さは最深部で５cmを測る。底面はほぼ平坦である。

埋土は、黒褐色砂質土で、径10cm大の花崗岩の円礫が多く混じる。

埋土中から炭化物の小片が少量出土しているのみで、遺構の時期を考えることができる遺物は出土していない。しかし、埋土は埋土ａに分類でき、SP-671に切られることから、SK-675は弥生時代の土壙と判断した。

SK-684

Ｂ区南端のDH・DI-31区に位置する。大部分を撹乱で破壊されているため、北半部の一部しか残存していないが、径35cm以上の楕円形の小型土壙と考えられる（図147）。底面は、西半部で10cmほどの深さであるが、中央付近から東へ向かって落ち込み、最深部で18cmを測る。SP-683に切られ、SK-732を切っている。

埋土は、黒褐色砂質土で、径4～5cm大の花崗岩の円礫が点々と混じる。

埋土中から、弥生土器壺・甕胴部小片が10点ほど出土している。その中の１点は、北側に約2.5m離れたSK-739から出土した壺の破片と接合する（図169-５）。弥生中期後葉～後期初頭に比定できる。

埋土は埋土ａに分類でき、弥生中期後葉～後期のSP-683に切られること、出土遺物の接合関係から、弥生中期後葉～後期初

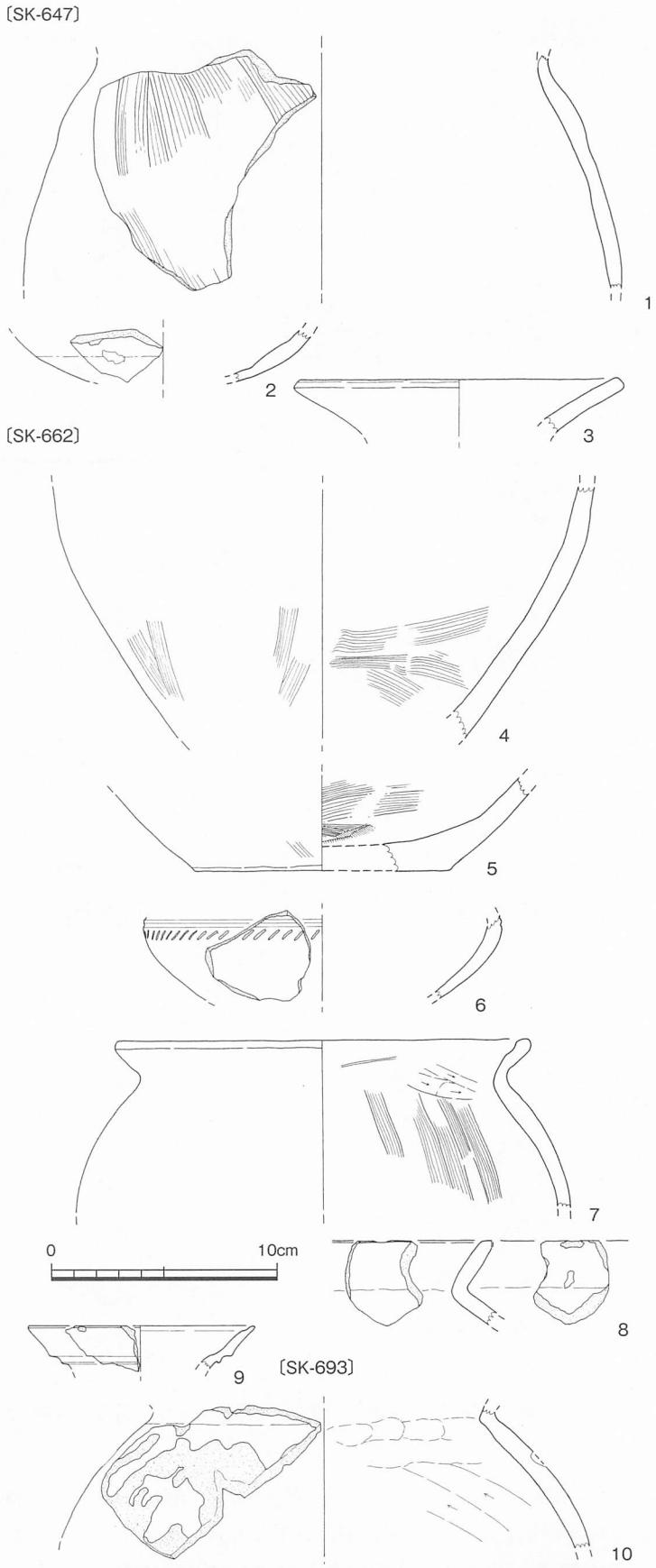


図148　Ｂ区SK-647・SK-662・SK-693出土遺物実測図（縮尺1/3）

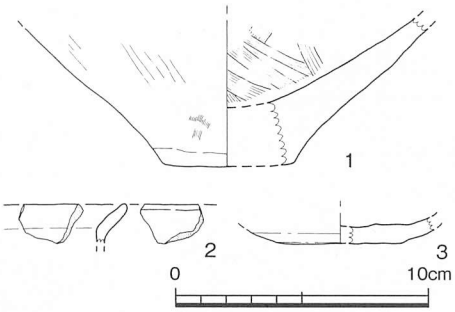


図149　B区 SK-663出土遺物実測図１（縮尺1/3）

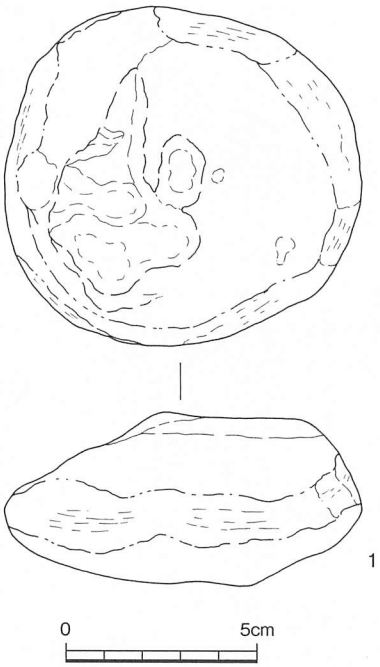


図150　B区 SK-663出土遺物実測図２（縮尺1/2）

頭の土壙と判断した。

SK-690

B区南端のDI-31区に位置する。一部を攪乱で破壊されているが、長辺3m、短辺２m、深さ45cmの隅丸長方形の土壙である（図151、図版29-２）。底面は、中央が緩やかに窪む。SC-687・713、SK-689・693・705、SP-677・678・702・709に切られ、SK-735を切る。

埋土でも上部は暗褐色砂質シルトである。これに対して、埋土下部は砂礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径１cm～10cmの明黄褐色・灰白色砂質土塊を大量に含む。

埋土上部には焼土や炭化物片が混じる。一部を水洗選別した。炭化物は、多くが一辺５mm未満の炭化物片だが、中には一辺１cmほどの木片がある。

遺物は、埋土上部で西半部を中心として出土している。出土遺物の接合関係を見ると、図152-１はSK-705・713出土の破片と接合する。６はSC-752を構成するSP-704やSK-705・713・725の破片と接合する。図153-４・９は古墳時代後期の掘立柱建物を構成するSP-688②～④層出土の破片と接合する。

図152-１は、壺で、図153-３と同一個体である可能性が高い。胴部中位に焼成破裂痕が残る。弥生中期後葉。２は、壺肩部片で、外面には重弧文が施文される。弥生前期のもので、混入品と考えられる。３は、壺の口縁部破片で、口縁端面に２条の凹線文が施される。４も壺の口縁部破片。口縁部直下に小さな楕円形でクレーター状に窪む焼成破裂痕が残る。５は平底の壺底部。６は、壺の下半部で、外面は焼成破裂痕が見られ、内面は焼成状態が悪く、暗灰色を呈する。底部側面には焼成不良の部分がみられる。

図153-１は甕の強く「く」字形に屈折する口縁部の破片。口縁端部を上方に摘み出す。２は壺の口縁部破片で、「ハ」字形に頸部がすぼまり、大きく口縁部が外反する。３は甕の底部から胴部下半にかけての破片で、底部は平底。４は甕の下半部で、底部はわずかに上げ底状を呈する。５～７も甕の底部片。上げ底というより脚台底に近い。８はわずかに上げ底状の甕の底部破片。９は、深鉢形のミニチュア土器。底部は上げ底状で、口縁部は端部を折り曲げ、外面側に折り込んでいるため、口縁端部に粘土紐を貼り付けたような形状を呈する。10は鉢の口縁部破片である。11も鉢の口縁部破片。口縁部は大きく屈曲する。

図154-１・２は砂岩の亞円礫を利用した台石である。１の上面と側面の一部には敲打痕が集中して残る。２の上面には研磨痕が観察できる。

この他、壺の肩部破片3点、上げ底の甕の底部破片５点、弥生土器の小片が約100点出土している。

以上の出土遺物は、弥生前期の壺の肩部片を除き、いずれも中期後葉に比定できる。また、切り合い関係からは、B区南半部の遺構の中でも最古段階に位置づけられる。以上から、SK-690は弥生中期後葉に比定できる。

SK-693

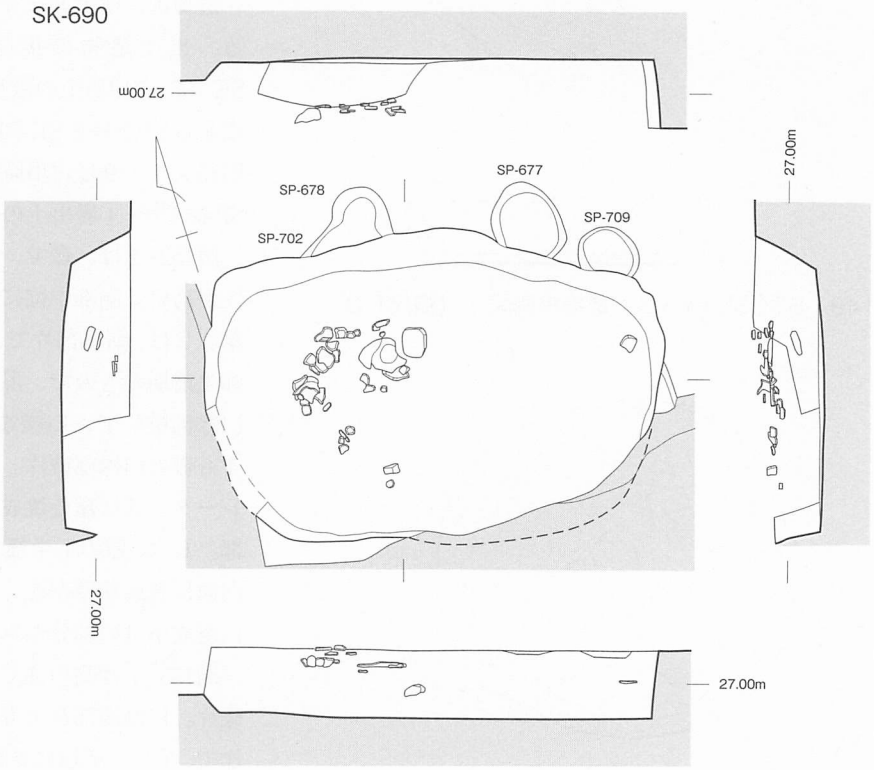
B区南端のDI・DJ-3区に位置する。攪乱溝を挟んで東西の残存部分を確認できた（図147）。調査段階ではSK-683としていたが、別遺構に同じ遺構番号を付

していることに気がつき、SK-693と遺構番号を変更した。南半部は撹乱で破壊されているが、長径1.8～２ｍの長楕円形の土壙と考えられる。深さは23cmを測る。底面には小さな凹凸がみられる。SP-736に切られ、SC-689、SK-690、SP-691を切っている。

埋土は２層からなる（図118）。上部の①層は、暗褐色砂質土で、灰白色砂質土が混じる。径１mm前後の砂礫や径１cm前後の円礫を含む。下部の②層は、砂礫と円礫が混じる暗褐色砂質土で、明黄褐色土のレンズ状ブロックが混じる。

埋土①層中から須恵器瓹（図148-９）、底面から浮いた状態で土師器の甕の胴部破片（図148-10）が出土している。９は、口縁端部に内傾する段をもち、外面には口縁部と頸部との境に鋭利な突帯をもつ。10は、SP-702から出土した破片と接合する。ともに古墳中期に比定できる。この他、弥生土器の壺や甕の胴部小片15点がある。また、埋土②層から、弥生中期～後期と考えられる壺や甕の胴部小片が各１点ずつ出土している。

以上、図示した須恵器瓹や土師器甕が遺構の時期を示す遺物と考え、SK-693は古墳中期の土壙と判断した。



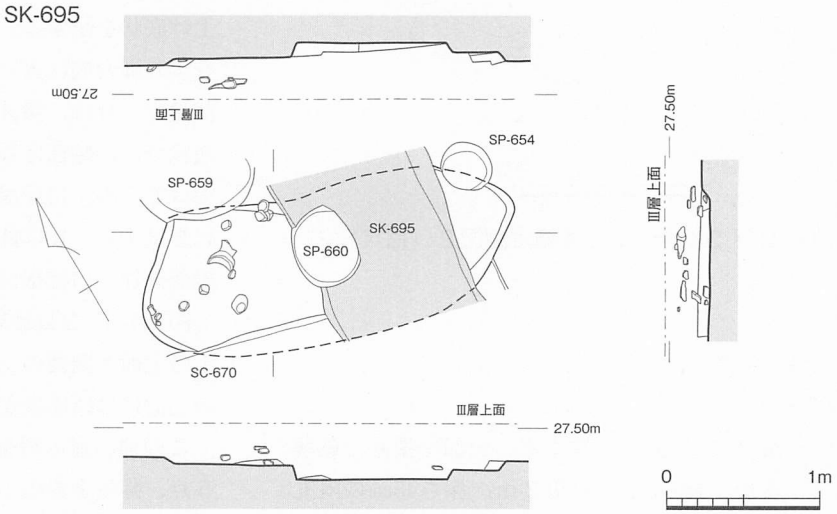


図151　B区 SK-690・695遺構実測図（縮尺1/50）

SK-695

B区南端のH-32区に位置する。長径２ｍ、推定短径１ｍ前後の歪な長方形の土壙である（図151）。SC-670、SP-654・659・660に切られ、SP-724・745を切っている。中央東よりを撹乱で破壊される。底面は西から東に徐々に低くなる。

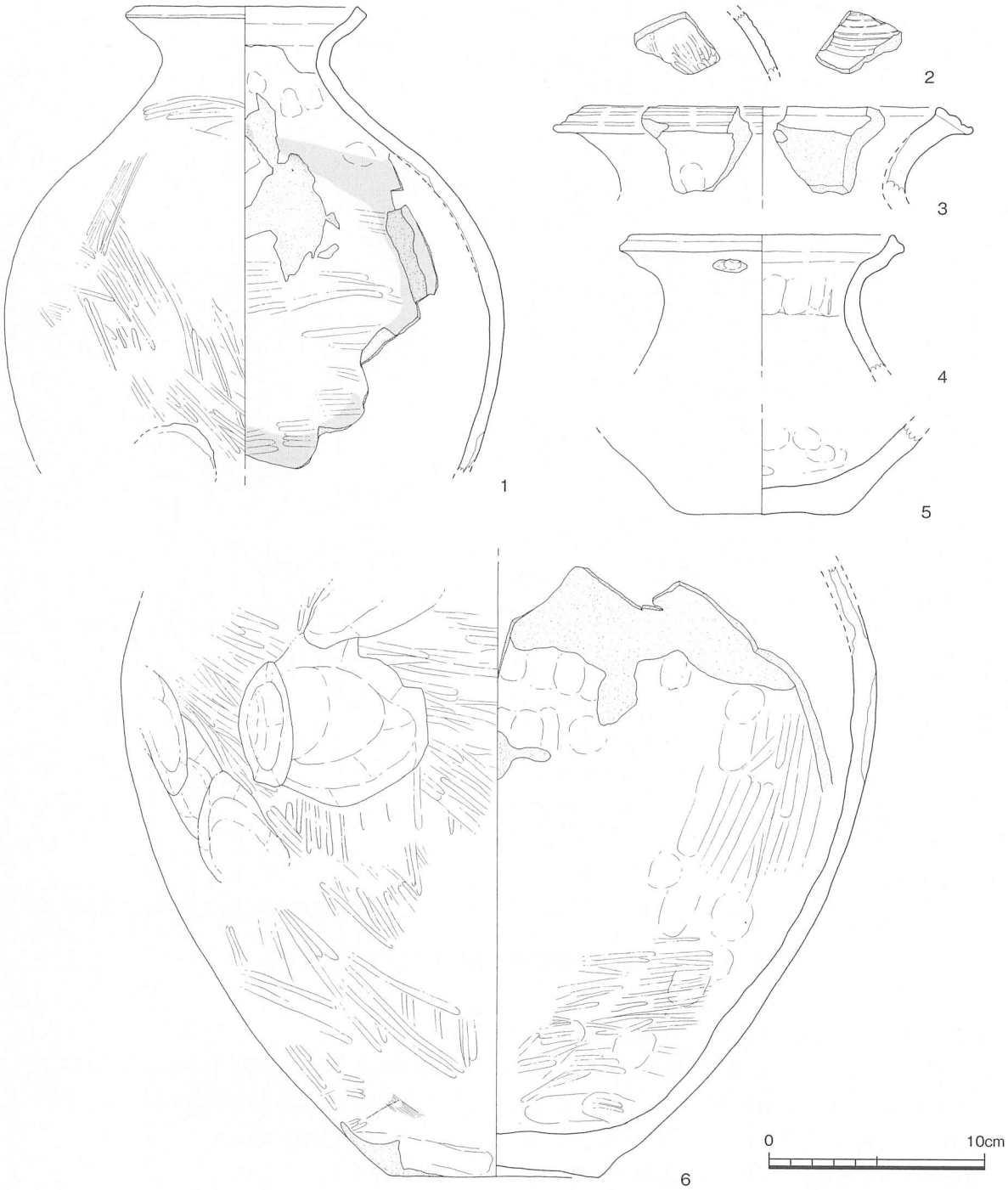


図152　B区 SK-690出土遺物実測図１（縮尺1/3）

埋土は、黒褐色砂質土で、不整形のにぶい黄褐色砂質土の大きな土塊が多く混じる。

出土遺物の多くは、西半部の埋土から底面より浮いた状態で出土している。弥生土器（図155-１・２・４～６）、花崗岩の円礫を利用した磨石（図156-１）がある。図155-１は、長頸壺の口縁部～肩部の破片で、口縁部は直立気味にのびた後、端部近くでさらに外反し、端部は尖り気味におさめる。２は、「く」字形に口縁部が屈折する甕で、口縁端部をわずかに上方へ摘み上げる。４は、大型壺の頸部破片で、外面に沈線文

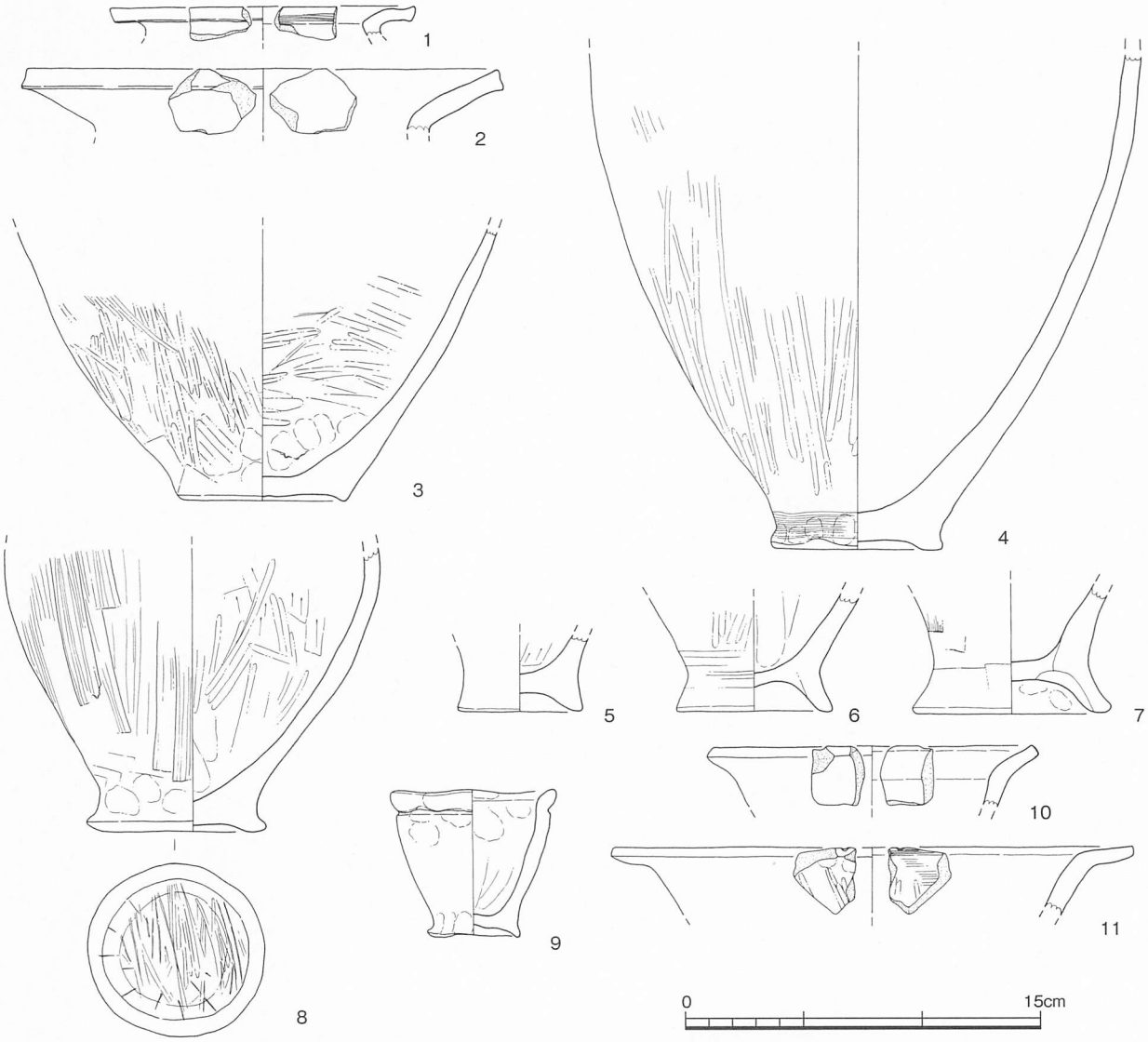


図153　B区 SK-690出土遺物実測図２（縮尺1/3）

４条が巡らされる。５は鉢の肩部片。６は、壺の底部の破片である。平底。この他、高坏の破片がある。２・６は弥生中期後葉～後期前葉に見られるもので、１・４・５は後期前葉に比定できる。

SK-695上面のⅢ層部分で出土した遺物として、図155-３がある。甕の「く」字形口縁の破片で、端部を上方に摘み上げる。この他、Ⅲ層部分からは、弥生土器の壺や甕の胴部破片13点、甕の口縁部小片２点、高坏の脚端部小片１点が出土している。甕の口縁部小片の１点は、「く」字形口縁で、端部を下方に摘み出す。弥生後期初頭のものと考えられる。

また、埋土とⅢ層部分から、炭化材が少量出土している。長辺１㎝、幅及び高さ５㎜ほどの炭化材が含まれる。

SK-695は、弥生後期前葉のSC-670に切られること、弥生後期前葉までの遺物が出土していることから、弥生後期前葉の土壙と考える。

SK-697

Ｂ区南端のDI-31・32区に位置する。調査区壁沿いで出土し、北側は調査区外にのびるが、長軸長1.2m前後の楕円形の土壙と考えられる（図147、図版30-１）。深さは26㎝で、南西部分がテラス状の底面となっている。SK-739とSP-708を切っている。

埋土上部の①層は黒褐色砂質シルト。②層は、黒褐色砂質シルトで、暗灰色砂質土が混じり、①層よりも明るい土色である。③層は、黒褐色砂質シルトで、多

量の暗灰色の粗砂、砂礫や小石が混じる。

遺物は①～③層の各層から出土している。とくに、①層の遺物が多い。

①層出土の遺物には、弥生土器の壺や甕の胴部小片数十点がある。その中で、図示できた遺物は、以下の５点である（図157- ５～11・13・14）。５・６は甕の胴部の上半部片で、「く」字形口縁がつくものと考える。７は壺の平底の破片、８は底部近くの壺の胴部下半の破片である。９～11は甕の底部片で、９は脚台状の上げ底、10・11は平底。13・14は高坏脚部片。14の脚裾には３条の凹線文が施されている。いずれも、弥生中期後葉～後期前葉の時間幅で捉えられる。

②層からは、弥生土器の壺の胴部破片１点が出土しただけである。

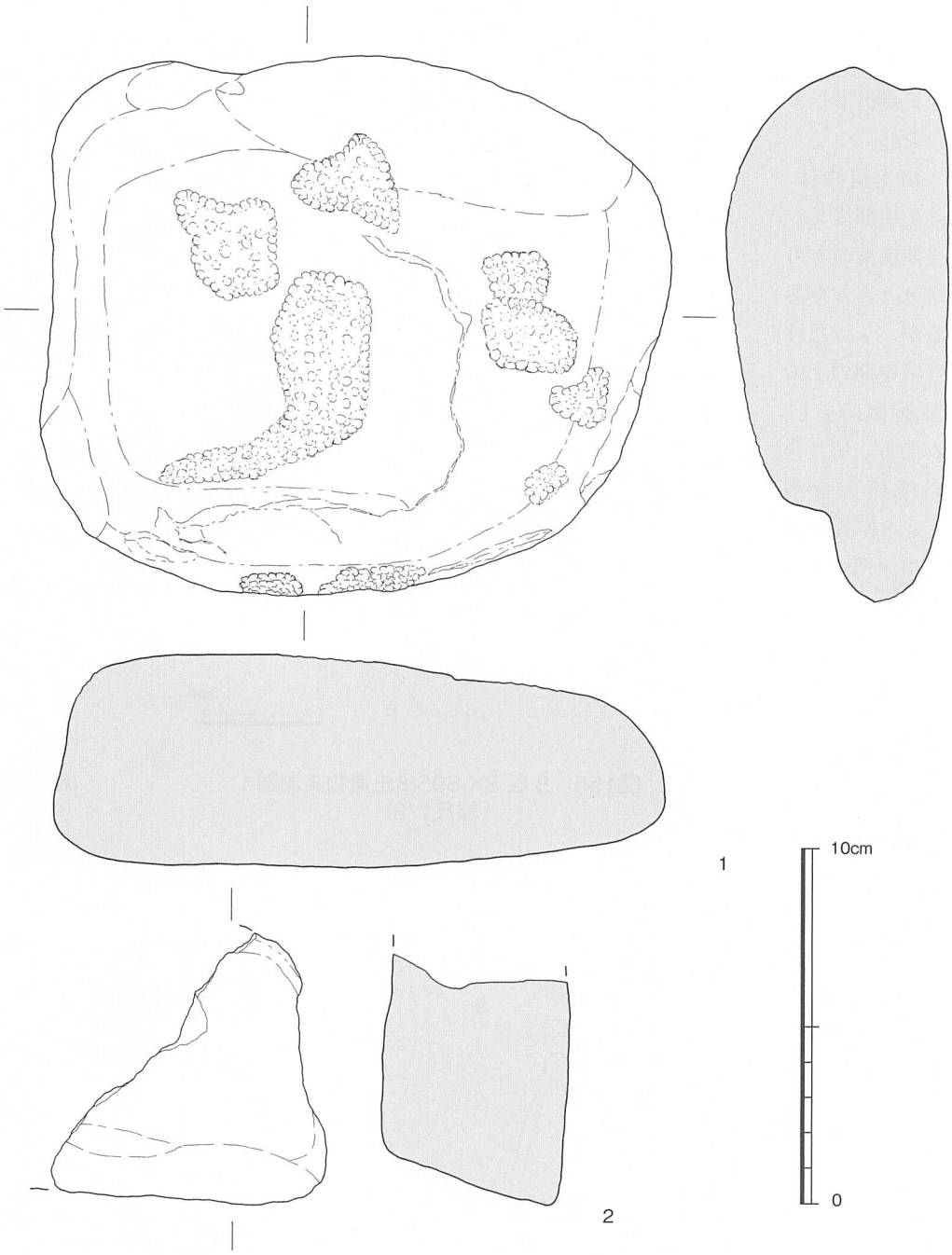


図154　B区 SK-690出土遺物実測図３（縮尺1/2）

③層からは、土師器や弥生土器の壺・甕の破片が８点出土し、３点を図示した（図157- １・２・４）。１は土師器甕の口縁部破片である。口縁先端付近の破片で、古墳中期に比定できる。２は甕の口縁部片。「く」字形に口縁部が屈折し、端部を上方に摘みあげる。口縁屈折部の内面には、沈線状の段が巡る。４は、壺の肩部破片で、頸部は直立気味に立ち上がる。

この他、埋土から出土した遺物には、弥生土器の甕（図157- ３）と鉢（図157-12）がある。３は、逆Ｌ字形に屈折する口縁部をもち、口縁端部を上方に摘み上げる。胴部中ほどにヘラ状工具を刺突して施す短斜線文が巡る。弥生中期後葉に比定できる。12は、逆Ｌ字形の口縁部をもち、端部は面取りする。弥生後期前葉に位置づけられる。また、SK-697の埋土から出土した破片の中には、下部の遺構であるSK-739の破片と接合するものも含まれる（図169-9）。さらに、①層

から炭化物米と考えられるものが１点出土している。

出土遺物は、弥生中期後葉～後期前葉のものがほとんどであるが、１点だけ古墳中期の土師器甕(図157- １)がある。切り合い関係も含めて、SK-697は古墳中期の土壙と考える。

SK-705

Ｂ区南半部のDI-31区に位置する。南半部を攪乱で破壊され

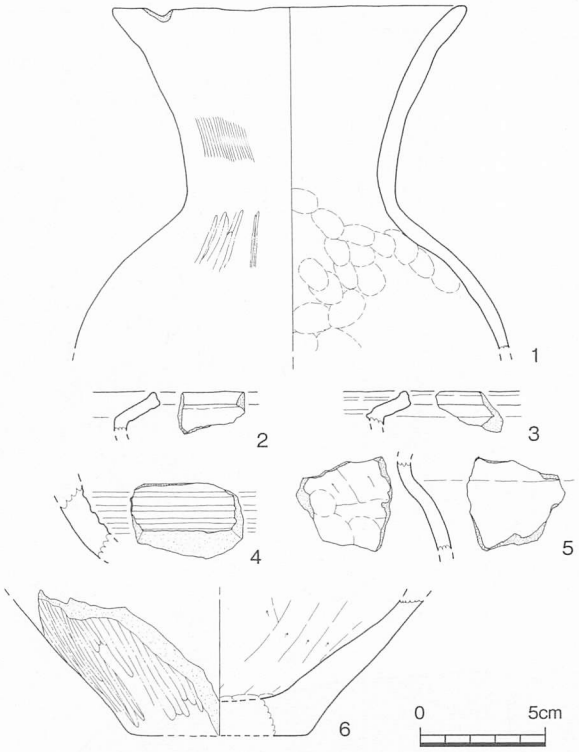


図155　Ｂ区 SK-695出土遺物実測図１（縮尺1/3）

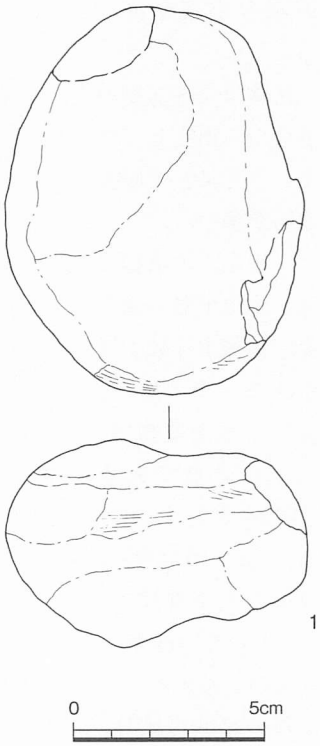


図156　Ｂ区 SK-695出土遺物実測図２（縮尺1/2）

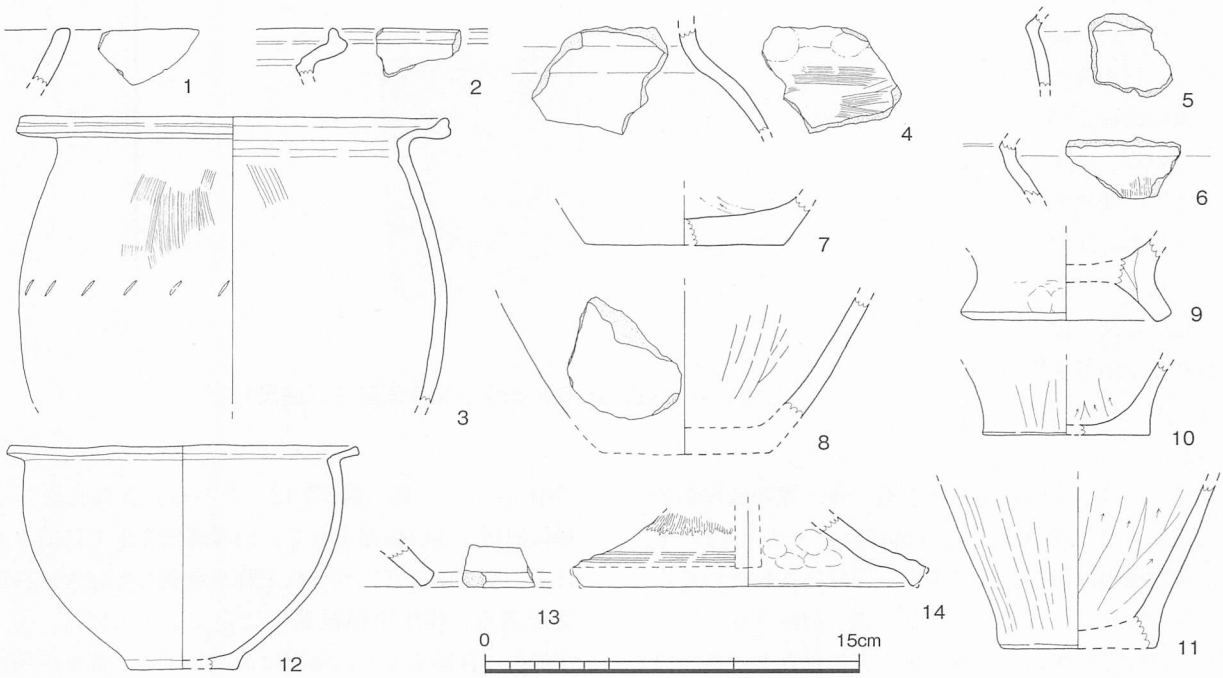


図157　Ｂ区 SK-697出土遺物実測図（縮尺1/3）

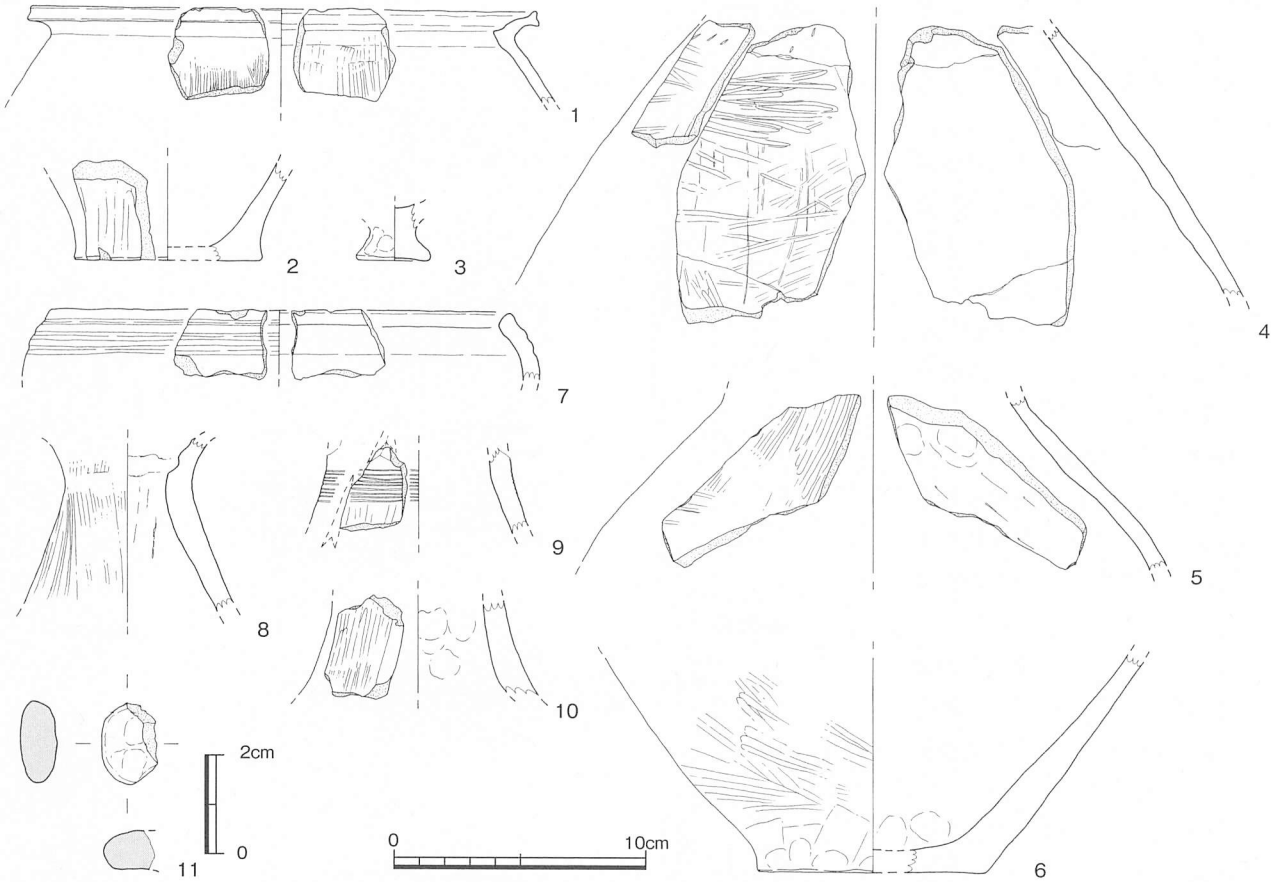


図158　B区 SK-705出土遺物実測図１（縮尺1/3、2/3）

ている。残存長1.1m、幅1.5m、深さ40cmを測り、不整な隅丸方形の土壙と考えられる(図159、図版31-１)。SK-713とSP-728を切り、SP-681に切られている。

埋土は、灰褐色砂質土を主体とし、黄褐色や明黄褐色、灰黄褐色の砂質土の径２cmほどの塊が大量に混じる。

遺物は床面から浮いた状態で、埋土上部から中位で、北から南にかけて放り込まれた状況で出土している。出土遺物を図158に図示したが、図158-３・８・９・11は埋土上部～中部から出土している。

図158-１は、弥生土器の甕の口縁部破片で、口縁部は「く」字形に屈曲し、口縁端面は凹線状に窪む。２は平底の甕の底部破片。３は、深鉢形のミニチュアの底部。裾が張った平底をもつ。４・５は壺の肩部破片で、４の肩部外面上部には刻目が施される。６は壺の平底破片。７は高坏の口縁部破片。緩やかに内湾する形態で、端部は面をなす。外面には３条の凹線文が巡る。８～10は高坏の脚部破片である。９は外面に９条の沈線を施し、沈線を挟んだ上下二段に千鳥状に未貫通の矢羽根状透孔を施す。10には長方形透孔が２ヶ所認められる。11は土製品で、欠損しており全体形は不明。いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。

図示した土器以外に、「く」字形に屈曲する甕の口縁部破片、外面にミガキ調整を施す胴部破片などが十数点、弥生土器と考えられる小片約70点がある。

出土遺物の接合関係を見ると、下部遺構のSK-690・713から出土した破片と接合するもの（図152-１・６）や直接切り合い関係のないSK-739から出土した破片と接合するものがある。

図160-１は堆積岩の円礫を利用した台石、２は堆積岩の台石である。

また、埋土からは不定形の炭化物片が出土した。水洗選別を行ったが、炭化物の微細片が確認されているにとどまる。

以上、出土遺物は弥生後期前葉までの時間幅で捉えられる。遺物の出土状況を見ると、埋土上部～中位に

放り込まれた状況が見られることから、SK-705は弥生後期前葉の土壙と考えられる。

SK-710

B区南端のDH・DI-32区に位置する。南半部をSC-670によって切り取られるが、長方形あるいは方形の土壙と考える（図147）。残存長55cm、幅90cm、深さ10cmを測る。SC-670、SP-671・673に切られている。

埋土は、黒褐色砂質シルトで、径2～3mmの丸い明黄褐色塊が少量混じる。花崗岩が風化して径1cm大の礫となったものが多くみられる。

出土遺物には、弥生土器の壺や甕の胴部破片、口縁部の細片約10点がある。いずれも遺構検出までのⅢ層部分からの出土。その中で、図161-1は、弥生土器の甕の胴上半部の破片である。2は、高坏の脚端部の破片で、端部を拡張して凹線文を2条施す。ともに弥生中期後葉に比定できる。

SC-670に切られること、出土遺物から、SK-710は弥生中期後葉の土壙と考えられる。

SK-711

B区南端のDH-31区のⅢ層上部で、弥生土器・石器・炭化物が径1mほどの範囲で集中して出土した。この時点では、遺構の掘り形を確認できなかったが、Ⅳ層上面で長辺1m、幅50cmの隅丸長方形の土壙を確認できた（図162、図版32-1）。深さは6～15cmで、底面は北に向かって徐々に深くなる。Ⅲ層部分で出土した弥生土器・石器・炭化物は、この土壙に伴うものと考えられる。SP-706に切られ、SP-714を切っている。

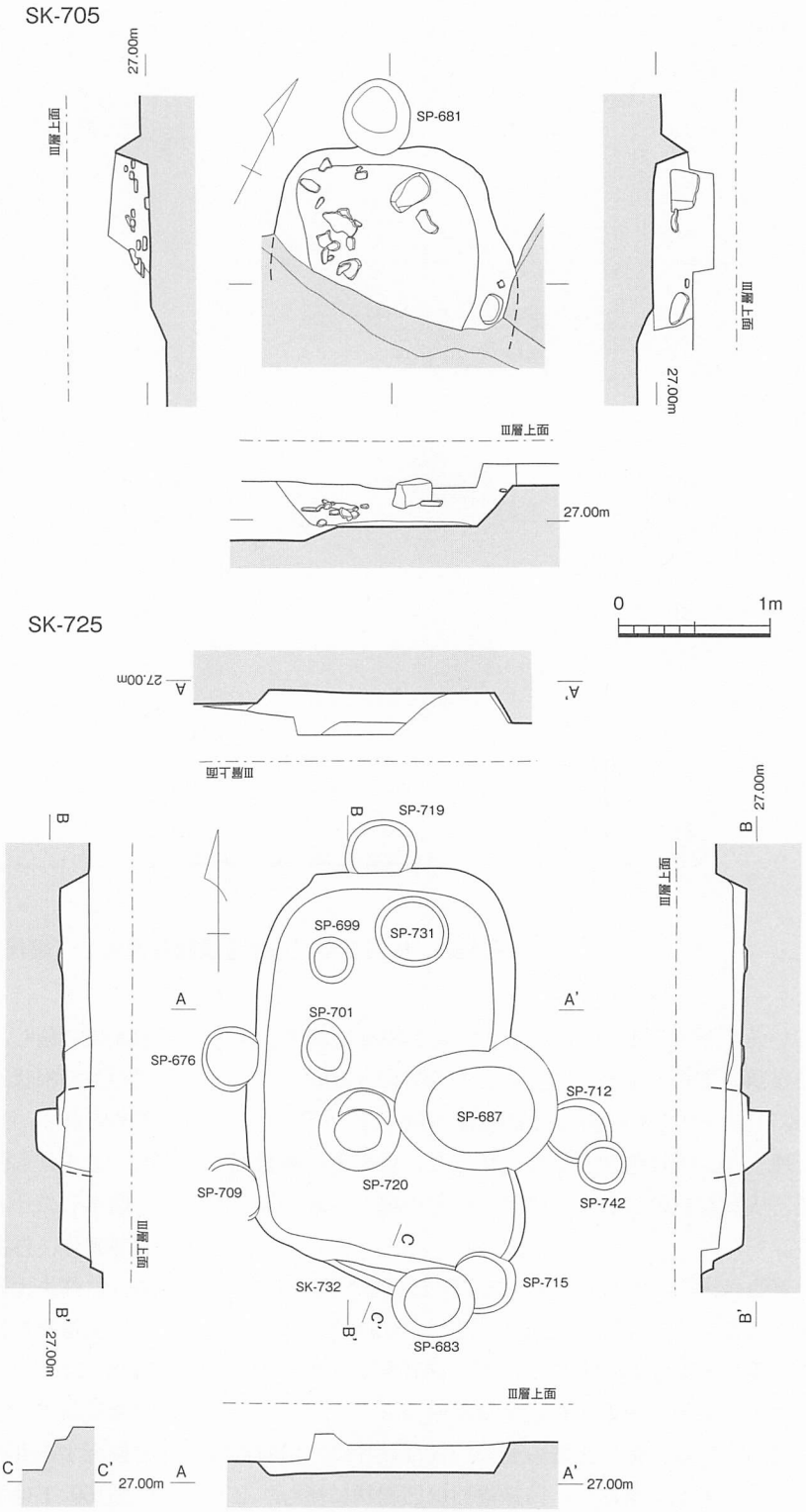


図159　B区SK-705・725遺構実測図（縮尺1/50）

埋土は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

SK-711の掘り形を確認する以前に、Ⅲ層中の炭化

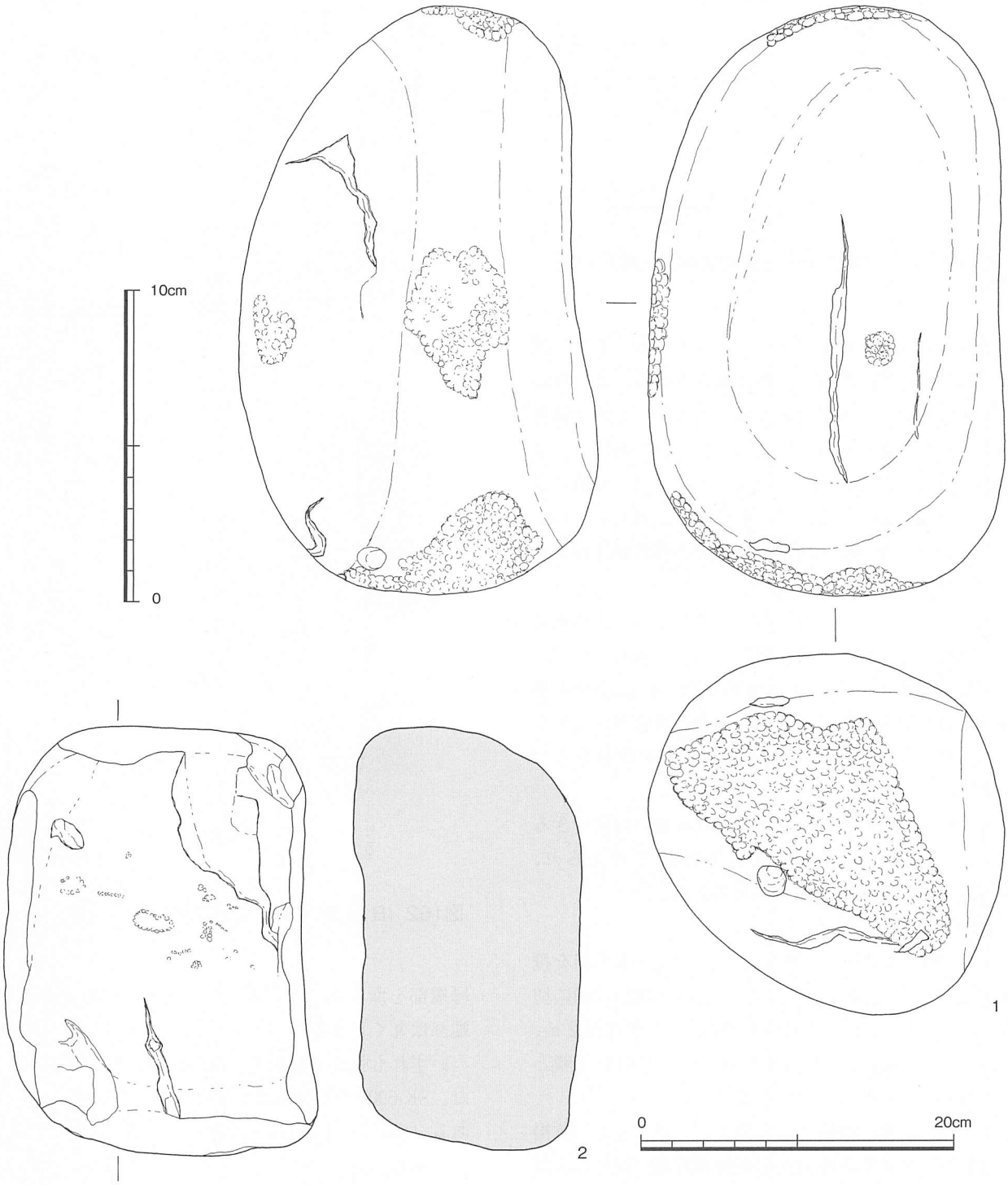


図160　B区 SK-705出土遺物実測図２（縮尺1/2・1/4）

物層とその下部から、100点近くの土器片が出土している。炭化物とともに一緒に廃棄されたと考えられる。

出土土器は、いずれも弥生土器である（図163）。１は、壺の頸部～肩部の破片で、頸部と肩部との境に刷毛目工具の小口部を押圧する短斜線文が巡る。２・３は壺の底部破片。２は平底、３はやや不安定な平底である。４・５は甕の口縁部破片。横ナデを施す結果、端部が外下方に突出する。６は、口縁部が上外方に短

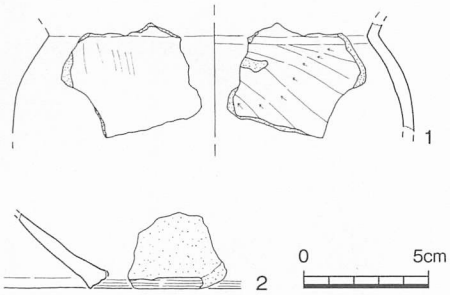


図161　B区SK-710出土遺物実測図（縮尺1/3）

くのび、端部をわずかに上方へ摘み上げる。７は、壺の口縁部破片で、端部は上方に摘み上げる。８・９は、甕の口縁部破片。８は端部を欠損するが、上方に摘み出す。９の端部は面取りされる。10・11は高坏。10は端部に面取り調整を施した口縁部の破片で、外面に３条の凹線文が施される。12は台付き鉢と考えた。いずれも、弥生中期後葉～後期前葉までの時間幅で捉えられる。

図164- １は砂岩の円礫を利用した叩き石。２は花崗岩の砥石。３は花崗岩塊を用いた台石である。

炭化物を持ち帰り、水洗選別した。長辺1.5cmを測る炭化材が目立つ程度で、５mm未満の炭化材が大半を占め、残存長辺1.5cmの種実や炭化米の可能性をもつ資料を各１点確認できた。

出土遺物は、弥生中期後葉～後期前葉に比定できるが、後出するSC-670が弥生後期前葉と考えられ、SK-711は弥生後期前葉の遺構と考える。

SK-713

B区南端DI-31区に位置する（図119）。南半部を撹乱で破壊され、SK-705、SP-677・681・702・709に切られ、SC-689・729・730を切っている。残存長２m、幅2.1m、深さ44cmの隅丸方形あるいは長方形土壙と考える。底面はほぼ平坦である。

埋土は、暗褐色砂質土を主体とし、径１cm大の黄褐色砂質土や灰黄褐色砂質土の土塊が大量に混じる。径２cm大の円礫の砕片が多く含まれる。床面付近から炭化物がかたまって出土した。

遺物は埋土中から出土している。弥生土器の壺や甕の胴部破片約20点がある（図165）。１は、甕あるいは鉢の胴部上半の破片である。頸部で大きく外方に屈曲する。２は甕の胴部上半の破片。３は甕の上げ底の底部片である。４は、鉢あるいは高坏の口縁部片で、口

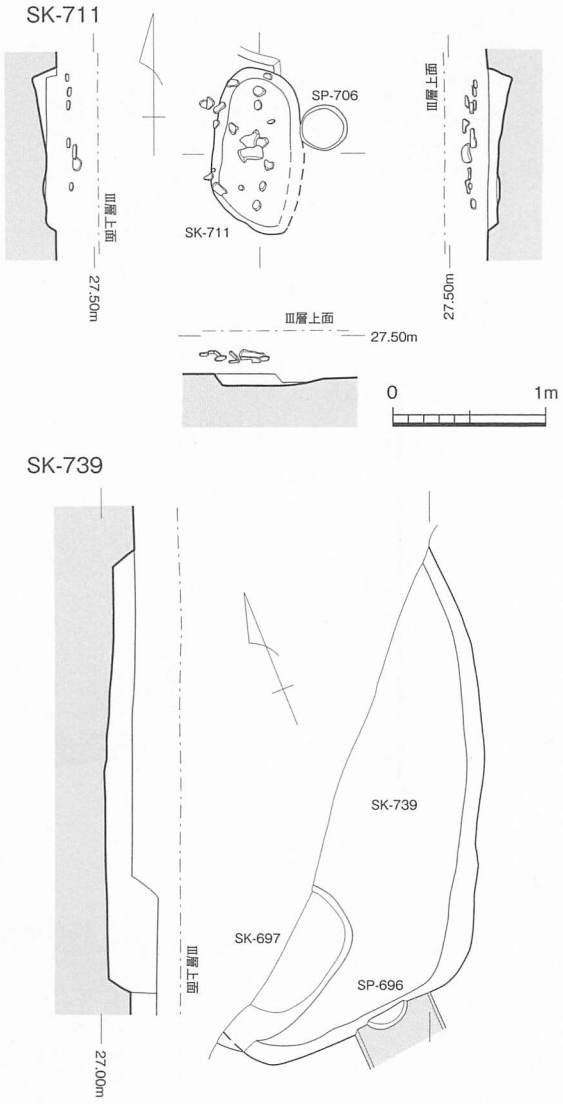


図162　B区SK-711・739遺構実測図（縮尺1/50）

縁端部を面取りする。５・６は、鉢の口縁部破片で、端部は丸くおさめる。

いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。また、SK-690・705から出土した破片と接合するものもある（図152－１・６）。これらは下部遺構からの混入品である。

出土遺物から、SK-713は弥生後期前葉の土壙と考える。

SK-725

B区南端のDH・DI-31・32区に位置する。長辺2.5m、短辺1.7m、深さ28cmの隅丸長方形の土壙である（図159、図版31- ２）。SC-729・730とSP-718・722・723を切り、SC-670、SP-676・683・687・699・700・

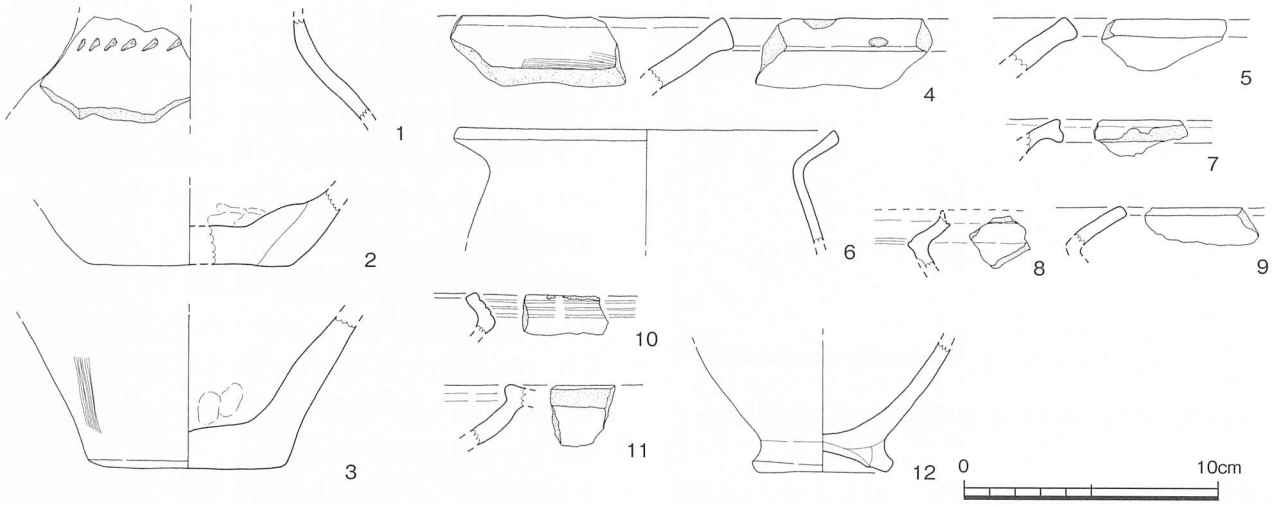


図163　B区 SK-711出土遺物実測図１（縮尺1/3）

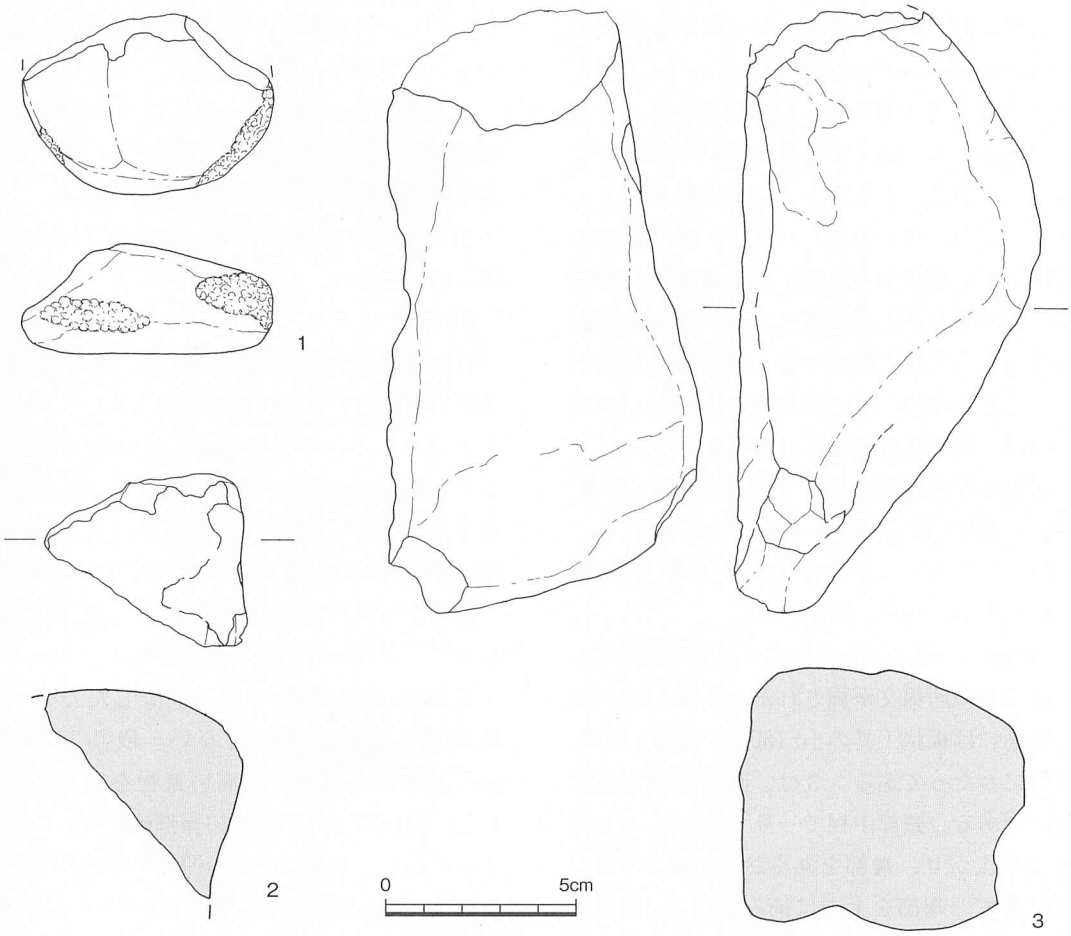


図164　B区 SK-711出土遺物実測図２（縮尺1/2）

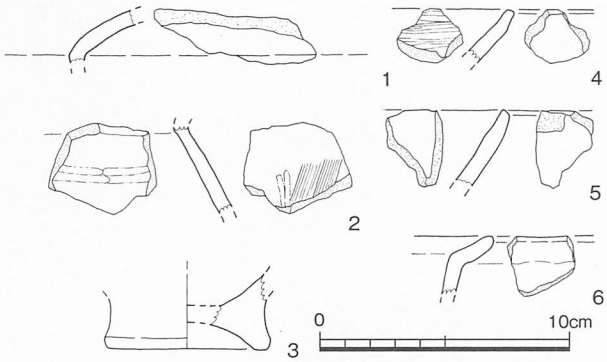


図165　B区SK-713出土遺物実測図（縮尺1/3）

701・709・715・719・720・731に切られる。SK-732とも切り合うが、先後関係は不明である。底面は平坦で、目立った凹凸はみられない。

埋土上半部は黒褐色砂質シルト。下半部には親指先～拳大のにぶい黄褐色砂質土の小塊が多く混じる。

遺物は、埋土上部、中部、下部、最下部で取り上げを行っている。図166に示した遺物の中で、1・5・9・15・17は埋土上部、2・6・11・13・14は中部、4・18は下部、3・8・16・19・20は最下部から出土している。この他に、埋土として取り上げた遺物に、7・10・12がある。また、埋土上部から弥生土器の壺や甕の胴部破片20数点、中部から弥生土器の壺や甕の胴部破片約5点、下部から40点弱の弥生土器の壺や甕の胴部小片、最下部から弥生土器壺や甕・鉢の破片十数点が出土し、埋土として取り上げた遺物には弥生土器の壺や甕の口縁部、胴部細片が約8点ある。

出土した遺物の接合関係を見ると、上部遺構であるSC-670と接合関係にあるもの（図166－9）や、SK-690・705・713、SP-704から出土した破片と接合するもの（図152－6）が含まれている。

図166-1は、壺の口縁部から頸部にかけての破片で、口縁端面には3条の凹線文が施される。2は、壺の肩部破片で、外面には板状工具の小口部分を押捺した短斜線文が2段にわたって巡る。3は、直口壺の口縁部～頸部の破片である。頸部中程で一旦すぼまり、口縁部が少し外方に広がり、端部を丸くおさめる。4は、甕の口縁部破片で、端部を上方に摘み上げる。5は、甕あるいは鉢の口縁部破片で、口縁端部を面取りする。6は鉢の口縁部小片で、端部をわずかに上方に摘み上げる。7は、甕あるいは鉢の口縁部破片で、口縁端部を面取りする。8は、甕の口縁部破片で、口縁端部を面取りする。9は、甕の口縁部～胴部上半の破片で、口縁端部を上下に拡張し、横ナデ調整を施す。肩部に刺突による短斜線文を施文する。10・12は甕の胴部上半部の破片。11は、鉢の胴部破片である。13は鉢の胴上半部の破片。口縁下端部の一部が残存し、外方に突出する。14は、壺の底部近くの胴下半部の破片。15は、壺の底部破片で、外表面が剥離している。16は平底の壺の底部破片。17は、高坏の坏部破片で、口縁部は直立し、端部は面取りされている。18は、比較的大型の高坏の脚部破片と考えられ、内面には円盤充填を伺わせる粘土の貼り付け痕が残る。19は、高坏の脚端部の破片で、脚裾に凹線文が4条巡り、上部には未完通の矢羽根状透かしが施される。20も高坏の脚裾部の破片で端部を欠損する。

以上の出土土器は、いずれも中期後葉～後期前葉の時間幅の中で捉えられる。

また、埋土上部とSP-720周辺から炭化物片が出土している。炭化物片の中には約1㎝四方のやや大きめの炭化材が数点みられる。

以上の他に、切り合い関係にあるSK-732と帰属が曖昧になった遺物がある（図167・168）。これらも、弥生後期前葉までの時期幅で捉えられる。

出土遺物の検討から、SK-725は弥生後期前葉の土壙と考えられる。

SK-732

B区南端のDI-31区に位置する。SK-725と切り合う。遺構の切り合いに気づかず調査を進めたが、底面の高さが違うことから、別遺構としてSK-732とした。掘り形の50㎝ほどしか残っておらず、SK-725に切られると考えたが、確定はできなかった。SK-666・684、SP-683・715に切られている。底面はほぼ平坦である。

撹乱部の壁面で埋土を確認した。埋土は、黒褐色砂質土で、炭化物片が点々と混じる。

遺物は、SK-725と一緒に調査したため、SK-732に帰属する遺物は明確でない。取り上げ状況から、SK-732に伴う可能性が高い遺物を図167・168に図示した。図167-1は、壺の口縁部破片で、口縁端部を上下に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。2は、壺の肩部破片で、頸部の付け根に低いベルト状の突帯を貼り付ける。3は、甕の口縁部破片で、端部は外方にわずかに摘み出す。4～6は甕の胴上半部の破片。4は口縁屈折部の内面に浅い段状の沈線が巡る。5は口縁屈折部の少し下方に突帯を巡らせる。6は、頸部の付

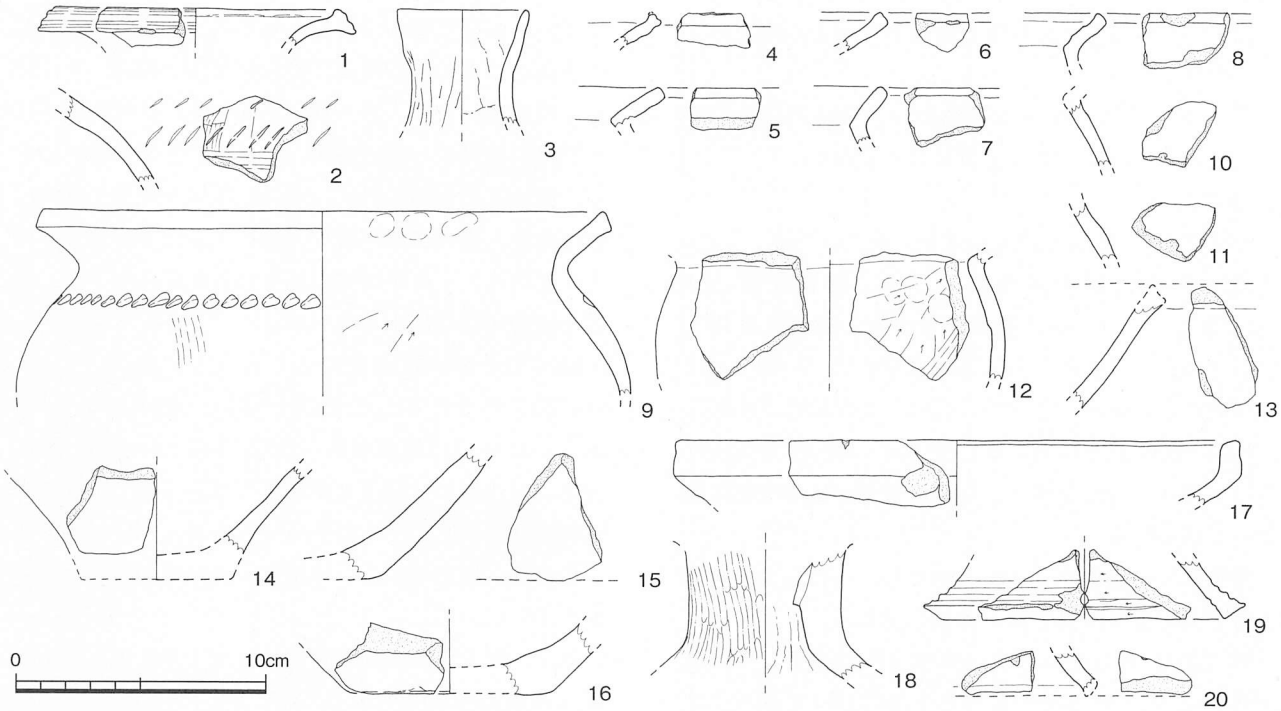


図166　B区SK-725出土遺物実測図（縮尺1/3）

け根に指頭による刻目を施した突帯を貼り付ける。7は平底の壺の底部片。図168-1は緑色片岩の剥片である。

出土土器は、いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。SK-725との切り合い関係からも、SK-732は当該期の土壙と考えられる。

SK-733

B区南部のDI-31・32区のSC-730の床面で確認した。掘り形は判然としていない。浅い土壙で、SC-730の壁面の崩れ土部分である可能性もあるが、埋土の質が若干異なるので、SK-733とした（図121）。SC-729・730、SK-739に切られる。

埋土は、黒褐色砂質土で、砂性が強い。埋土aに分類できる。

遺物は出土していない

埋土の特徴と切り合い関係から、弥生後期前葉以前の土壙と考えておきたい。

SK-735

B区南端のDI-31区に位置する。南北方向に25cm程の掘り形ラインが確認されたのみで、形状については不明(図121)。深さは17cm。SK-690・705・713に切られる。

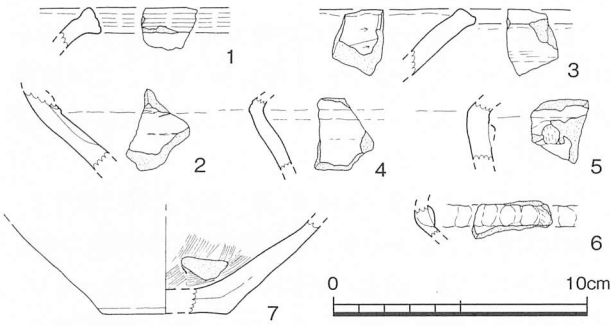


図167　B区SK-725あるいはSK-732出土遺物実測図1（縮尺1/3）

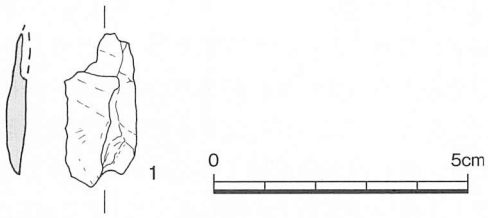


図168　B区SK-725あるいはSK-732出土遺物実測図2（縮尺2/3）

埋土は、暗褐色砂質土と黄褐色砂質土の不定形の塊が混じりあう。埋土aに分類できる。径1～3㎜の砂

礫が含まれる。

埋土中から弥生土器の壺の胴部破片が１点出土しているだけである。

切り合い関係と埋土の特徴から、SK-735は弥生時代中期後葉～後期前葉の遺構と考えておく。

SK-739

Ｂ区南部のDI-31・32区の調査区壁沿いで出土した。遺構の大半は調査区外にのびる。調査段階にはSK-705としていたが、遺構番号が他の遺構と重複していたことに気づき、SK-739に変更した。一辺３ｍほどの隅丸形の土壙と考える(図162、図版30)。SK-697、SP-674・696・708に切られ、SP-698・SK-733を切っている。深さは33cmを測り、底面は緩やかに中央部に向かって低くなる。

埋土は、灰褐色砂質土を主体とし、小指先大の黄褐色や明黄褐色の砂質土塊が大量に混じる。

SK-735からは100点以上の弥生土器が出土している(図169)。埋土の上部～中部と下部に分けて取り上げている。埋土でも下部から出土した遺物は図169-４～７・10・15・16、上部～中部出土のものは１・３・８・９・11～13・17である。

出土した遺物の接合関係を見ると、９はSK-739を切るSK-697出土の破片と接合する。また、13は直接的な切り合い関係にないSK-705出土の破片と接合関係にある。

埋土下部出土の図169-４は、甕の胴上半部の破片で、外面には刷毛目工具の小口部を押捺して短斜線文を巡らす。５は、甕の胴部～底部の破片で、平底。６は、壺底部付近の破片である。７・10は、甕の口縁部破片。７は内湾するタイプ、10は口縁端部を拡張して端面に２条の凹線文を施す。15は平底の甕の破片。16は、高坏の脚部破片で、外面上部に7条の沈線文、下部に矢羽根状透しが施される。この他、図化していないが、平底の底部破片、ミガキ調整を施す小片８点、刷毛目調整を施す小片４点ほか約50点の胴部破片が出土している。７・10・15・16は弥生中期後葉～後期前葉に比定でき、他も同じ時間幅で捉えられるものである。

埋土上部～中部出土の図169-１は、壺の頸部破片で、屈曲部外面に幅広で低い突帯を貼り付けて刻目を施す。３は甕あるいは壺の小破片。８は、甕の口縁部破片で、口縁上面がやや内湾する。９は、甕の口縁部～胴部上半の破片である。口縁部の内外を横ナデ調整した結果、口縁端面が凹線状に窪む。11・12は、甕の胴部上半～口縁部下半の破片。13は、甕の胴部下半の破片で、外面には煤が付着し、下半部は被熱に伴う表面の剥落が目立つ。17は高坏の脚裾付近の破片。１は弥生中期後葉～後期、８・９は中期後葉～後期初頭、11～13は中期後葉～後期前葉、17は後期前葉に比定できる。図示したもの以外に、端面に凹線文を施す壺の口縁部破片、甕の口縁部破片、櫛状工具による刻目を施す胴部破片、ミガキ調整が施される胴部破片７点、胴部小片約50点が出土している。

SK-739上面のⅢ層部分から出土した遺物として、SK-739に伴うと考えた壺の肩部破片（図169-２)、甕あるいは鉢の口縁部破片（図169-14）がある。２は、頸部の付け根には刺突文が施文される。14の口縁端部は面取りされる。ともに弥生後期中葉に比定できる。

この他、埋土中から、小指先大の不定形の炭化物片が出土している。

以上、埋土下部の出土遺物は弥生中期後葉～後期前葉の時間幅で捉えられるので、SK-739は弥生後期前葉の遺構と考える。

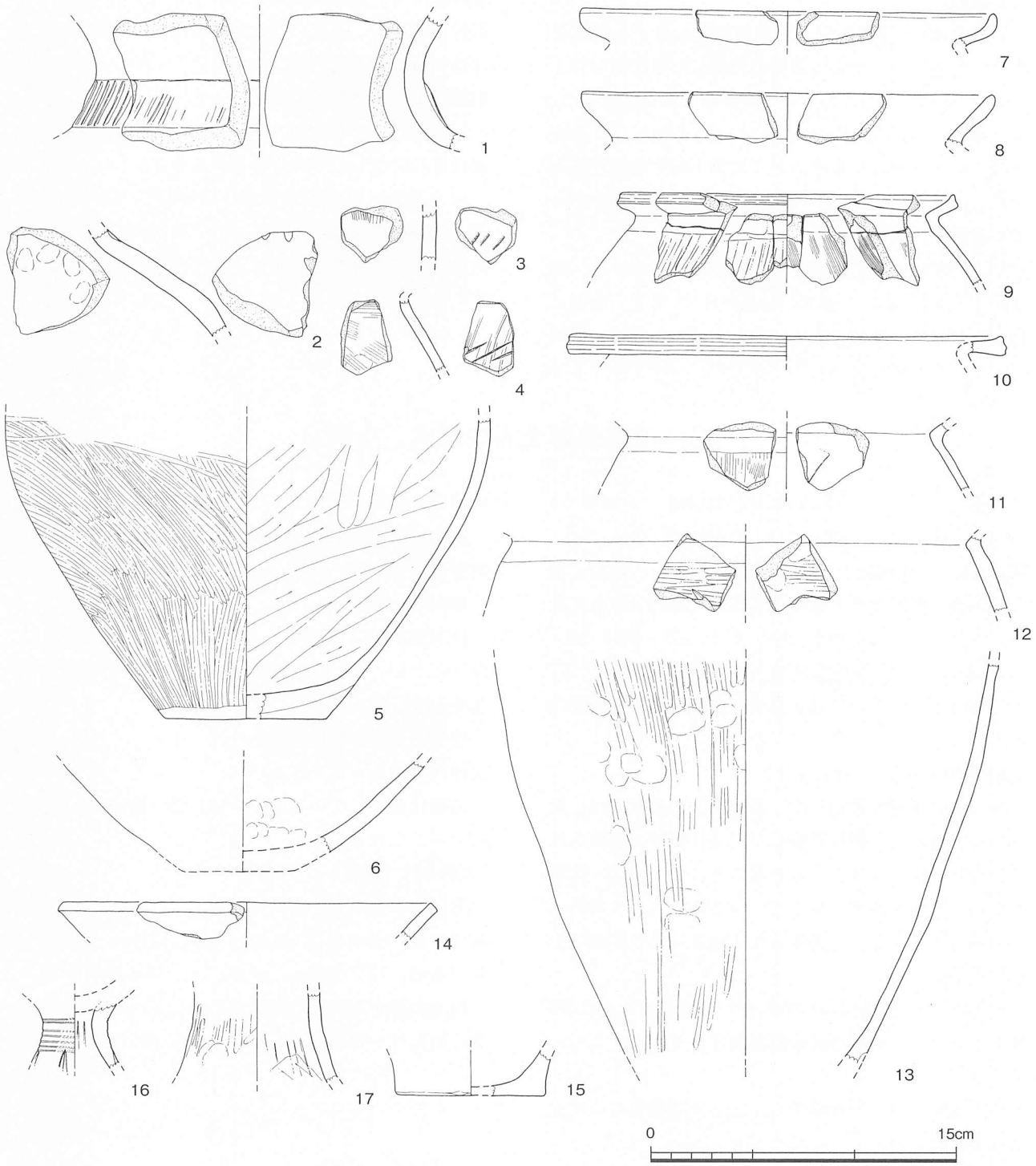


図169　B区 SK-739出土遺物実測図（縮尺1/3）

6　炭化物集積

SX-669

Ｂ区南端のDI-31区で、Ⅲ層を精査しながら掘り下げていく過程で、径５cm未満の角張った炭化物片や土器片が、約50cm四方にわたって広がる状況を確認した。掘り形ラインなどは認められず、SX-669として遺物の取り上げや記録化を進めた。Ⅳ層上面でも掘り込みを伴った遺構は確認できなかったので、掘り形があってもⅢ層中に収まるものと考えられる。

SX-669では、弥生土器片が約30点出土している（図170-１～３）。１は、甕の口縁部破片で、「く」字形に折れる口縁で、端部を上方に摘み上げる。２は、壺の肩部破片で、外面に刷毛目工具の小口部を押捺した短斜線文が巡る。３は、甕の肩部破片で、頸部との境には強い横ナデ調整が施されて凹む。いずれも弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。

SX-669周辺の土を水洗選別した。長辺１cm、幅４mmほどの炭化した木材片などがある。

出土遺物は弥生中期後葉～後期初頭のものであるが、SX-669の下部で出土したSC-670が弥生後期前葉に位置づけられることから、後期前葉以降の遺構と考えられる。

7　立柱痕跡をもつ柱穴、小穴

Ｂ区では多くの小穴が出土している。その中で、SP-608・626・656・683・715・716・723・724・731・737では、立柱痕跡を確認できた。しかし、周辺に掘立柱建物や柵列などを構成する柱穴や杭穴はみられない。これらに、SP-607・609・611・637・659・661・702を加えて、代表的な柱穴・小穴として報告する。この他の小穴については、巻末の遺構一覧表を参照されたい。

SP-607（図171、図173-１）

SC-606の床面で検出した。長径74cm、短径70cm、深さ12cmの楕円形の掘り形をもつ。立柱痕跡は確認されていない。埋土は埋土ａに分類でき、上下の①・②層ともに、黒褐色砂質シルトで、径２mm大ほどの角張った小礫を多く含む。②層の方が①層より黒みが強い土色である。

埋土中から、弥生後期前葉の壺の口縁部破片１点（図173-１）を含む、壺や甕の胴部破片５点が出土している。

出土遺物と埋土の特徴から、弥生後期前葉の小穴と考えておく。

SP-608（図171）

DH-38区で出土した。SC-605を切る。径42～45cm、深さ15cmの円形掘り形をもち、北東よりで径19cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、砂礫が多く混じる。

遺物は出土していないが、埋土に砂礫が多く混じる特徴と、切り合い関係から古墳後期の遺構と考えた。

SP-609（図171）

DH-38区に位置する。東半部は撹乱で破壊され、SC-605を切っている。径56cm、深さ10cmの円形の掘り形をもつ。

埋土上部の①層は黒褐色砂質シルト。②層は、①層に比べて茶色みをおびる。

遺物は出土していないが、切り合い関係から古墳後期と考えられる。

SP-611（図171、図172）

Ｂ区北半部のDH-39区に位置する。西半部は撹乱で破壊され、南半部はSD-604・610に切られ、全形は不明である。残存径46cm、深さ2.5cmの掘り形をもつ。

埋土上部から29点の遺物が出土している。多くは近現代の瓦片や陶磁器・土器片である（図172-１～11）。

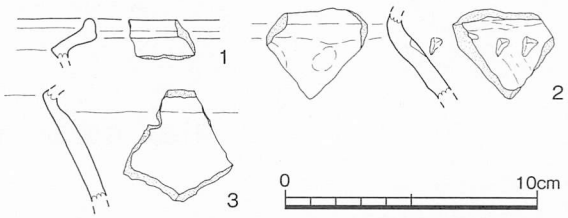


図170　Ｂ区SX-669出土遺物実測図（縮尺1/3）

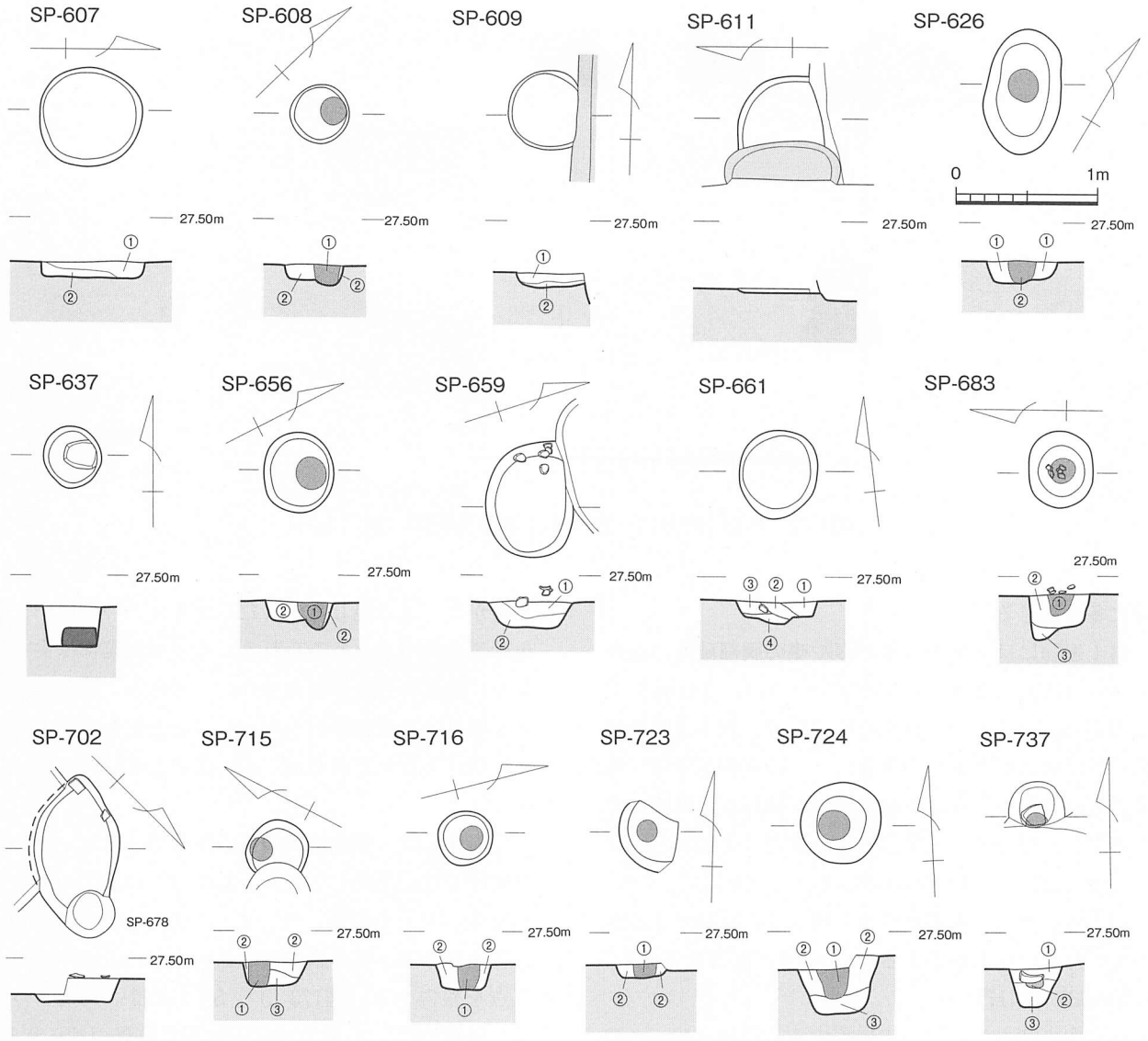


図171　B区 SP-607・608・609・611・626・637・656・659・661・683・702・715・716・723・724・737遺構実測図（縮尺1/50）

1・2は、須恵質土器の壺または甕の胴部破片で、いずれも古代の遺物である。3は、備前焼の壺の口縁部破片。口縁端部は丸く折り曲げられ、玉縁状を呈する。4は、古代の土師器皿の底部破片。6は、陶器の鉢の口縁部破片で、口縁部内面に突帯が巡る。5・7・8は擂り鉢。5は陶器。口縁端部を外方に拡張する。7・8は備前焼。7は、口縁部片で端面に2条の凹線が施され、内面下半部に擂り目が施される。8は、胴部破片で、内面に7条1単位の擂り目が施される。9は、陶器製の人形で、胴部は中実。10は陶器の蓋。天井部に直径約2㎝のつまみをもつ。11は陶器の壺口縁部片。端部は面取り気味に丸くおさめられる。他に、赤色頁岩の剥片と、鉄滓1点が出土している。

SP-611は、出土遺物から近世・近代に下る遺物がある。しかし、切り合い関係からは古墳後期以前と考えられる。

SP-626（図171、図174-3～6）

B区のほぼ中央部のDH-35・36区で出土している。長径90㎝、短径53㎝、深さ16㎝の長楕円形の掘り形をもち、中央部で径19㎝の立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡にあたる①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、小石や砂礫が非

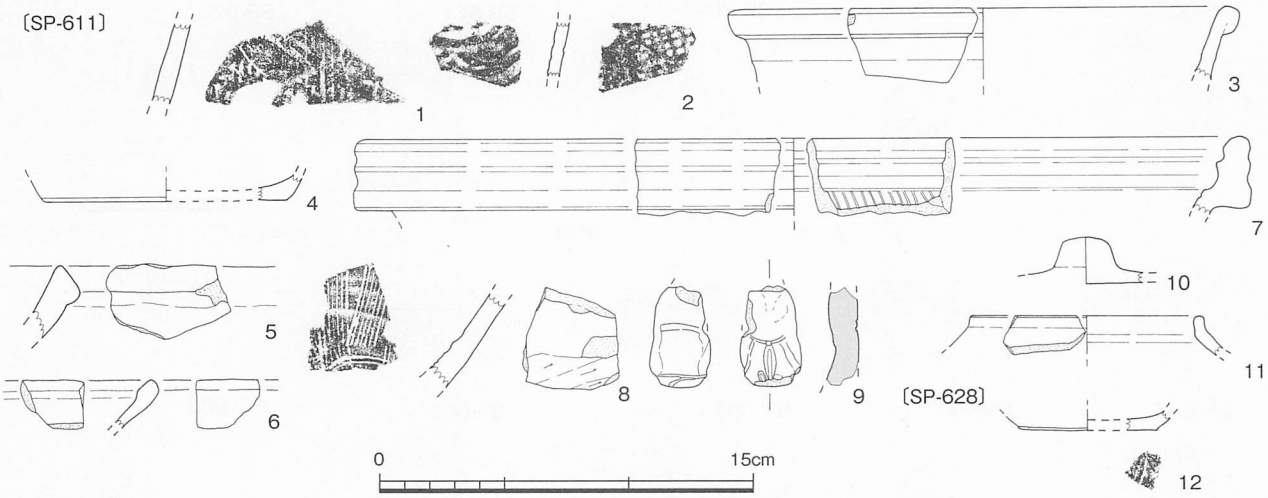


図172　B区 SP-611・628出土遺物実測図（縮尺1/3）

常に多く混じる。

出土遺物には、弥生土器の壺や甕の胴部破片13点がある。４点を報告する（図174- ３～６）。３は弥生土器の壺の肩部破片、４は甕の底部に近い胴下半部の破片、５は鉢の肩部破片である。いずれも弥生中期～後期のものである。６は口縁部が短く伸びる土師器の甕である。古墳後期に比定される。また、②層から近代の瓦片、弥生土器の甕の小片が出土している。

埋土の特徴は、黒褐色であり埋土ａに分類できるが出土した近世の遺物があるので、近世の柱穴と考える。

SP-637（図171）

Ｂ区中央部のDH-36区に位置する。径40～43cm、深さ28cmの歪な円形の掘り形をもつ。

埋土は砂礫が多く混じる灰褐色シルトで、埋土ｃに分類できる。底面に礎板と考えられる長辺25cm、最大幅25cm、厚さ11.6cmの扁平な花崗岩が据えられている。

遺物は出土していないが、埋土の特徴から、古代以降の柱穴である可能性が高い。SP-637の北側には、近世と考えられるSB-743が存在する。掘立柱建物を構成する柱穴には、SP-637同様に根石が据えられている。このことから、調査区西側にかけて、SP-637を伴った掘立柱建物が展開していると考えられる。

SP-656（図171、図173- ３～５）

Ｂ区南端のDH-31･32区に位置する。SC-670を切る。径50～58cm、深さ19cmの楕円形掘り形をもつ。径20cmの立柱痕跡をもつ。

立柱痕跡の①層は、黒褐色砂質土で、径２cmほどの小石が２・３点混じる。また、径１cm大のにぶい黄褐色砂質土塊が点々とみられる。①層の先端部は尖っており、杭状の柱が打ち込まれたと考える。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土がうすい縞状となって混じる。①・②層ともに埋土ａに分類できる。

②層からは、弥生中期の甕の胴部破片２点、壺の胴部破片１点が出土している。しかし、小片で、図示できなかった。この他、埋土として取り上げた遺物に、弥生土器の壺や甕の胴部破片約10点がある。その中で３点を報告する（図173- ３～５）。３は、長頸壺の頸部～肩部の破片で、弥生中期～後期に位置づけられる。４は、壺の頸部小片で、頸部と肩部との境に突帯が巡っていたが、剥離・欠損している。弥生中期後葉～後期前葉。５は、壺の肩部破片で、弥生後期前葉～中葉に比定できる。

出土遺物と埋土の特徴、SC-670を切っていることから、弥生後期前葉～中葉の柱穴と考える。

SP-659（図171、図173- ６）

Ｂ区南半部のDH-32区で出土した。SK-662に切られ、SK-695を切る。掘り形は、長径84cm、短径65cm、深さ19cmの長円形で、底面はほぼ平坦である。

埋土上部の①層は黒褐色砂質シルト。下部の②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が比較的多く混じり、全体に明るい土色となっている。

埋土から弥生土器の壺や甕の胴部破片約10点が出土しているが、図化できるものはない。上面のⅢ層部分

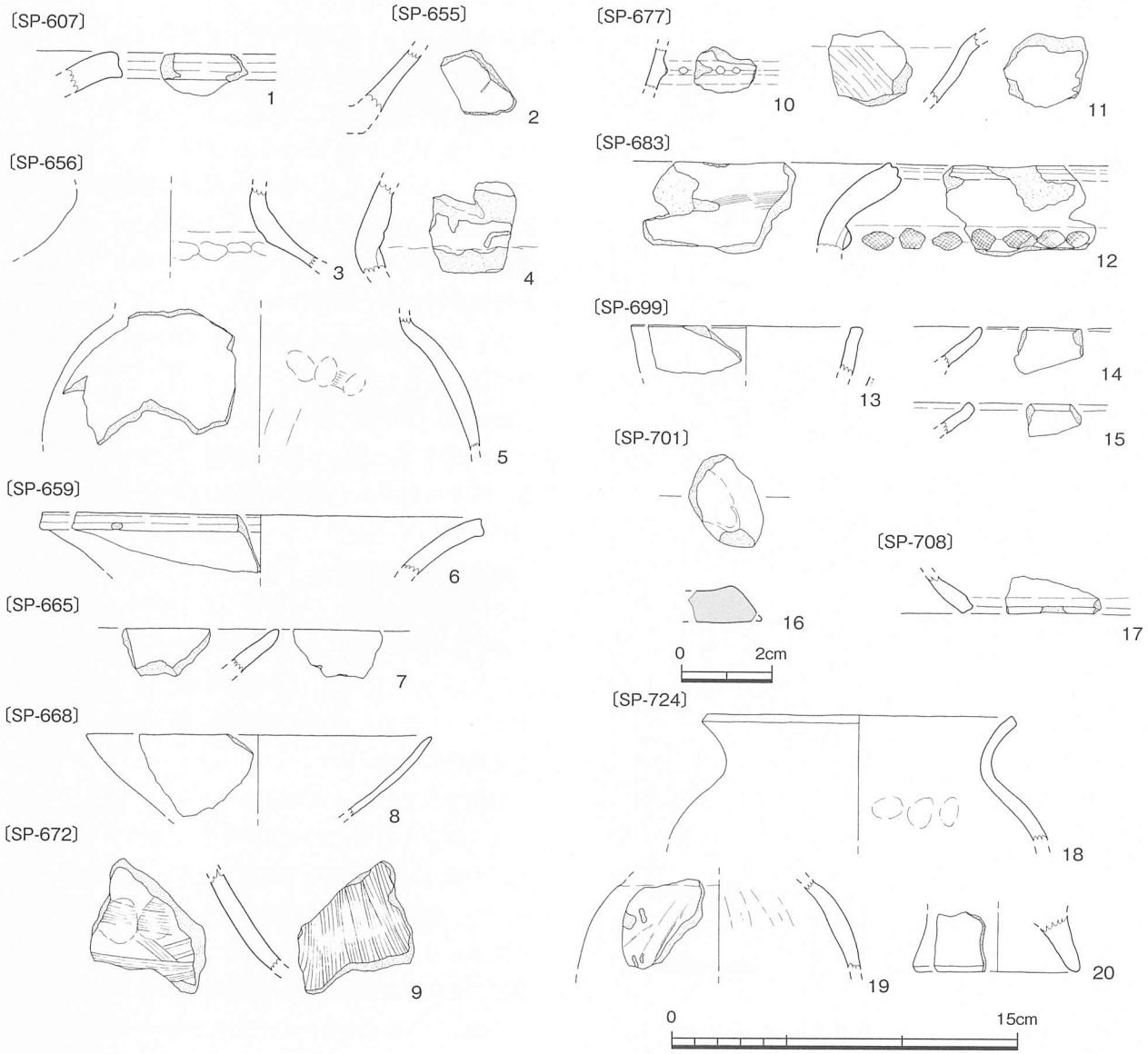


図173　B区 SP-607・655・656・659・665・668・672・677・683・699・701・708・728出土遺物実測図（縮尺1/3、2/3）

からも、弥生土器片３点が出土しており、２点を報告する（図173- 6）。６は、口縁端面と下端部を同時に強く横ナデするため端面に３～４条の凹凸が生じている。また、弥生土器の甕の底部が出土したが、SC-670から出土した破片と接合する（図115-28）。

出土遺物と切り合い関係から、SP-659は弥生後期中葉～古墳中期の遺構と考えられる。

SP-661（図171）

B区南半部のDH-32区で、SC-670の埋土上面を精査する過程で検出できた。径54cm、深さ15cmの楕円形の掘り形をもつ。

埋土①層は、黒褐色砂質シルトで、少量のにぶい黄褐色砂質土が混じる。②層は、にぶい黄褐色砂質土で、黒褐色砂質シルトの小指先大の塊が点々と混じる。③層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が少量混じる。④層は、にぶい黄褐色砂質土で、黒褐色砂質シルトの径１cm大の塊が点々と混じる。

埋土から、弥生土器の壺や甕の胴部片４点が出土している。いずれも弥生中期～後期。しかし、弥生後期中葉に位置づけられるSC-670を切ることから、弥生後期前葉以降の小穴と考える。

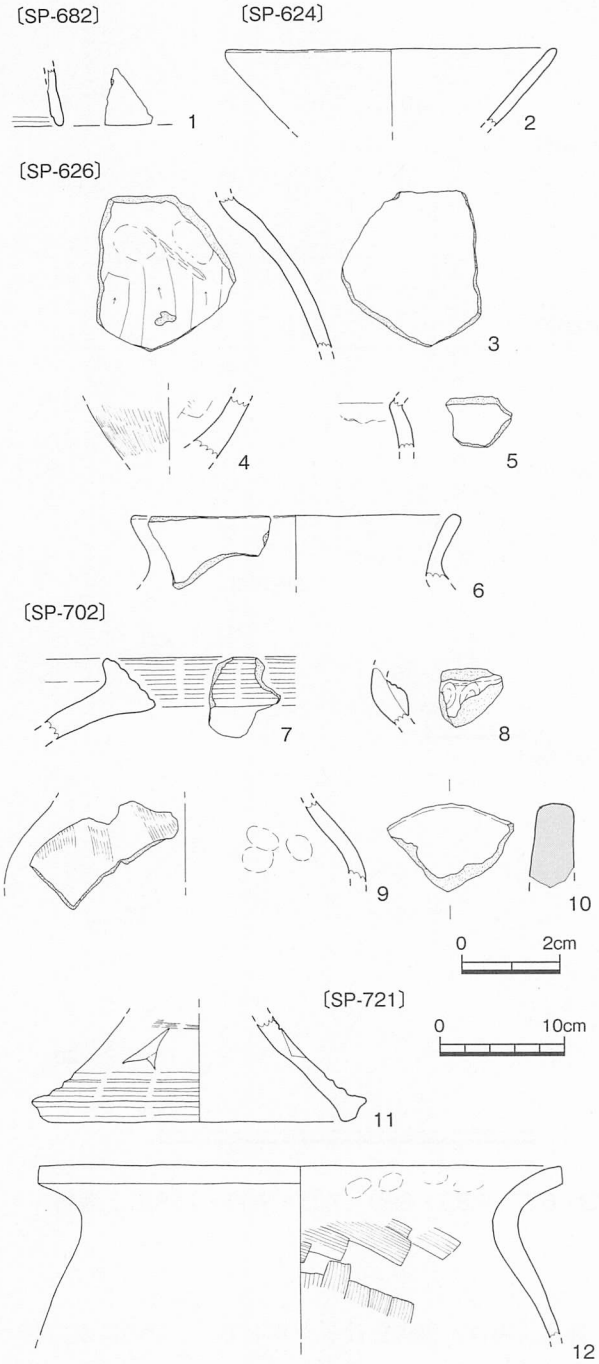


図174　B区 SP-624・626・682・702・721出 土遺物実測図（縮尺1/3、2/3）

SP-683（図171、図173-12）

B区南端のDI-31区に位置する。SK-684・725・732やSP-715を切る。長径55cm、短径46cm、深さ24cmの長楕円形の掘り形をもち、径17cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡である①層は、黒褐色砂質土で、炭化物の小片がごく少量混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

遺構検出面の上部のⅢ層から、弥生中期～後期の壺の胴部6点、甕4点などが出土している。いずれも小片で、甕1点を図化できるにすぎなかった（図173-12）。12は、「く」字形に外反する口縁部で、口縁端面に2条の凹線文が施される。頸部の付け根には突帯が貼り付けられている。突帯には平織りの布を巻いた指頭を押し当てた刻目が巡る。

切り合い関係と出土遺物から、SP-683は弥生後期前葉以降の柱穴と判断した。

SP-702（図171、図174-7～10）

B区南半部のDI-31区に位置する。SP-678に切られる。残存長辺80cm。最大幅62cm、深さ16cmの長楕円形の掘り形をもつ。

埋土は、径2～3㎜の砂礫が多く混じる暗褐色砂質土で、灰白色砂質土・黄褐色シルトが含まれる。

埋土から、40点近くの弥生土器や土師器の破片が出土している。ただし、下部遺構の埋土との違いが明瞭でなかったため、本来下部遺構に伴う遺物を含んでいる可能性も残る。

図化できたのは4点の遺物である（図174-7～10）。7は、弥生土器壺の口縁部破片で、端部を上下に拡張し、口縁端面に5条の凹線文を施す。8は、甕の肩部破片で、頸部の付け根に突帯を貼り付け、指頭で刻目を施す。9は、弥生土器の鉢の肩部破片。10は、土製品で、大半を欠損するが、端部の一部のみが残存する。この他に、SK-693から出土した古墳中期に比定される甕の胴部破片が出土したが、SK-693出土の破片と接合した（図148-10）。

以上から、SP-702は古墳中期の小穴と考える。

SP-715（図171）

B区南端のDH・DI-31区で出土した。SP-683に切られ、SK-725・SK-732を切る。径44cm、深さ18cmの円形の掘り形をもち、中央北よりで径16cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡である①層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が薄く縞状に混じる。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質土、③層は暗灰色砂質土である。

埋土から、弥生中期～後期と考えられる壺や甕の胴部破片3点が出土している。

切り合い関係と出土遺物から、SP-715は弥生後期の柱穴と考えられる。

SP-716（図171）

B区南端のDH-31区に位置する。SK-725と一緒に調査を進めたため、混乱がある。SK-732を切り、SC-670に切られる。径39cm、深さ18cmの円形掘り形をもち、径16cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡である①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

掘り形埋土である②層から、縦方向にヘラミガキを施した甕の胴部破片１点、刷毛目調整を施した甕の胴部小片が１点出土している。

出土遺物や切り合い関係から、弥生後期の柱穴と考えられる。

SP-723（図171）

B区南部のDH・DI-31区で出土した。SK-725とSP-687に切られる。掘り形の1/4ほどしか残存しないが、径17cmの立柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

埋土中から、弥生土器の壺や甕の胴部破片３点が出土した。切り合い関係から、弥生後期の遺構と考える。

SP-724（図171、図173-18～20）

B区南半部のDH-32区に位置する。SC-670・SK-695の下部で検出した。径56～58cm、深さ42cmの楕円形の掘り形をもつ。

埋土①層は、黒褐色砂質シルトで、径２cm前後のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じる。立柱の抜き取り後の流入土である。底面から、立柱痕跡の径は20～22cmと推定できる。②・③層は掘り形埋土。②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が混じる。③層は、にぶい黄褐色砂質土で、少量の黒褐色砂質土の小塊が点々と混じる。

埋土から、弥生土器の壺や甕の破片が16点出土している。３点を報告する（図173-18～20）。18は、壺の口縁部～肩部の破片で、口縁端部に面取りを施す。弥生後期中葉～後葉に比定できる。19は、壺の肩部破片で、頸部の付け根には凹みが巡る。外面及び内面上部には板状工具によるケズリ調整が施される。20は、甕の上げ底片で、弥生中期後葉のものである。

調査当初はSP-724がSC-670に切られると考えていたが、整理作業の段階でSP-724出土土器に弥生後期後葉に下るものが含まれていることを確認した。SP-724がSC-670に切られているとすれば弥生後期前葉以前の位置づけとなり、出土遺物と齟齬が生じることになる。

SC-670埋土出土遺物の中に土師器が見られることから、SC-670埋土中には未確認の掘り込みが存在したと想定されるため、本来はSP-724がSC-670埋土を掘り込んでいたと考えられる。そのため、SP-724は弥生後期後葉の遺構と考えておく。

SP-737（図171）

DI-31区に位置する。調査段階では、SP-684としていたが、遺構番号が重複しているの気づき、SP-737に変更した。南半部は撹乱で破壊されている。径40cm、深さ28cmの円形の掘り形をもち、径15cmの立柱痕跡を確認できた。埋土①層は、暗褐色砂質土で、灰白色の径１mm前後の砂礫が混じる。立柱痕跡である②層の上部にみられることから、SP-737廃棄後に流入した土層と判断した。暗褐色砂質シルトである。掘り形埋土の③層は、径１mm前後の砂粒が混じる暗褐色砂質土で、不定形の明黄褐色土塊が多く混じる。

①層から出土した弥生土器は、SK-739出土の破片（図169-５）と接合する。SP-737が廃絶した後に流れ込んだものである。③層からは、外面にヘラミガキ調整を施した甕片、炭化物片が数点出土している。

出土遺物から、弥生中期～後期の遺構と考えられる。

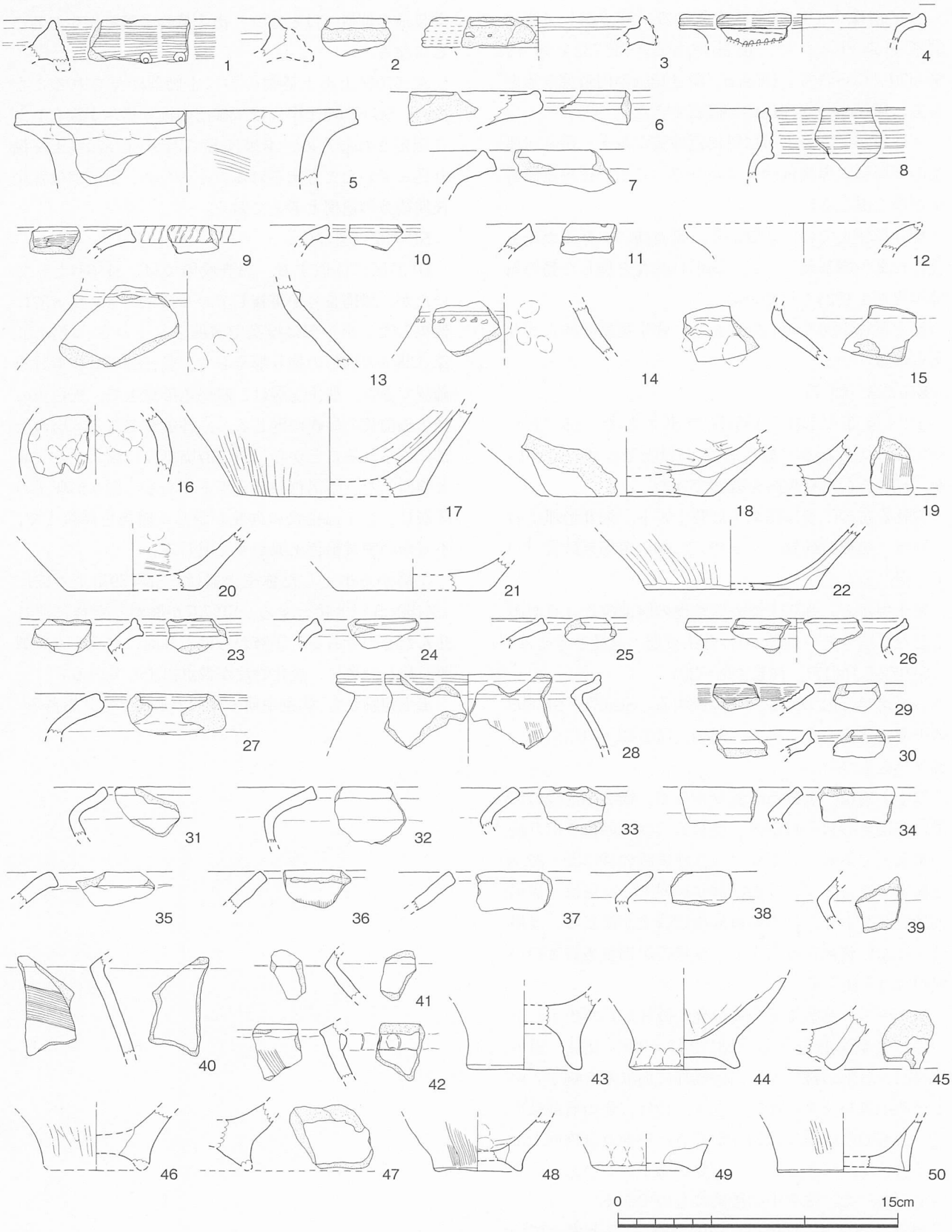


図175　B区Ⅲ層出土遺物実測図１（縮尺1/3）

8　Ⅲ層出土の遺物

Ｂ区では、北部のDH-38・39区と、南部のDH・DI-31・32区でⅢ層が部分的に分布する。このⅢ層を掘り下げ中にも遺物が出土した。とくに、南部では掘り形ラインを検出できていないものの、炭化物や土器片が多くみられ、遺構埋土である可能性が高い。Ⅲ層は、１ｍグリッドを設定し、Ⅲ層下部で遺構検出できたものについては、個々の遺構の報告を行う中で報告を行った。以下では、その他のⅢ層から出土した遺物を報告する。

Ⅲ層出土の遺物は、大半が弥生土器であるが、古墳時代の土師器や須恵器、古代・中世の遺物が少量混じる。

図175-１～50、図176-１～22は弥生土器である。図175-16はＢ区北端部、他は南端部で出土している。

図175-１～10は壺口縁端部片である。１は、口縁端面に浅い凹線文が９条巡り、端部下端に円形刺突が施される。３・４は、口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施す。５～７の口縁端部は上下に拡張される。８の直立した口縁部外面に凹線文が６条施される。吉備地方によく見られるものである。９は、口縁端部を上方に拡張し、端面に斜線文を施文する。11・12は壺あるいは甕の口縁部片である。

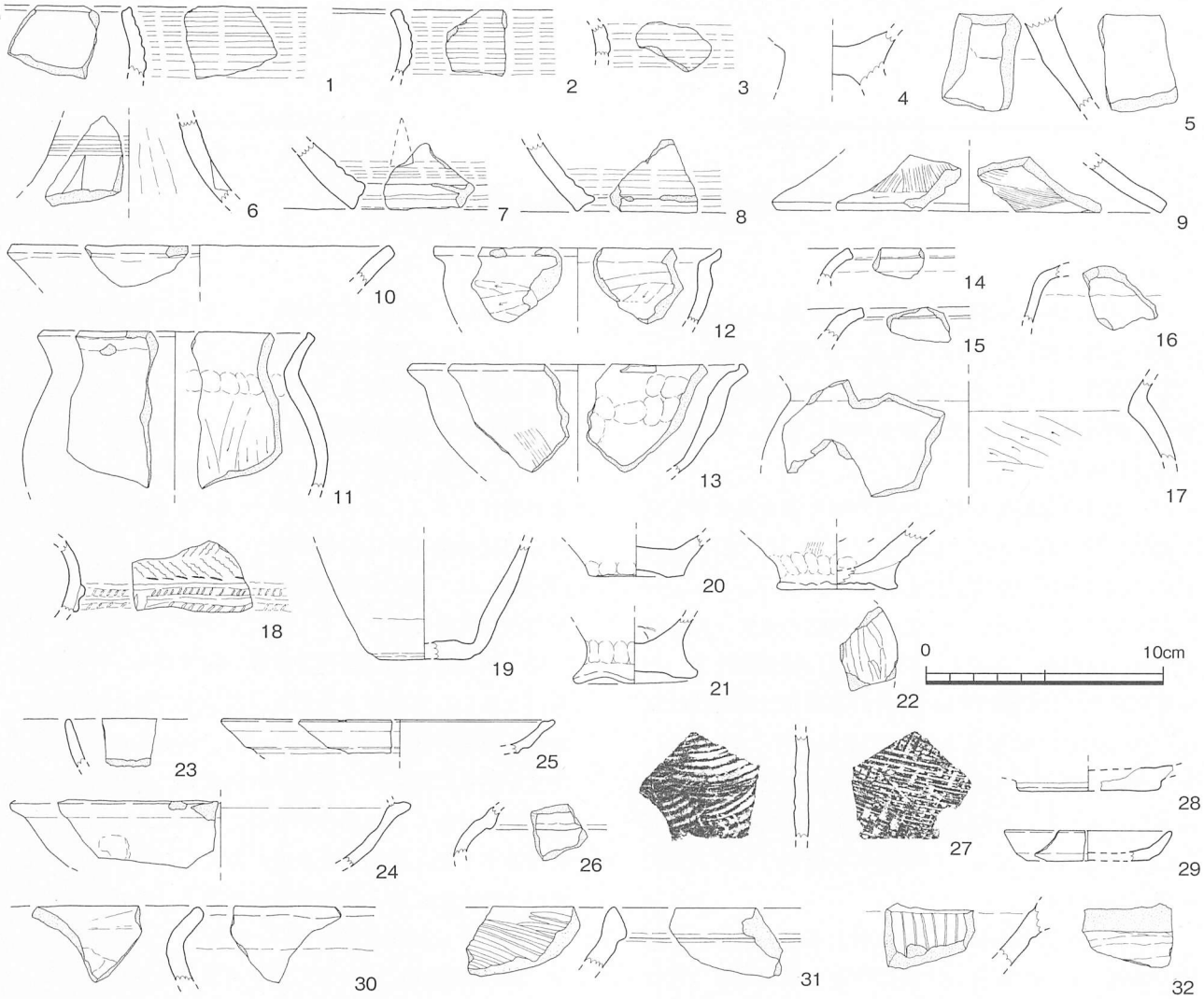


図176　Ｂ区Ⅲ層出土遺物実測図２（縮尺1/3）

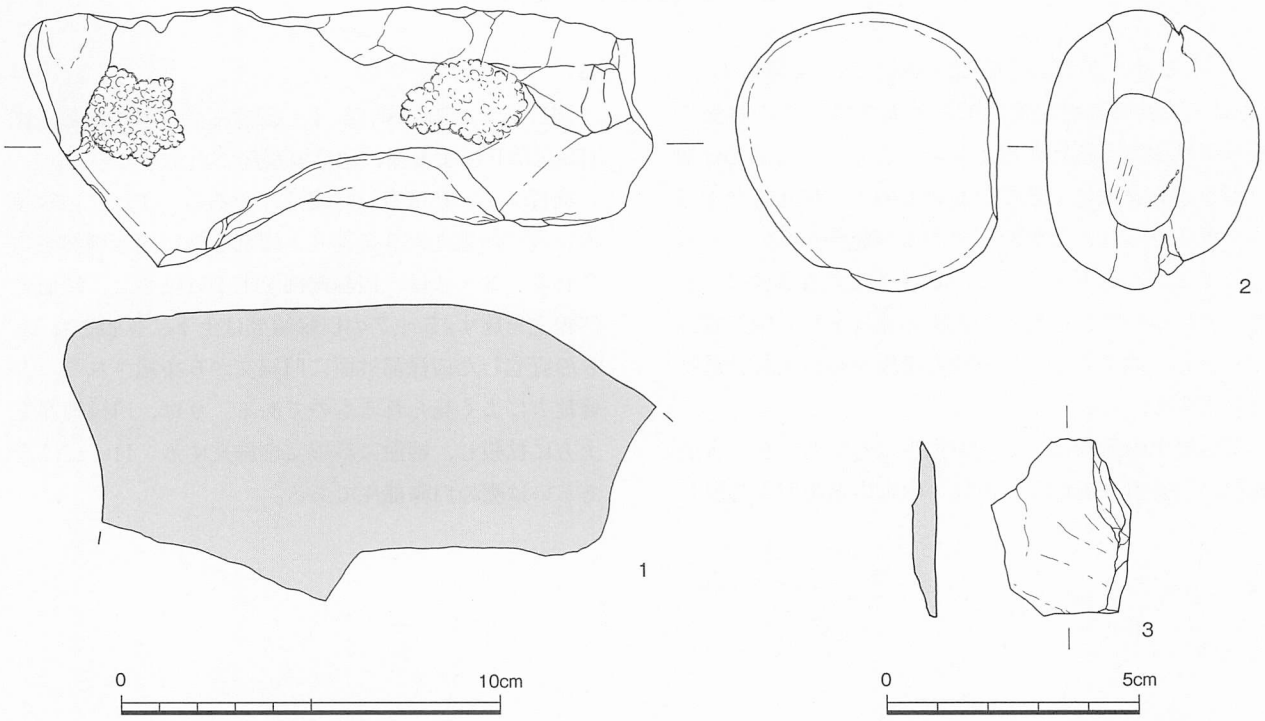


図177　B区Ⅲ層出土遺物実測図３（縮尺1/2、2/3）

13～16は壺の肩部および胴部破片である。13は外面に突帯を貼り付ける。14は、外面に沈線を１条巡らし、下方に刷毛目工具の小口部を押捺して短斜線文を施文する。16の外面には、指頭痕が明瞭に残る。土師器の可能性も残る。

17～22は壺の底部。17は中央がやや張り出す不安定な底部。18はわずかに上げ底を呈する。19・21・22は平底。20は平底だが安定感を欠く。

23～50は甕である。23～38は口縁部の破片。23・24の端面には凹線文が巡る。25・26も口縁部破片で、口縁端部を上方に拡張する。27の口縁端面は凹線状に窪む。28～30も口縁端部を上方に摘み出す。32・35は、強いナデ調整によって口縁下端部がやや突出する。34は「く」字形の口縁部をもち、頸部内面に明瞭は稜が生じている。36・37は、口縁端部を面取りし、38は尖りぎみにおさめる。

39は頸部～肩部の破片。40は胴上半部の破片。41は甕の頸部～肩部の破片。内面に明瞭な稜が巡る。42は胴上半部の破片。頸部の付け根に押圧文が施された突帯を貼り付ける。

43～50は、甕の底部の破片。いずれも上げ底であるが、43のように脚台底状を呈するものや、50のように平底に近いものがある。

図176-１～９は高坏である。１～３は坏部破片で、外面には凹線文が巡る。４は坏部の破片、５～９は脚部の破片である。６の外面には浅い沈線が６条巡り、下部には未完通の矢羽根状透かしが施される。７・８の外面には、幅広の凹線文が施された後、矢羽根状透かしが穿孔される。

10～19は鉢。18は脚台付き鉢の胴部破片。外面には刻目を施した突帯が２条巡る。突帯上には、棒状浮文が貼り付けられる。突帯上部には、貝殻施文による刺突文が羽状に施され、刺突文と突帯との間には、突帯整形時に付着した爪痕跡が巡る。中国地方によく見られる器形だが、胎土は在地産と考えられる。19は、平底で、外底面に草木類の付着痕が残る。20～22は、小型の甕あるいは鉢の底部破片。いずれも上げ底状である。22の外底面にはヘラミガキ調整が施されている。

古墳時代以降の遺物は極端に少ないが、須恵器や土師器、備前焼などがある。

23～28は須恵器。23・24は坏身の破片。25・26は瑳。25の口縁端部内面には段が巡る。26は焼成不良品である。27は壺もしくは甕の胴部破片。28は、坏の底部破片で、外底面にヘラ切り痕が残されている。須恵器は、いずれも調査区南部から出土している。23～27は古墳中～後期、28は古代。B区南半部では、掘立柱建物や土壙・柱穴などの古墳中～後期の遺構があり、これらの遺構に関連する遺物と考えられる。

29・30は土師器である。29は復元径７㎝。器高1.3㎝の皿。口縁端部を尖り気味におさめる。30は「く」字形を呈する古代の甕の口縁部破片である。31・32は擂り鉢。31は陶器製、32は備前焼製である。

石器・石製品には、砂岩の台石（図177-1）、砂岩の磨石（図177-2）、緑色片岩の剥片（図177-3）がある。

以上の他に、調査区中央部を南北に縦断する撹乱溝やⅠ層から、弥生土器や須恵器・土師器、近現代の陶磁器・瓦などがコンテナ（54㎝×38㎝×14㎝）２箱分出土している。そのうち５点の弥生土器を掲載している（図版47）。⑲・⑳は壺の口縁部片である。⑲の口縁端面には２条１単位で「ハ」字形に斜線文を施す。⑳は拡張した口縁端面に凹線文を３条施す。㉑・㉒は甕の口縁部片。㉓は鉢の口縁部片である。

Ⅵ　まとめ

1　古代～中世

A区では、自然流路のSR-400が埋没した後、その谷状の窪地を利用して、水田の開田・経営と廃絶が繰り返されていることを明らかにできた。最上層の水田であるⅡ-2-②（上層水田）層では、微高地部分を含めたA区全域が水田化されている。Ⅱ-2-②（上層水田）層が廃絶されるまでの層序は、以下のように整理できる。

SR-400③層：自然流路SR-400の円礫から構成される中州堆積物

SR-400②層：中州の間を埋める流水による堆積物

SR-400①層：SR-400に恒常的な流水がなくなり周囲から流れ込んで堆積した土層

Ⅱ-2-⑥層：SR-400が埋積された谷状の窪地での下層水田の開田と経営

Ⅱ-2-⑤層：下層水田を廃絶させた洪水堆積

SD-208・209：Ⅱ-2-⑤層を切り込む溝（水田層が伴うものと考えられるが、上層のⅡ-2-④層の耕作で削平されたと判断した）

Ⅱ-2-④層：中層水田の開田と経営

Ⅱ-2-③層：中層水田を廃絶させた洪水堆積

Ⅱ-2-②層：微高地上を含めたA区全域での上層水田の開田と経営

Ⅱ-2-①層：上層水田を廃絶させた洪水堆積

SR-400に恒常的な流水がある時期を示す②・③層や、流水がなくなりSR-400を埋積する①層からは、多くの弥生土器とともに、古墳後期、奈良時代、平安時代の遺物が出土している。したがって、SR-400は弥生時代から古代後半の自然流路と考えられる。また、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層～Ⅱ-2-①層から出土する遺物は、弥生時代～古墳時代の遺物もあるが、古代後半～中世前期の遺物が大半を占める。当該期に水田の開田と廃絶が繰り返されたことになる。

加えて、A区南半部の微高地上では掘立柱建物や柵列、土壙などが営まれ、さらに畠跡と考えられる犂による耕作痕跡を検出した。これらの時間的な関係を整理し、有機的な遺構の配置関係を把握するためには、まず出土遺物の時間的変遷を検討する必要がある。

（1）出土遺物の年代的位置づけ

A区では、古代後半～中世前期を、層序的にSR-400②・③層→SR-400①層→Ⅱ-2-⑥（下層水田）層→Ⅱ-2-⑤層→SD-208・209→Ⅱ-2-④（中層水田）層→Ⅱ-2-③層→Ⅱ-2-②（上層水田）層→Ⅱ-2-①層の9時期に区分できた。こうした層序・遺構で明らかにできる時期区分を基準として、出土遺物の時間的関係を明らかにしていく。

ただし、出土遺物のほとんどは破片である。全形が把握できるものは、土師器皿・椀・坏、黒色土器、瓦器、白磁碗がある。ここでは、比較的出土量がある土師器皿・椀・坏、黒色土器で型式分類を行い、層序関係からその型式変遷を把握する。出土量が少ない瓦器、白磁碗などは、出土層準から時間的な位置づけを試みる。また、SD-208・209はⅡ-2-⑤層を切り込む溝であるが、発掘調査時にはⅡ-2-⑥層上面で検出した。そのため、Ⅱ-2-⑤層の遺物の中には、本来SD-208・209に埋積された遺物も含まれていることとなった。この点についても留意して検討を進めた。

1）土師器

（a）皿

土師器皿は、体部のひらき方、法量、外底面に残る切り離し痕から、HSの略号を冠し、HS①～HS⑥に分類する。

HS①：全体の形状は須恵器皿に近く、出土量は少ないが、口径10.5～12cm。底径8～9cmを測り、後述するHS②～HS⑥と比べて口径が大きな平皿形である。体部下半で緩やかに反転するもの（図178-1）や、体部が直線的にひろがり口縁部をわずかに反転させるもの（図178-2）がある。

HS②：体部下半が膨らみ、中位で反転して緩やかに口縁部へと続く。HT①と比べて小形で、口径8.5cm前後、底径5.5～6.5cmを測る。外

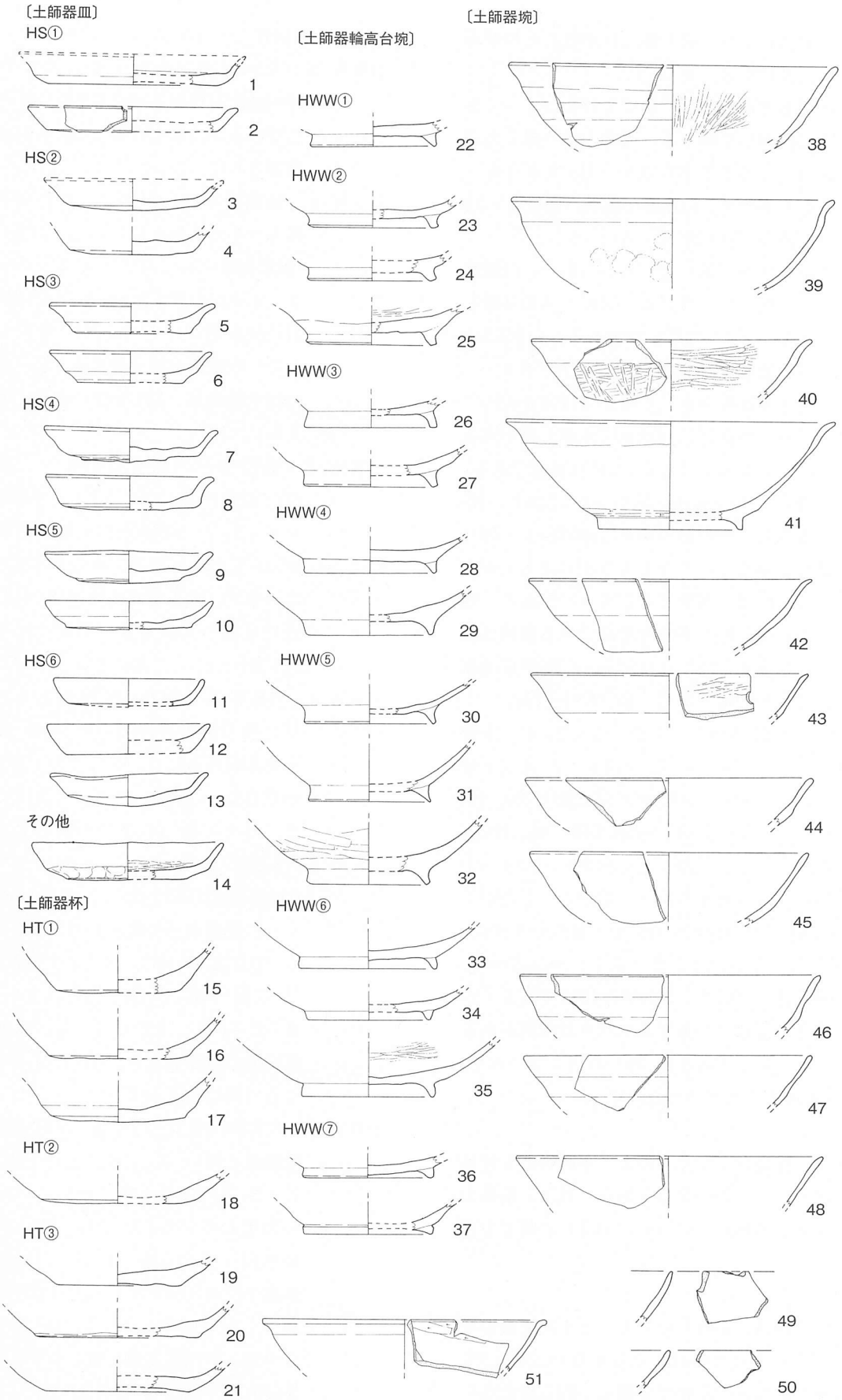


図178　文京遺跡18次調査Ａ区出土の古代～中世の遺物分類１（縮尺１／３）

底面に回転ヘラ切り離し痕が残るものがある（図178- 3・4）。

HS③：体部下半が内湾し、中位で稜をつくってさらに内湾してのびる。底部の切り離し方法を確認できる資料はない。HS②よりも一まわり小形で、口径8㎝前後、底径5～5.5㎝を測る（図178- 5・6）。

HS④：体部全体が内湾しながらひろがり、口縁部付近を短く折り曲げる。回転ヘラ切り離し痕を外底面に残すものがある。口径8.5㎝前後、底径6.5㎝前後（図178- 7・8）。

HS⑤：体部下半が膨らみ、中位からほぼ直線的にのびる。外底面に回転糸切り離し痕が残るものが含まれることが、大きな特徴である。口径7～8㎝前後、底径5～5.5㎝と、HS③と同じく小形品である（図178- 9・10）。

HS⑥：体部全体が膨らみをもちながら立ち上がるもの、ほぼ直線的にのびるものがある。外底面の切り離し方法を確認できる資料はない。法量的には、口径7.5㎝、底径6㎝前後の小形の皿である（図178-11～13）。

以上、HS①はSR-400③・①層～Ⅱ-2-⑥（下層水田）層から出土している。HS②はⅡ-2-⑥（下層水田）層～Ⅱ-2-③層、HS③はSD-208・209、HS④はSD-208・209～Ⅱ-2-④（中層水田）層、HS⑤はSD-208・209～Ⅱ-2-①層、HS⑥はⅡ-2-④（中層水田）層～Ⅱ-2-③層から出土している。したがって、HS①→HS②→HS③＋HS④＋HS⑤→HS⑥の変遷を読み取ることができる（以下、→は古→新、＋は同時併存をあらわす）。この他、後述するⅡ-2-③層出土の黒色土器皿と共通する形状を持つ例がある（図178-14）。Ⅱ-2-④（中層水田）層から出土しており、HS⑥と同時期のものと考えられる。

（b）埦

土師器埦は、輪高台がつくものと、平高台とも呼ばれる円盤高台がつくものの2者がある。以下、輪高台のものにHWW、円盤高台のものにHWEの略号を冠して分類する。

ⅰ）輪高台埦

輪高台がつく埦は、遺物の中でもっとも出土量が多いが、全形が明らかなものは1点しかない。そこで、体部の膨らみと高台部の形状で分類し、同じ層位から出土している体部破片を検討して、全体の器形を復元しながら、HWW①～HWW⑧を設定した。

HWW①：太い断面三角形の高台部である（図178-22）。HWW①はSR-400③層から出土しているが、確実に埦と考えられる体部破片はみあたらない。

HWW②：断面台形の高台部で、高台の先端部が外方へ小さく摘み出したように跳ね上がる（図178-23～25）。HWW②はSR-400③層～Ⅱ-2-④（中層水田）層から出土している。SD-208から出土している、全体が丸みをおび、口縁部を横ナデするためにわずかに外反する体部（図178-38）がつくものと考える。

HWW③：断面台形の高台部をもつ（図178-26・27）。HWW③はⅡ-2-⑥（下層水田）層～Ⅱ-2-④（中層水田）層から出土している。これらの層準でみられる埦の体部破片の中で、丸みをおびた体部で、口縁部周辺で反転して緩やかに外反するもの（図178-39）がつくと考える。

HWW④：HWW③と同じく断面台形あるいは細長い長方形の高台部をもつが、高台先端が丸く収められる。そのため、高台が三角形状になったものがある（図178-28）。また、外方に膨らみ気味の高台もある（図178-29）。全形が明らかな資料がある。HWW③の体部と比べて、体部の丸みがなく、口縁部周辺の反転も緩やかな体部がつく（図178-40・41）。また、HWW④はⅡ-2-⑤層～Ⅱ-2-①層から出土しており、Ⅱ-2-⑤層で出土している、反転部が中位にある体部破片も、HWW④のものと考える（図178-42・43）。

HWW⑤：HWW④と比べて、高台の先端が横ナデで細長く高い（図178-30～32）。HWW⑤は、Ⅱ-2-④（中層水田）層～Ⅱ-2-①層から出土している。とくに、Ⅱ-2-④（中層水田）層からみられる、口縁部周辺や体部中位の反転がほとんど目立たない体部がつくものと考えられる（図178-44・45）。この他、口縁部先端を短く強く屈曲させる体部も考えられる（図178-51）。

HWW⑥：HWW①～HWW⑤と比べて、体部下

半が緩やかにひろがり、見込み部分が広い。高台は、先端が丸く収められた台形・三角形で、小さく低いものが目立つ（図178-33～35）。外底面に回転糸切り離し痕が残るものが含まれる。外面に指頭痕が多く残り中位が窪む体部がつくものと考えられる（図178-46・47）。

HWW⑦：先端が丸く収められた断面三角形や台形の高台で、HWW⑥と同じく小さく低い。体部下半の立ち上がりが緩やかで、外底面が膨らむ（図178-36・37）。体部中位の窪みがほとんど目立たず、ほぼ直線的にひろがる体部がつくと考えられる（図178-48）。

HWW⑧：Ⅱ-2-②（上層水田）層～Ⅱ-2-①層から出土した破片の中に、口縁部がわずかに内湾して外形が膨らむものがある。高台部は不明であり、坏の可能性も残すが、両黒土器埦にも同様な形状をもつ体部破片があるので、埦に分類した（図178-49・50）。

輪高台をもつ埦の中で、HWW①はSR-400①層、HWW②はSR-400①層～Ⅱ-2-④（中層水田）層、HWW③はⅡ-2-⑥（下層水田）層～Ⅱ-2-④（中層水田）層、HWW④はⅡ-2-⑤層～Ⅱ-2-①層、HWW⑤はSD-208・209～Ⅱ-2-①層、HWW⑥はⅡ-2-④（中層水田）層～Ⅱ-2-①層、HWW⑦はⅡ-2-③層～Ⅱ-2-①層、HWW⑧はⅡ-2-②（上層水田）層～Ⅱ-2-①層から出土している。したがって、HWW①＋HWW②→HWW③→HWW④→HWW⑤→HWW⑥→HWW⑦→HWW⑧の変遷を読み取れる。

ⅱ）円盤高台埦

円盤高台をもつ埦は、輪高台埦と比べて出土量は少ない。底部から胴部下半の形状、高台部の厚み、底部の切り離し方法から、HWE①～HWE④に分類できる。

HWE①：体部が底部からほぼ直立してのび、体部下半で屈曲して、膨らみをもつ体部に仕上げる。体部下半の屈曲部には内外面に稜線がはしる（図179-１・２）。

HWE②：底部からほぼ直立して体部が立ち上がるが、HWE①と比べて、体部下半の屈曲は緩やかである（図179-３・４）。

HWE③：HWE①・②の底部側面にみられる立ち上がりが緩やかになり、体部下半の屈曲もほとんど目立たず、外形的には緩やかに内湾しながら体部が立ち上がる。口縁部は直線的にのび、口縁先端の内面を横ナデしてやや尖り気味に仕上げる（図179-５）。

HWE④：厚い円盤状の高台が貼り付けられた形状をもつ。外底面に回転糸切り離し痕が残るものが含まれる（図179-６・７）。

以上の中で、HWE②はSR-400①層～Ⅱ-2-④（中層水田）層、HWE③はⅡ-2-⑥（下層水田）層～SD-208・209、HWE④はⅡ-2-④（中層水田）層～Ⅱ-2-②（上層水田）層から出土しており、HWE②→HWE③→HWE④の変遷を読み取れる。また、HWE①は、出土量は他と比べて少なく、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層とSD-208・209から出土しているが、体部下半の屈曲が明確である点から、HWE②との共存、もしくは先行する型式と考える。

（c）坏

出土資料は破片がほとんどで、全体の形状がわからないものばかりである。そこで、外底面の切り離し方法と底部から体部へのひらき具合から、HT①～HT③に大きく分類しておく。

HT①：外底面に回転ヘラ切り離し痕が残る。全体に丸みをおびた体部がつくと考えられる（図178-15～17）。

HT②：外底面に回転ヘラ切り離し痕を残すが、HT①と比べて体部下半がひらき、HT③に近い体部形状をもつ（図178-18）。

HT③：外底面に回転糸切り離し痕が残る。体部下半が大きくひらく（図178-19～21）。

HT①はSR-400③・①層からみられ、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層、Ⅱ-2-⑤層から出土した坏でも確認できる。HT②の確実な出土例は、Ⅱ-2-⑤層～SD-208・209のものである。これに対して、HT③は、Ⅱ-2-④(中層水田)層とⅡ-2-③層で出土している。

2）黒色土器

黒色土器には、内黒土器と両黒土器がある。器種的には埦と皿がみられるが、皿は数点が出土しているにすぎない。ここでは、黒色土器埦を、内黒土器にKUW、両黒土器にKRWの略号を冠して、型式分類を行った。

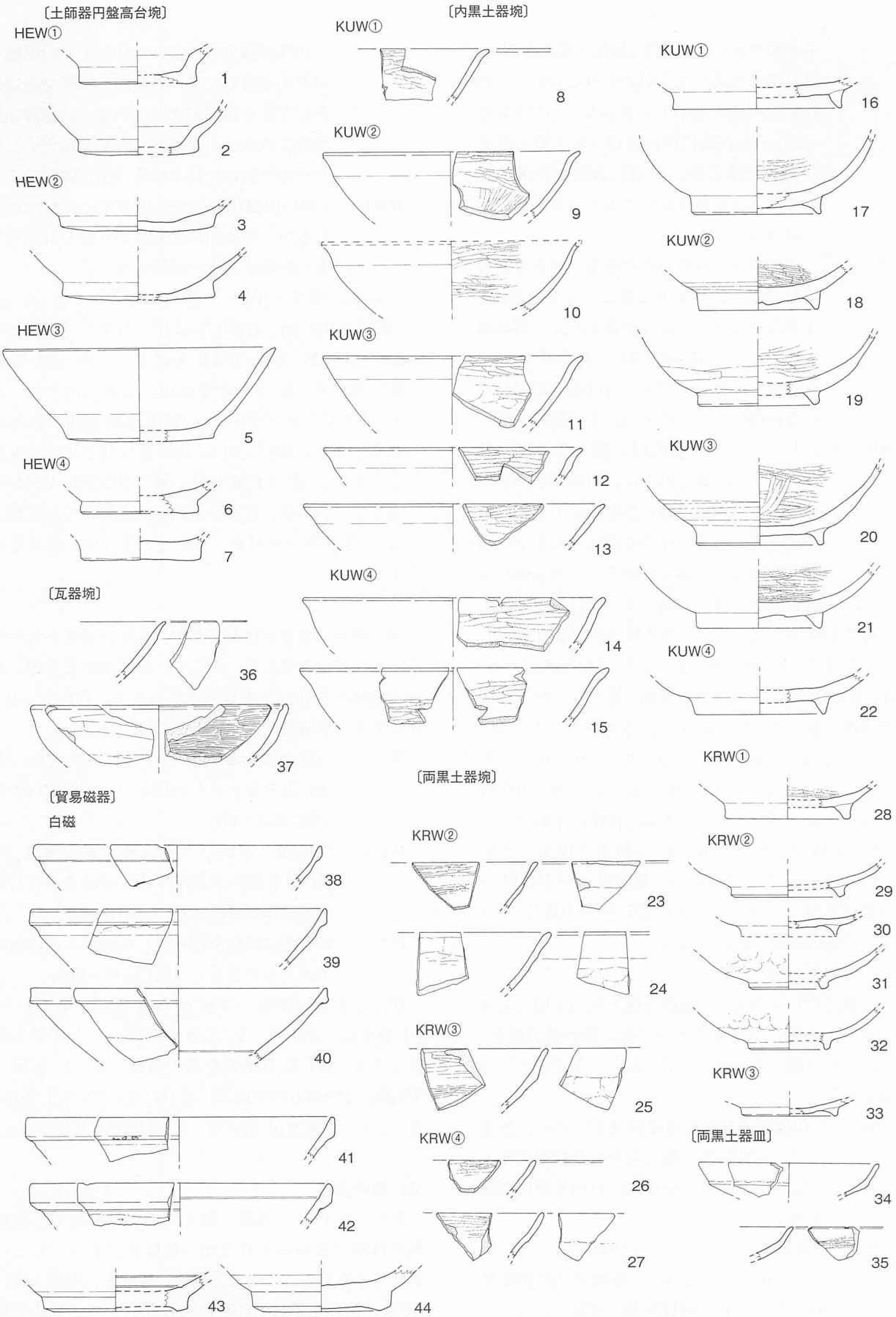


図179　文京遺跡18次調査Ａ区出土の古代～中世の遺物分類２（縮尺１／３）

ⅰ）内黒土器椀

高台部と体部の形状からKUW①～KUW④に分類する。

KUW①：断面三角形の輪高台をもつ。高台部の先端がやや尖り気味で、外方に反る（図179-16・17）。丸みをおびて口縁部はわずかに折り曲げる体部（図179-８）がつく。

KUW②：断面台形の輪高台をもち、丸みをおびる体部がつく（図179-18・19）。土師器の輪高台椀のHWW③と同じく、口縁部付近で稜線をもって強く反転して湾曲する体部（図179-９・10）がつくと考える。

KUW③：断面台形の高台部の先端が丸く収められる（図179-20・21）。土師器の輪高台椀のHWW④と同じく、体部の丸みがなく、口縁部周辺の反転が緩やかな体部（図179-11～13）がつく。

KUW④：高台部の形状はKUW③と共通するが、KUW①～KUW③と比べて、体部下半の立ち上がりが緩やかで、見込み部分が広い。体部は口縁部付近の反転が曖昧である（図179-14・15）。

内黒土器椀の中で、KUW①はSR-400①層～Ⅱ-２-⑥（下層水田）層、KUW②はⅡ-２-⑥（下層水田）層～Ⅱ-２-③層、KUW③はⅡ-２-⑤層～Ⅱ-２-②（下層水田）層、KUW④はSD-208・209～Ⅱ-２-③層そしてⅡ-２-①層から出土している。KUW①→KUW②→KUW③＋KUW④の変遷を追うことができる。

ⅱ）両黒土器椀

内黒土器の椀と同様に、高台部と体部の形状から、KRW①～KRW⑤を設定できる。

KRW①：高台部の破片が１点しかない。断面台形の輪高台がつく。内黒土器椀のKUW①～KUW③と同じく、体部は丸みをおびるものと考えられる（図179-28）。

KRW②：KUW④と同じく、体部下半の立ち上がりが緩やかで、見込み部分が広い。高台は断面台形や、先端が丸く収められた三角形である（図179-29～32）。体部は、中位に指頭痕が集中して残り、この部分が窪む（図179-29～32）。体部の形状は、土師器の輪高台椀HWW⑥と共通する。

KRW③：KRW②と同じく、体部下半の立ち上がりが緩やかで、見込み部分が広い。しかし、高台は小さく低い断面三角形や台形で、外底面が膨らむ。土師器の輪高台椀HWW⑦と同じく、ほぼ直線的にひろがる体部がつくと考える（図179-25）。

KRW④：体部の破片しかないが、KRW③と比べて体部が直線的にひろがるもの（図179-26）や、土師器椀のHWW⑧と同じく口縁部がわずかに内湾するもの（図179-27）がある。

両黒土器椀のKRW①はSD-208・209、KRW②はⅡ-２-④（中層水田）層～Ⅱ-２-③層、KRW③はⅡ-２-③層、KRW④はⅡ-２-②（上層水田）層～Ⅱ-２-①層から出土しているので、KRW①→KRW②→KRW③→KRW④の変遷を読み取れる。

３）土師器と黒色土器の各型式による時期区分

以上、土師器皿・椀・坏、黒色土器の内黒土器椀・両黒土器椀の型式分類と、出土層位から読み取れる型式変遷を整理した。層位ごとでの型式の出土状況を図180にまとめた。ただし、この中で、土師器坏HT③は外底面に回転糸切り離し痕が残る。これに対して、土師器皿では、外底面を回転糸切り離しするHS⑤がSD-208・209からみられる。そこで、HT③はSD-208・209の段階まで遡る可能性が高い。

また、SR-400①層～Ⅱ-２-②（上層水田）層では、土師器の輪高台椀、内黒土器・両黒土器の椀の各型式の出現層序から、以下のような組み合わせの変遷を読み取れる。

SR-400①層：HWW①＋HWW②＋KUW①
Ⅱ-２-⑥（下層水田）層：HWW③＋KUW②
Ⅱ-２-⑤層：HWW④＋KUW③
SD-208・209：HWW⑤＋KUW④＋KRW①
Ⅱ-２-④（中層水田）層：HWW⑥＋KRW②
Ⅱ-２-③層：HWW⑦＋KRW③
Ⅱ-２-②（上層水田）層：HWW⑧＋KRW④

このように、層序関係とともに、土師器の輪高台椀、内黒土器・両黒土器の椀の組み合わせからも時期を区分することができる。

４）瓦器・貿易陶磁からみた年代観

A区では、出土量は少ないながら、瓦器・貿易陶磁

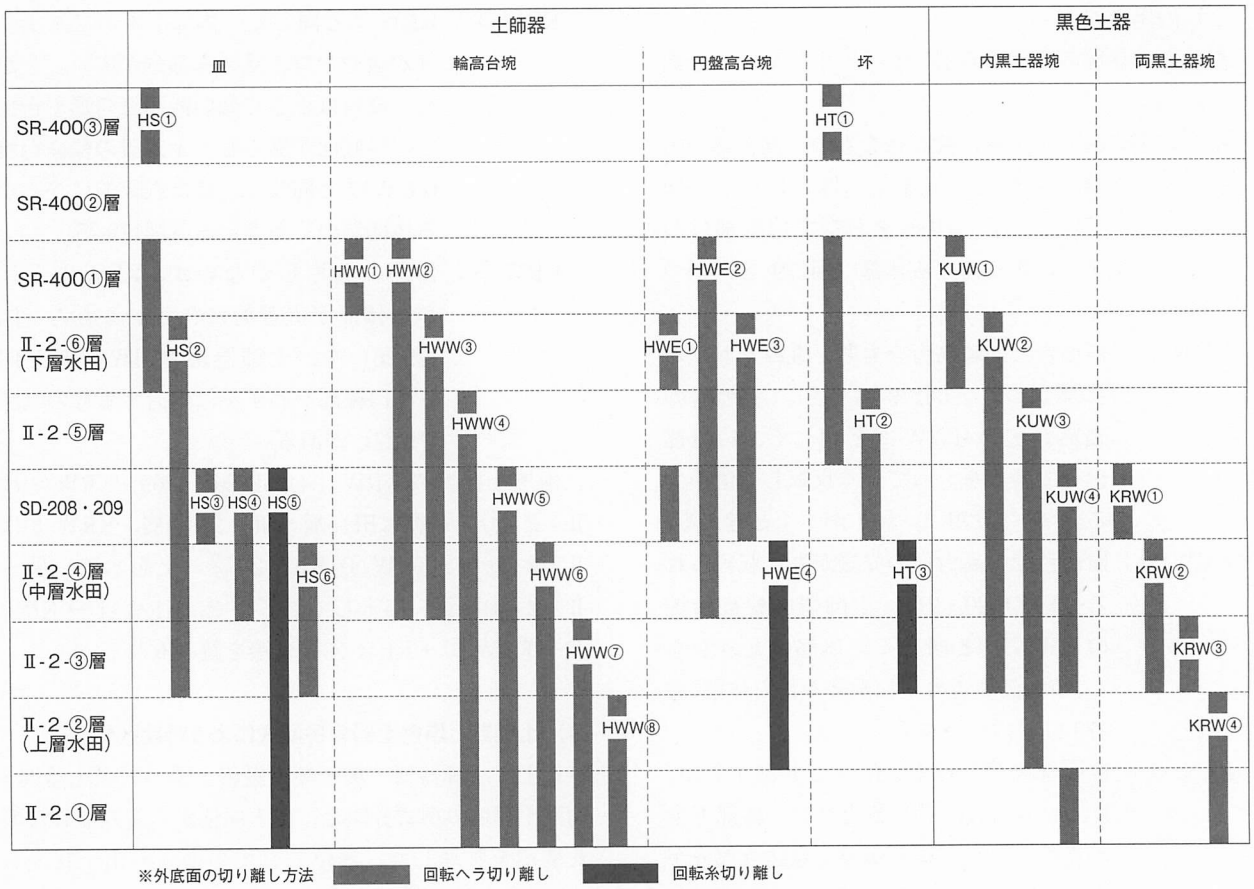


図180　各型式の層序における出土状況

器が出土している。これらの年代観に沿って、層序関係とともに整理できた土師器・黒色土器の時期区分の年代的な位置を考えてみたい。

瓦器については、SD-208・209とⅡ-2-④（中層水田）層から3点の瓦器椀が出土している。その中で、SD-209から出土した瓦器椀は、横ナデによって口縁部付近が反転しながら外反する（図179-36）。口縁部先端は小さく丸く収められている。和泉型系の瓦器椀で、12世紀初頭～前半に位置づけられる。また、Ⅱ-2-④（中層水田）層出土の瓦器椀は、緩やかに内湾する体部で、口縁部内面に沈線が巡る。12世紀前半の楠葉型の瓦器椀である。こうした共伴の瓦器椀の年代観にしたがえば、SD-208・209の段階にあらわれるHWW⑤＋KUW④＋KRW①を12世紀初頭～前半、Ⅱ-2-④（中層水田）層からみられるHWW⑥＋KRW②を12世紀中頃に比定できる。

貿易陶磁器の中で出土量が多いのは、白磁椀である。Ⅱ-2-④（中層水田）層～Ⅱ-2-①層から出土している。ただし、Ⅱ-2-④（中層水田）層の白磁椀は体部の破片（図37-52）で、年代的な位置づけは難しい。これに対して、Ⅱ-2-③層～Ⅱ-2-①層から出土した白磁椀は、玉縁口縁をもち、薄く長めの玉縁口縁をもつもの（図179-38～40）と、口縁部を折り返して厚く大きめの玉縁口縁をつくるもの（図179-41・42）の2者がある。前者は、白磁椀Ⅲ類に分類でき、Ⅱ-2-③層～Ⅱ-2-①層から出土している。後者は、Ⅳ類に分類でき、Ⅱ-2-②（上層水田）層～Ⅱ-2-①層から出土している。一方、Ⅱ-2-③層とⅡ-2-②（上層水田）層では、高台部の破片が、肉厚の器底で、幅が広く面取りされた高台がつき、白磁椀Ⅳ類に分類できる（図179-43・44）。さらに、Ⅱ-2-②（上層水田）層から出土した青磁椀は、外面に蓮弁文を削り出し内面に飛雲文の一部が残る体部の破片である。龍泉窯系青磁椀のⅠ-4類に分類できる。

松山地域では、以上の貿易陶磁器の白磁椀Ⅳ類と龍泉窯系青磁椀Ⅰ-4類は、12世紀末～13世紀前葉に比定される和泉型瓦器椀Ⅲ-1・2類とともに出土することが確認されている。Ⅱ-2-②（上層水田）層のHWW⑧＋KRW④の組み合わせには、12世紀末～13世紀前葉の年代観を与えることができる。また、下

層のⅡ-2-④（中層水田）層でみられるHWW⑥+KRW②が12世紀前半に比定できるので、Ⅱ-2-③層のHWW⑦+KRW③は、12世紀後半と考える。

一方、SR-400①層～Ⅱ-2-⑤層を基準として設定した時期区分は、層序関係から11世紀以前といえる。しかし、現在、松山地域では10～11世紀の良好な資料に恵まれていない。とは言っても、年代観を考える定点となる資料として松山市石井幼稚園遺跡SD-1がある。土師器の椀や坏とともに、10世紀前半に比定される近畿系の内黒土器椀が出土している。この資料では、土師器の椀には輪高台をもつものはみられない。また、円盤高台椀があるが、体部中位から口縁部が直線的にひろがる特徴をもつ。これに対して、今回調査のSR-400①層～Ⅱ-2-⑤層にみられる円盤高台椀HWE①～HWE③は破片資料しかないが、体部下半が丸みをおびている。石井幼稚園遺跡SD-1の円盤高台椀と比べて、時間的に後出のものと考え、HWE①～HWE③を10世紀後半～11世紀の時間幅で捉えておく。

以上、HWW①+HWW②+KUW①、HWW③+KUW②、HWW④+KUW③が示す時期を10世紀後半～11世紀、HWW⑤+KUW④+KRW①の組み合わせがみられる時期を12世紀初頭～前半、HWW⑥+KRW②を12世紀中頃、HWW⑦+KRW③を12世紀後半、HWW⑧+KRW④を12世紀末～13世紀前葉に比定できる（図181）。

（2）遺構の年代比定

1）SR-400の埋没と水田の開田・廃絶の時期

これまで検討してきた出土遺物の年代的位置づけに基づいて、SR-400が埋没する時期と、水田が開田・廃絶される時期を考えてみよう。まず、SR-400に恒常的な流水がなくなって谷状の窪地へと変化する時期を示すSR-400①層からは、HWW①・HWW②・KUW①が出土している。しかし、前述のように、10世紀後半～11世紀の時間幅でしか捉えることができない。とは言っても、上層のⅡ-2-⑥（下層水田）層でHWW④やKUW③、Ⅱ-2-⑤層のHWW④やKUW③は同じく10世紀後半～11世紀の時間幅に比定され、HWW①+HWW②+KUW①→HWW③+KUW②→HWW④+KUW③の時間的な変遷をおえることから、SR-400の埋没時期を10世紀後半頃と考え、SR-400が埋積した谷状の窪地にⅡ-2-⑥（下層水田）層が11世紀になって開田され、その後11世紀代を通じて経営されたと考えておく。

SD-208・209は、Ⅱ-2-⑥（下層水田）層が廃絶した後に開削された溝である。しかし、単独の溝ではなく、水田に伴う水路であり、周辺には水田域が拡がっていたと考えられる。その耕作土層は、上層のⅡ-2-④（中層水田）層の耕作によって削平されたものと考えた。このSD-208・209では、HWW⑤・KUW④・KRW①の組み合わせがみられ始める。12世紀初頭に比定できる。また、SD-208・209の切り合い関係は、SD-209→SD-208である。12世紀初頭の比較的短い間に、2度にわたって水田の開田と廃絶が繰り返されたことになる。

Ⅱ-2-④（中層水田）層は、HWW⑥・KRW②の組み合わせから12世紀中頃に開田され、12世紀後半にHWW⑦・KRW③が出土するⅡ-2-③層の洪水層で廃絶される。さらに12世紀末～13世紀前葉のHWW⑧とKRW④が出土し始めるⅡ-2-②（上層水田）層が開田される。問題は、Ⅱ-2-②（上層水田）層の廃絶時期である。上層を覆う洪水層であるⅡ-2-①層出から土した遺物は、他の層準と比べて少なく、下層からの混じり込んだ遺物も多い。その中で、特徴的な遺物として青白磁の合子蓋がある。13世紀代のものと考えられる。しかし、13世紀中頃に登場する口禿の白磁皿がみられない。そこで、Ⅱ-2-①層の洪水層の堆積時期は13世紀前半と考えておきたい。

このように、SR-400の埋没後から、Ⅱ-2-②層の上層水田が廃絶するまでを、以下のように年代比定できる。

SR-400の埋没：10世紀後半
Ⅱ-2-⑥層の下層水田の開田：11世紀
Ⅱ-2-⑤層による下層水田の廃絶：11世紀後半
SD-209の開削と水田の開田・廃絶：12世紀初頭～前半
SD-208の開削と水田の開田・廃絶：12世紀初頭～前半
Ⅱ-2-④層の中層水田の開田：12世紀中頃
Ⅱ-2-③層による中層水田の廃絶：12世紀後半
Ⅱ-2-②層の上層水田の開田：12世紀末～13世紀前葉
Ⅱ-2-①層による上層水田の廃絶：13世紀前半

2）微高地上の遺構の時期比定

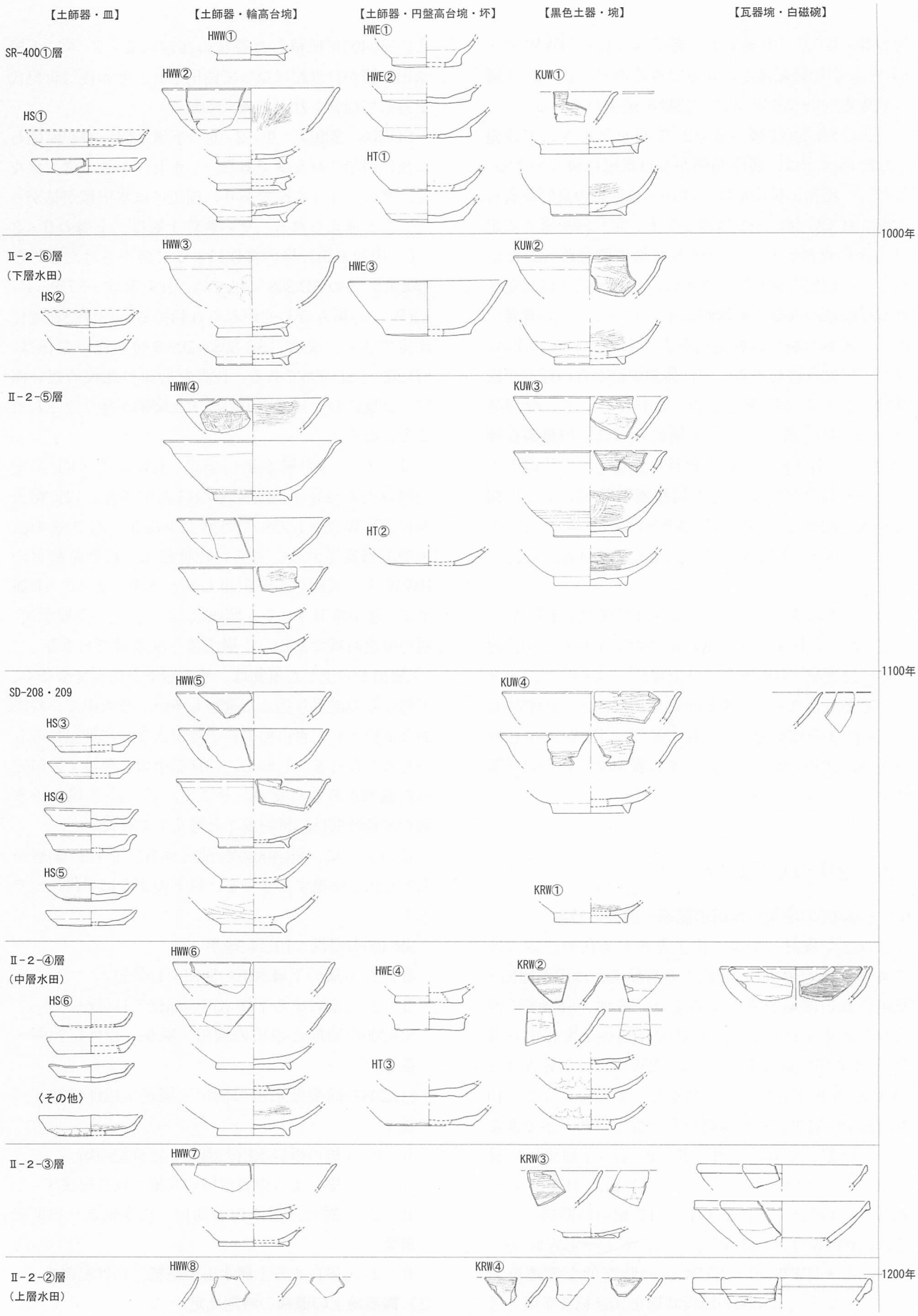


図181　古代後半～中世前期の土師器・黒色土器の変遷（縮尺１／５）

A区南半部の微高地上では、犂による耕作痕跡や、掘立柱建物・土壙などが出土している。これらも出土遺物や埋土の特徴から古代後半の遺構と考えられる。SR-400が埋積されて形成された谷状の窪地に営まれる水田と、どのような関係にあるかを考えてみよう。

ⅰ）犂による耕作痕跡

まず、A区南半部の微高地上の犂による耕作痕跡と考えられる小溝群は、部分的に残存するⅡ-2-②（上層水田）層の下半部（床土層）を除去した後にあらわれた。小溝群は短く途切れるが、畦畔を推定できるような帯状の途切れ部分は確認できず、畠跡と考えられる。また、小溝群を埋める埋土は、Ⅱ-2-④(中層水田)層と同質である。埋土から出土した遺物は、土師器坏HT②もしくは③（図69-1）、輪高台をもつ土師器椀HWW④（図69-2）とHWW⑤（図69-3）、HWW⑥（図69-4）、そして瓦器椀の高台部破片がある。瓦器椀からは12世紀前半以前としかわからないが、もっとも新しい時期に比定できる土師器椀HWW⑥があり、Ⅱ-2-④（中層水田）層と同時期のものと考えてよい。このように、層位関係と出土遺物から、12世紀前半には、A区北半部の谷状の窪地には水田（Ⅱ-2-④、中層水田)、微高地上には畠（犂による耕作痕跡）が営まれていたことになる。

ⅱ）掘立柱建物

犂による耕作痕跡と考えられる小溝群を調査した後に、掘立柱建物や土壙などが確認できた。したがって、層位的には、これらはⅡ-2-④（中層水田）層以前の遺構である。埋土はa・b・cに大別できる。埋土aは黒褐色系の砂質シルト。埋土bは、黒褐色系の砂質シルトを主体とし、黄灰色・暗黄灰色砂質土・灰黄色等の砂質土や砂質シルトが若干混じる。埋土cは、黄灰色砂質土・黄灰色砂質シルト・暗黄灰色砂質土・暗黄灰色シルト・灰黄色砂質土などの灰色みをおびた堆積土を埋土の主体としたり、塊が混じったりする。埋土aの遺構からは、弥生時代中期後葉～後期初頭の遺物が出土しており、弥生時代の遺構と判断した。一方、埋土b・cの遺構から出土した遺物には古代後半のものが含まれる。

この中で、A区南東部のDS・DT-41区に位置するSB-415では、SP-460からHWE②に分類できる円盤高台の椀（図78-2）、回転糸切り離し痕を外底面に残す土師器皿HS⑤(図78-1)が出土している。したがって、SD-208・209が開削され、周囲に水田域が営まれた12世紀の初頭～前半に比定できる。また、ほぼ同じ場所には、SB-413・416が重複して営まれるが、SB-416はSR-400と重複する。そこで、SB-413（SR-400の埋没時期）→SB-416（Ⅱ-2-⑥層の下層水田の開田時期）→SB-415（SD-208・209の開削と水田の開田時期）の時期ごとの変遷を推定できる。

A区南半部でもほぼ中央に位置するSB-417・419は、建物方向がほぼ共通し、同時併存した建物群と言える。SB-419では、SP-526からHWW②に分類できる土師器椀（図85-1）が出土しているが、SB-417では、SP-477・480から回転糸切り離し痕を残す土師器皿（図82-1・4）がある。全体形は不明であるが、回転糸切り離し痕がみられる皿はHS⑤しかない。もっとも新しい時期の遺物と、建物方向が共通するSB-415も加え、SB-417・419はSD-208・209が開削され周囲に水田域が営まれた段階の建物群と考えた。また、SB-419はSB-420と重複する。SB-420はSR-400と切り合う。したがって、SB-420は下層水田からSD-208・209が開削され周囲に水田が営まれた時期の建物である可能性が高い。しかし、下層水田の時期に営まれたSB-416とは建物方向が異なり同時併存は考え難い。そこで、SD-208・209の2条の水路の切り合い関係から、後出するSD-208と同時併存する建物としてSB-415・417・419を捉え、SB-420は、先行するSD-209が開削される時期に比定した。さらに、SB-420の建物方向は、A区南西部のSB-421・423とほぼ共通し、これらは同時併存した建物群と推定できる。

A区南半中央部のDV・DW-41区で出土したSB-424では、土師器椀の体部破片（図95-1）が出土している。輪高台をもつと考えられ、体部のひらき具合からHWW①～④の範疇で捉えることができる。ところで、SB-424は、SR-400の埋没時期に比定したSB-413、SD-208と同時併存するSB-415・417・419、SD-209の時期のSB-420とは建物方向が異なる。比較的共通するのはSB-416である。そこで、SB-424をSB-416とともに、Ⅱ-2-⑥層の下層水田の開田時期に比定しておく。そうなると、SB-424と重複するSB-418はSR-400の埋没時期と考えられる。

ⅲ）土壙

一方、土壙の中で、SK-407からは、HWW④に分類できる土師器椀の高台破片（図103-4）と、HWW⑤の高台がつくと考えられる体部破片（図103-2）などが出土している。したがって、SD-208・209が開削

された時期に比定できる。また、SK-425からは、土師器の柱状高台土器（図103- 6）と土鍋（図103- 7）が出土している。柱状高台土器は、裾部が「ハ」字形にひらき、中空部が浅い。これと共通した形状をもつ柱状高台土器は、Ⅱ - 2 - ⑤層（図47-41）でみられる。そこで、SK-425はSD-208・209が開削された時期のものと考える。このようにSK-407・425は、出土遺物からSD-208・209が開削された時期に比定できる。ただし、SD-208かSD-209の時期に伴うかは判断できない。

A区南半中央部のDV-41区に位置するSK-401・408は、SK-401→SK-408→SP-571（SB-417柱穴）の切り合い関係をもつ。SB-417はSD-208・209が開削された時期の遺構であるので、SK-401をSR-400の埋没時期、SK-408を下層水田の時期と考えておく。A区南東部のDS-41区のSK-406は、SB-413・415・416と重複する場所に位置する。これらの掘立柱建物の時期比定と、上層の犂による耕作痕跡の小溝群がみられないことから、SK-406は中層水田と同時併存する可能性が高い。

この他、SK-404は、SB-423とごく近接する。SR-400の埋没時期、もしくはSD-208・209の時期の土壙としておきたい。

iv）溝

A区西部のDV-42・43区で出土したSD-405は、SB-421と重複する。SB-421の比定される時期から考え、SR-400の埋没時期、もしくはSD-208・209の時期の遺構としておく。

v）柵列

柵列SA-409は、その方向がA区の中でもSB-416・424の建物方向にもっとも近い。そこで、下層水田の時期の柵列と推定できる。

（3）時期ごとの遺構の特性と変遷

以上の検討に基づき、A区における遺構の変遷を、水田の構造を含めて整理してみよう。

i）10世紀後半～11世紀

A区北半部を流れるSR-400は、10世紀後半に恒常的な流水がなくなり、SR-400①層で埋積され、谷状の窪地に変化していく。その縁辺には、SB-413・SB-418、SK-401、（SK-404、SD-405 ?）が営まれる。SB-413・SB-418は、いずれも小規模な掘立柱建物で、この時期の集落の本体はA区の南側に展開していると考えられる。

図182　文京遺跡18次調査A区の遺構変遷1（縮尺1／500）

11世紀には、SR-400を埋積する①層の最上部を利用して、Ⅱ-2-⑥層の下層水田が開田される。SD-301を幹線水路とし、支線水路のSD-302が平行して開削され、SD-302から北に向かってSD-307が分岐する。SD-301では、DU-43区のSD-302との分岐点付近には堰が設けられていたと考えられる。また、DS・DT-42・43区で南側に拡張され、擂り鉢状の窪みがつくられ、DU-43区の水路幅が狭くなる地点にも堰を推定できる。こまめな用水管理が行われていることがわかる。こうした下層水田が経営されると同時に、微高地上にはSB-416・424、SK-408、SA-409が営まれる。10世紀後半と同じく、集落の本体部分はA区の南側に展開するが、SB-416は、立柱痕跡が径22cmを測り、比較的大型の建物である。柵列SA-409も加え、SB-416を中心建物として、小規模で簡易な建物であるSB-424が併設されている集落内の建物単位を読み取れる。

こうした11世紀に経営された下層水田と建物群は、Ⅱ-2-⑤層が堆積することで廃絶される。Ⅱ-2-⑤層は、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトや灰黄色砂質シルト、砂礫混じりの黄褐色砂質土で構成される堆積物である。また、部分的にラミナが確認されるので、河川氾濫に伴う比較的緩やかな増水で堆積したものである。河川氾濫の分流がA区の谷状の窪地に流れ込み、下層水田が廃絶したものと考える。Ⅱ-2-⑤層の堆積時期は出土遺物から11世紀代としか比定できないが、Ⅱ-2-⑤層を切り込んで12世紀初頭を上限とするSD-208・209が開削されているので、11世紀後半期と考える。

ⅱ）12世紀

12世紀初頭には、谷状の窪地内にSD-208・209が開削される。周囲には水田域がひろがっていたと考えられるが、水田層は上層のⅡ-2-④（中層水田）層の耕作で削平されている。水田域の範囲は、南側にSK-201・202・204などが位置していること、水配りから考えれば、SD-208・209より北側の谷状の窪地内にとどまっていた可能性が高い。

SD-208・209は重複しており、SD-209がまず開削される。SD-209に伴う微高地上の遺構には、SB-420・421・423、（SK-407？）がある。また、谷状の窪地の落ち際のSK-201・202・204も考えられるが、SD-208、SD-209のどちらに伴うかは明らかでない。微高地上の掘立柱建物は、11世紀とは異なり、ほぼ東西・南北方向をとる。SB-420の立柱痕跡は18～25cmを測り、SB-423が17～20cmであることと比べて大きく、SB-420を中心とする建物群の単位を捉えることができる。

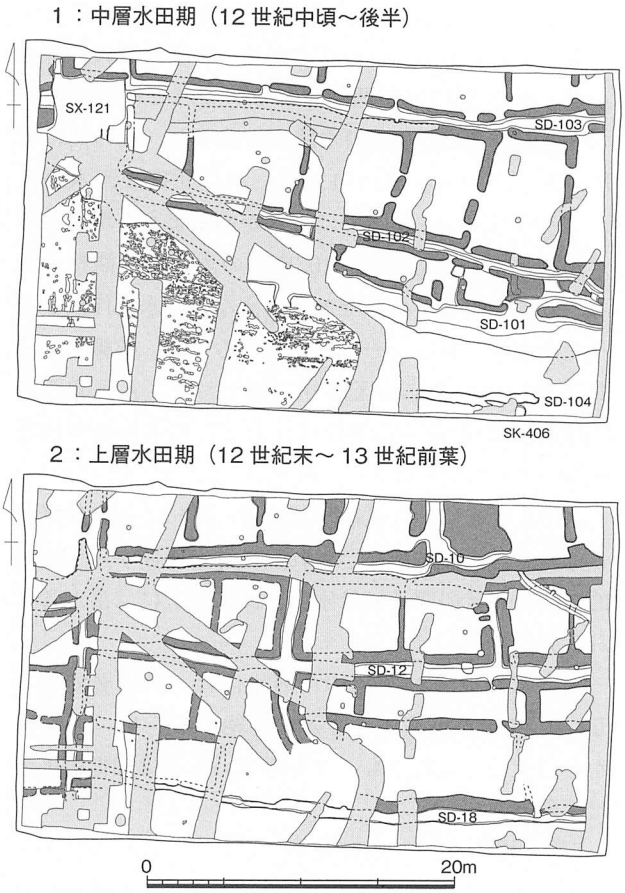


図183　文京遺跡18次調査A区の遺構変遷2（縮尺1／500）

SD-208に伴う遺構には、SB-415・417・419やSK-425、（SK-404・407、SD-405？）がある。SD-209に伴う建物群とほぼ同じ方向で建てられているが、A区の南東部に配置される。その中で、SB-415は、柱穴底面に礎盤の扁平礫を据えた建物で、径23cm前後の立柱痕跡をもつ。これに対して、SB-417・419の立柱痕跡は15～20cmしかない。前段階のSD-209の時期と同様に、比較的大型の建物を中心として、周囲に小規模で簡易の建物が付属する集落を構成する建物単位を見出せる。

以上のSD-208・209の埋土には、砂礫が多く混じり、上部にはラミナ層がみられる。下層水田と同様に、洪水によってSD-208・209のそれぞれに伴う水田とともに廃絶したものと推定できる。

SD-208・209を覆うⅡ-2-④（中層水田）層からは、12世紀中頃に比定できる遺物までが出土している。SD-208に伴う水田が廃絶した後、ほとんど時間

を置かずⅡ-2-④層の中層水田が開田されたことになる。中層水田では、谷状の窪地への落ち際に、幹線水路であるSD-101が開削される。これと間隔をあけてSD-102・103の2条の水路が併設され、その間に水田が区画される。SD-101では一部に旺盛な流水の痕跡がみられるが、恒常的に流水があるような環境は考え難い。また、SD-102・103底面の堆積土の観察からも、豊富な流水があったとは言えない。水条件がかなり悪い水田である。それを解消するため、幹線水路であるSD-101のDU-42区部分に堰をおき、A区北西隅には水溜遺構SX-121が設け、少ない用水の効率的な利用が図られている。

水田とともに、A区南半部では、犂による耕作痕跡と考えられる小溝群に示される畠跡が展開する。相対的に低い谷状の窪地には水田、微高地上には畠が営まれる景観を復元できる。

こうしたⅡ-2-④層の中層水田は、洪水層であるⅡ-2-③層が堆積することで廃絶する。Ⅱ-2-③層から出土した遺物でもっとも新しいものは12世紀後半に比定できる。

ⅲ）12世紀末～13世紀前半

中層水田を廃絶させたⅡ-2-③層の洪水層の上層には、Ⅱ-2-②層の上層水田が拓かれる。出土遺物から開田の時期は12世紀末と推定できる。上層水田は、前段階と比べると、A区北半部の谷状の窪地だけではなく、南半部の微高地上にもひろがっている。また、谷状の窪地という地形的な制約から離れ、ほぼ東西方向にのびるSD-10・12・18の幹線水路を平行して設け、その間に水田を区画する。谷状の窪地が埋積され、より平坦な地形に変化しているとは言っても、微地形の制約を離れて水田がひらかれていることは、水田開発の画期として捉えることができる。

しかし、A区のⅡ-2-②(上層水田)層に伴う水路は、いずれも幅が狭く、幹線水路とは考えられない。微高地を含めて水田域を拡大するためには、A区よりも南側の微高地上に幹線水路を開削する必要がある。

A区から南へ45mほど離れた文京遺跡15次調査7トレンチの南端では、幅5.5mほどを測るSD-27が出土している（図8-2）。SD-27は断面調査だけで、時期を比定できる遺物は出土していないが、18次調査A区の埋土cと同じく、黄灰色や暗黄灰色・暗黄灰色の灰色系の砂礫土で埋積されている。この15次調査7トレンチのSD-27と同一の水路と考えられる溝が、18次調査B区南端部で出土したSD-601である。SD-601は、最大幅3.4mの水路で、少なくとも3条の水路が重複する。近世までの遺物が出土しているが、SD-601を構成する水路の上限は12世紀末まで遡る可能性を指摘していきたい。

いずれにせよ、Ⅱ-2-②（上層水田）層の調査では、12世紀末～13世紀前葉、道後城北遺跡群が位置する扇状地の扇央において、それまで谷状の窪地に限られていた水田域が微高地上まで拡大することを明らかにできた。こうした水田域の拡大は、松山平野を構成する扇状地の各所で見出せる。12世紀末～13世紀における土地開発の画期として捉えることができる。

（4）小結

この上層水田が廃絶するのは、これを覆う洪水層であるⅡ-2-①層から出土した遺物の年代比定から、13世紀前半である。さらに、Ⅱ-2-①層の上層のⅡ-1層も水田層で、その後も水田経営が継続されている。しかし、Ⅱ-1層は近世～近代の水田層である。Ⅱ-2-①層はA区のほぼ全域に堆積しており、SR-400が埋没した谷状の窪地を含めて、周辺がほぼ平坦な地形面となり、その結果、洪水による堆積が少なくなり、そのため、13世紀後半以降の水田層は、より新しい水田の耕作によって削平され残存していない。

以上、A区では、10世紀後半にSR-400がほぼ埋没した後、そこに形成された谷状の窪地にⅡ-2-⑥層の下層水田が開田される。その後、幾度もの洪水で水田の廃絶と開田が繰り返されている。ところが、12世紀～13世紀前半の間に、SD-208・209に示される水田からⅡ-2-②（上層水田）層まで、水田の開田と廃絶が非常に短いサイクルで繰り返される。11世紀代のⅡ-2-⑥（下層水田）層が比較的長い期間営まれ続けた水田であることとは対照的である。こうした頻繁な洪水と水田の開田の繰り返しは、Ⅱ-2-⑤層・Ⅱ-2-③層・Ⅱ-2-①層に示される洪水が原因である。

この12世紀～13世紀前半は、福井県の三方五湖における年縞堆積物の分析で明らかにされている西暦820～1200年の多雨期にあたる。地理学でも、古代後半～中世初頭には、瀬戸内沿岸の沖積平野で段丘（完新世段丘Ⅱ）が形成され、段丘面では洪水の影響が少なくなり、氾濫原面では洪水が頻発して大規模な自然堤防が形成され三角州が拡大することが指摘されている。

文京遺跡は、石手川が造る扇状地の扇央に位置するが、今回の18次調査Ａ区で水田が確認されたのは、扇状地上で網目状に発達する谷状の窪地にあたる。こうした谷状の窪地には、洪水の度に分流が流れ込んだものと考えられる。出土遺物の検討から12世紀代に比定できるSD-208・209に示される水田からⅡ-２-②（上層水田）層まで、水田の開田と廃絶が頻繁に繰り返される要因として、こうした気候変動を考えることも可能である。（田崎）

２　古墳時代

今回の18次調査では、Ｂ区で古墳後期の竪穴式住居跡５棟（SC-605・SC-606・SC-741・SC-747・SC-748）、掘立柱建物３棟（SB-740・SB-744・SB-746）、溝２条（SD-603・SD-610）、土壙４基（SK-647・SK-662・SK-693・SK-697）が出土している。分布をみると、Ｂ区でも北端と南端に偏り、中央部では遺構が希薄となる（図184）。

Ｂ区の土層断面を観察すると、中央部では基本層序のⅢ層はみられず、Ⅳ層の砂礫層が馬の背状に高くなっていることがわかる（図９）。また、Ｂ区の西側の文京遺跡15次調査７トレンチ、17次調査１トレンチでは弥生～古墳時代の遺構が出土しているが、微地形は東から西に向かって次第に標高が低くなる。そのため、Ｂ区周辺はもともと周囲よりも高い地形面であったことがわかる。

前述したように、Ａ区の調査から、12世紀末～13世紀前半以降、Ｂ区の周辺を含めた微高地上に水田域が拡大することが明らかにされている。こうした水田開発に伴って土地改変が進み、もともと高い地形面であったＢ区周辺が削平され、弥生時代や古墳時代の遺構が破壊されたと考えられる。そのため、今回出土したＢ区の古墳時代の遺構は、北端部と南端部に偏った分布をみせることになる。

さて、Ｂ区で出土した遺構は、いずれも古墳後期の竪穴式住居跡や掘立柱建物である。文京遺跡では、古墳後期の竪穴式住居跡や掘立柱建物などの集落関連の遺構は、これまで文京遺跡５・12～17・20次調査区で出土している。さらに、城北団地西半部でも中央の旧グラウンドにあたる12～17次調査区周辺と、その南東側の５・13・20次調査区周辺の２ヶ所に偏った分布をみせる。この２つの竪穴式住居跡・掘立柱建物群は、文京遺跡における古墳後期の集落を構成する２つの単位と捉えることができる。そこで、12～17次調査区周辺を北集落域、５・13・20次調査区周辺を南集落域と呼んでおく。18次調査Ｂ区は、この中の北集落域の一画にあたる。

まず、Ｂ区では、調査区北端でSD-603・SD-610の２条の溝が出土している（図181）。SD-610は、東西方向にのび、幅35～45cmの溝である。SD-610と同様の形状をする溝は、文京遺跡12次調査SD-６、14次調査SD-47、16次調査Ａ区SD-10、17次調査１トレンチSD-9・10、17次調査２トレンチSD-29がある。これらの溝は、切り合い関係や出土遺物から古墳後期に比定される。一跨ぎで飛び越えられる程度の溝幅であり、防御を意図したものではなく、集落域を区画する溝と考えられる。北集落域は、SD-610を始めとする区画溝で取り囲まれた集落単位である。

このSD-610北側の北集落域の外側に位置する地点では、SD-603が発見されている。SD-603は、南東方向から北西方向にのびる。Ｂ区西側の17次調査１トレンチ北端では自然流路SR-01が出土している。SR-01は、幅10m以上で、埋土は黒褐色砂質シルトに暗灰色細砂礫の小ブロックが多数混じる。SD-603の埋土も、茶褐色～黒褐色砂質シルトで、最上部には小さな角礫や粗砂が混じるやや灰色みをおびた茶褐色砂質シルトが堆積し、SR-01の埋積状況と類似する。さらに、SD-603とSR-01の位置関係から、同一の自然流路あるいは溝と考えられる。SR-01は、出土した須恵器などから古墳後期に埋没したと考えられており、SD-603出土遺物と年代的にも齟齬はない。ただし、17次調査１トレンチのさらに西に位置する15次調査７トレンチでは、SD-603やSR-01に対応する遺構はみられない。このことから、SD-603は17次調査１トレンチの西側付近からさらに北西にのび、18次調査Ａ区の谷状の窪地に流れ込むものと推定される。

一方、区画溝であるSD-610の南側にあたるＢ区北端では、５棟の竪穴式住居跡が出土した。北集落域を構成する竪穴式住居跡であるが、北集落域の中心部に

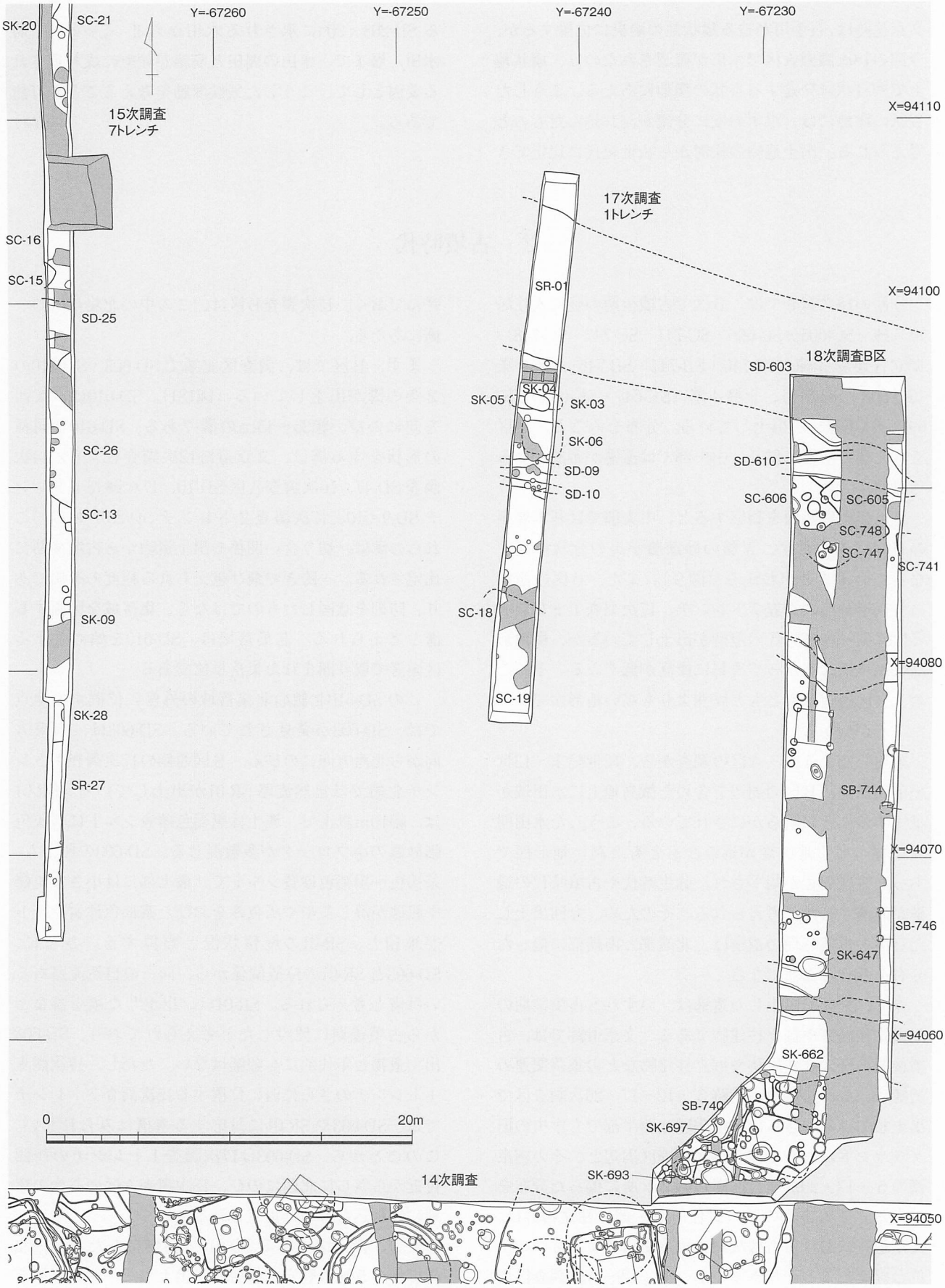


図184　文京遺跡18次調査Ｂ区周辺の古墳時代後期の遺構分布

あたる14次調査区の竪穴式住居が一辺５ｍ前後のものであるのに対して、いずれも小形の方形竪穴式住居跡である。住居跡と言っても、納屋などの用途の建物であったと考えられる。Ｂ区北端は北集落域でも縁辺部にあたり、そうした集落域縁辺に小形の竪穴式住居跡が配置される景観を復元できる。

加えて、Ｂ区中央～南部では、掘立柱建物３棟（SB-740・SB-744・SB-746）が出土している。SB-744、SB-746は弥生時代～古墳時代の時間幅でしか捉えることはできないが、SB-740は梁行３間×桁行３間の建物である。SB-740については、切り合い関係、柱間から古墳後期の可能性が高いことを報告した。古墳後期の文京遺跡では、掘立柱建物は１間×１間あるいは１間×２間、２間×２間の規模が一般的である。そのため、３間×３間であるSB-740は特異な建物であり、建物の用途が異なるものと考える。しかし、具体的な性格については、北集落域全体の構成と構造を明らかにした上で論議する必要がある。北集落域の中心部にあたる14・16次調査区の整理の過程で明らかにできるものと考える。ここでは、北集落域が区画溝で区画されていること、集落内における計画的な建物配置の可能性を示すにとどめておく。

（三吉）

3　弥生時代

今回の18次調査では、Ａ区・Ｂ区ともに、弥生時代の遺構が出土している。いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定され、当該期の文京遺跡に営まれた大規模集落を構成する遺構群である。ただし、Ａ区とＢ区は70mほど離れており、出土遺構の状況も異なっている。そこで、Ａ区とＢ区に分けて、その調査成果をまとめる。

（1）Ａ区

Ａ区北半部を流れる自然流路SR-400は、前述したように10世紀後半にほぼ埋没し谷状の窪地へと変化するが、恒常的に流水がある状態で堆積した旧中州の砂礫堆であるSR-400③層からは、奈良時代～平安時代前半期、古墳後期の遺物とともに、弥生前期～後期中葉の遺物が大量に出土している。量的には、弥生中期～後期中葉の遺物が圧倒的に多い。そのため、文京遺跡に大規模集落が営まれた時期にも、SR-400には恒常的に流水がある状態であったと考えられる。

既往の調査成果からみると、Ａ区のSR-400は、東から流れてくる３条の自然流路が合流する位置にある（図８-１）。こうした自然流路に挟まれた微高地で、Ａ区南側の微高地はもっとも高い地形面であり、弥生中期後葉～後期前葉の大規模集落が占地している。これに対して、北側の中州状の微高地は相対的に低い地形面で、当該期の遺構の分布密度は低い。SR-400は、弥生中期前葉～前葉の大規模集落の北限を区切る自然流路と考えられる。

そうした大規模集落の北限を区切るSR-400への落ち際のＡ区南半部の微高地上では、掘立柱建物５棟（SB-410～412・414・422）、土壙２基（SK-402・403）が出土している。これらの遺構は、出土遺物と埋土の特徴から、いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。かつ、自然流路沿いという狭い範囲ではあるが、Ａ区の大きな特徴として、竪穴式住居跡がみられず、掘立柱建物が中心となって構成されている点があげられる。また、掘立柱建物はいずれも小規模で、高床倉庫と考えられる。さらに、Ａ区南西部では、SB-411・412・422が重複し、SK-403が切り合う。配置関係から、これらは同時併存していたとは考えられず、弥生中期後葉～後期前葉の時間幅の中で立て替えが繰り返され

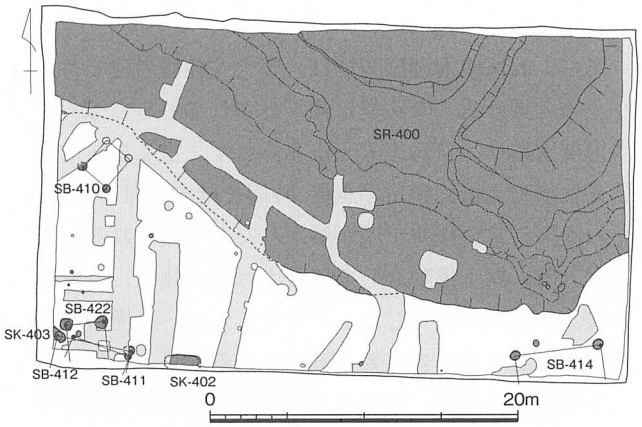


図185　文京遺跡18次調査Ａ区における弥生時代の遺構分布（縮尺１／500）

ている。文京遺跡の他の調査区では、小形の掘立柱建物は竪穴式住居跡に付属する高床倉庫である。A区南西部のように、小形の掘立柱建物が幾度も立て替え直されることもない。A区の南側の状況は明らかではないが、小形の掘立柱建物が主体となる集落区画、つまり高床倉庫群から構成される集落全体の貯蔵空間を復元できる。

以上、A区の調査では、弥生中期後葉～後期前葉の文京遺跡の大規模集落の北限を確定できた。また、そこには、高床倉庫と考えられる小型掘立柱建物群から構成される集落全体の貯蔵空間を想定することができる。今回の調査成果の一つである。（田崎）

（2）B区

B区は、文京遺跡の中枢域と考えられている大型掘立柱建物群が発見された3・7次調査地の北西約40mに位置する（図186）。竪穴式住居跡8棟（SC-670・689・729・730・738・750・751・752）、掘立柱建物1棟（SB-749）、土 壙15基（SK-663・666・675・684・690・695・705・710・711・713・725・732・733・735・739）、炭化物集積遺構1基（SX-669）、そして柱穴および小穴が出土している。

これらの遺構は、B区南端部に集中する。その北側のB区中央部では、当該期の遺構は分布していない。しかし、前述したように、B区中央部は、後世の削平で遺構が失われていると考えられる（図185）。

時期的には、いずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。特殊な遺構は見られないが、竪穴式住居跡や土壙などが繰り返し作られており、B区の南に隣接する12・14次調査地同様に、密集型集落の一画にあたる。

さて、B区南端部周辺では、竪穴式住居の建て替えや土壙の掘り返しが頻繁に繰り返されている。しかし、遺構埋土には、自然流入土はみられず、古くなった竪穴式住居や土壙は使用停止後、時間を経ずに埋め戻し、新たな竪穴式住居や土壙が築かれたと考えられる。発掘調査時に埋土遺物として取り上げた遺物は、遺構廃棄後、短期間に混入したものと考えられ、遺構の埋没時期を検討する際の重要な資料である。以上の性格をもつ埋土出土遺物、床面直上出土遺物の検討や遺構の切り合い関係の分析から、B区南端部の主要遺構の変遷をまとめた（図187）。

B区南端部で遺構が築かれ始めるのは、文京遺跡に人々が集住し始めた弥生中期後葉の段階である。その中でももっとも古い遺構は隅丸長方形の土壙SK-690である。SK-690埋没後、後期初頭までの間に竪穴式住居跡SC-738、SC-689の2棟が連続して築かれる。さらに、竪穴式住居跡の周辺にはSK-684などの小土壙が掘られる。

後期前葉段階になると、6棟の竪穴式住居跡（SC-670・729・731・750・751・752）が築かれる。このうち竪穴式住居の全形がわかるのはSC-670のみである。しかし、主柱穴の位置や残存する住居の平面プランから、6棟の竪穴式住居はいずれも近接して築かれており、2棟同時に併存したとは考えられない。よって竪穴式住居は6回の建て替えが行われたことになる。

6棟の竪穴式住居跡は、主柱穴構造や切り合い関係から変遷がたどれる。まず主柱穴に着目すると、5本柱構造であるSC-751とSC-752、2本柱構造のSC-670とSC-750、主柱穴不明のSC-729とSC-731に分類できる。

2本柱構造の住居跡であるSC-750とSC-670との関係をみると、主柱穴は同じ東西方向を指向する。さらに、主柱穴の位置関係をみると、SC-750の主柱穴は、SC-670の主柱穴から約50cm南に移動した位置に設けられている。遺構の切り合い関係から、SC-750が古く位置づけられる。よってSC-750からSC-670へ建て替えが行われたと考えられる。

5本柱構造であるSC-751・752は、直接的な切り合い関係がないことから、先後関係は不明である。この5本柱構造の住居跡は、14次調査北東部でも出土している（図185）。14次調査は、現在整理中で詳細な時期比定は困難であるが、B区南端周辺で5本柱構造の住居跡が、継続的に建て替えられた様子が窺える。

主柱穴不明のSC-729・730は、5本柱構造のSC-752と切り合い関係にある。SC-729・730は、SC-752に先行することから、SC-730→SC-729→SC-752と変遷する。同じ5本柱構造の住居跡であるSC-751は、SC-729・730・752との先後関係は不明である。しかし、SC-751がSC-752と同一の主柱穴構造であり、建物構造の連続性を重視すると、SC-730→SC-729→SC-752→SC-751もしくはSC-730→SC-729→SC-751→SC-752という変遷が想定される。

以上のように、5本柱構造の住居跡と主柱穴不明の

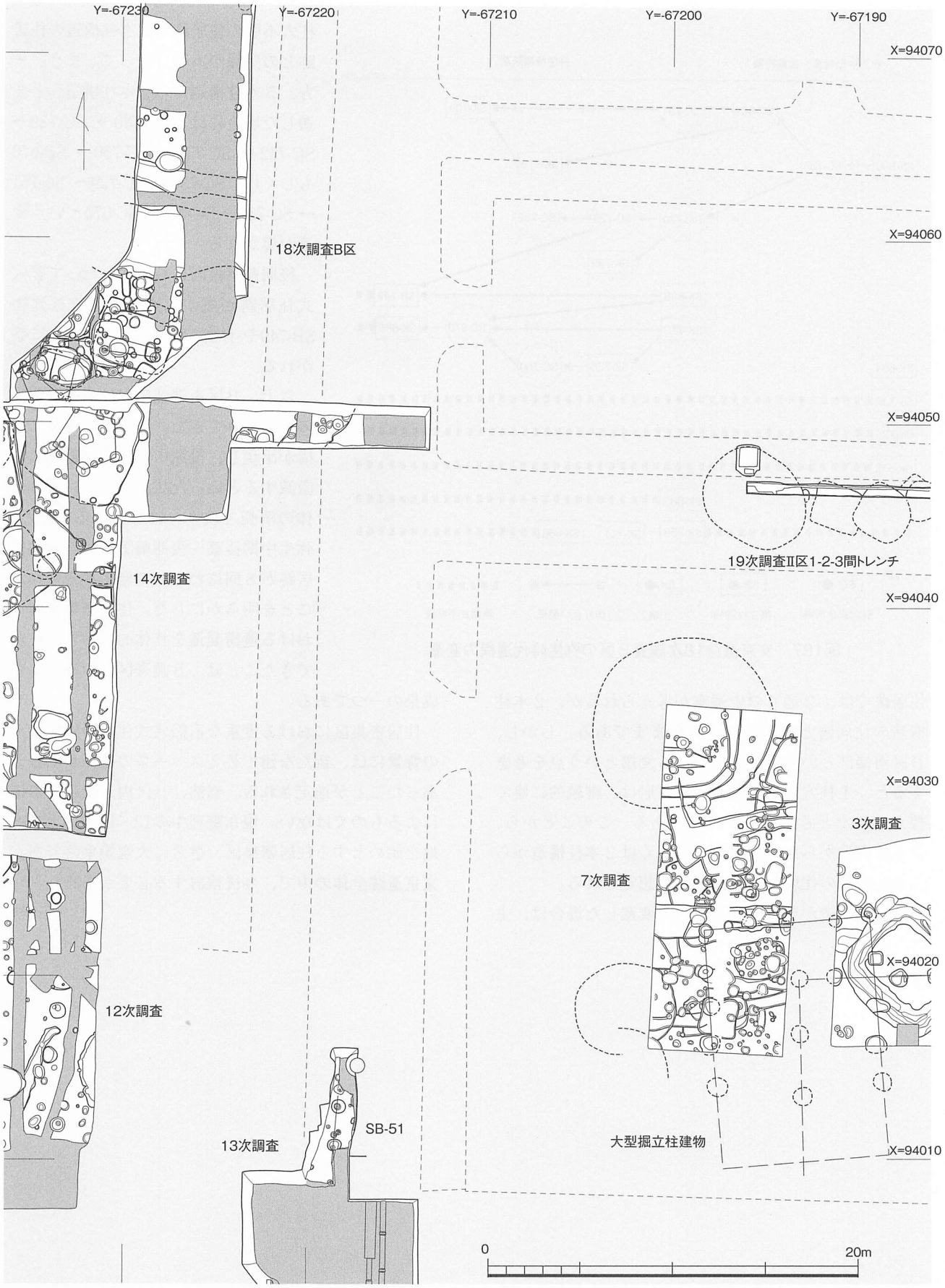


図186　文京遺跡18次調査Ｂ区周辺の弥生時代の遺構分布

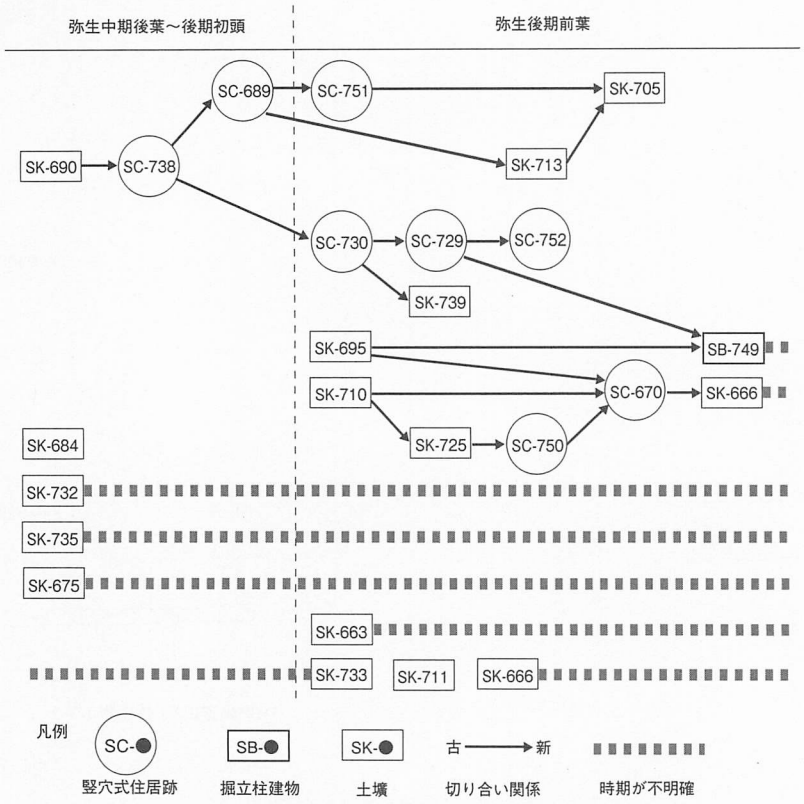


図187　文京遺跡18次調査Ｂ区の弥生時代遺構の変遷

住居跡では、２通りの変遷案が考えられるが、２本柱構造の住居跡との関係は不明なままである。しかし、Ｂ区南端部という小地区における変遷という点を考慮すると、主柱穴構造が共通する住居は、継続的に建て替えられたと考えるのが自然である。このことから、５本柱構造から２本柱構造、もしくは２本柱構造から５本柱構造の住居へという変遷が想定される。

２本柱構造から５本柱構造へと変遷した場合は、主柱穴不明の住居跡と２本柱構造の住居跡との関係が不明となってしまう。一方、５本柱構造から２本柱構造へと変遷した場合には、SC-730→ SC-729→ SC-752→ SC-751→ SC-750→ SC-670もしくは、SC-730→ SC-729→ SC-751→ SC-752→ SC-750→ SC-670という変遷が導かれる。

後期前葉段階に６回にわたって竪穴式住居跡が築かれた後、掘立柱建物SB-749や土壙SK-666などが新たに築かれる。

以上、Ｂ区南端部における主要遺構の変遷をみてきた。弥生中期後葉に遺構が出現し、後期中葉以降、遺構数が激減するといった状況は、文京遺跡全体の消長と軌を一にしている。また、弥生中期後葉～後期前葉に、竪穴式住居跡が８回にわたって建て替えられたことを明らかにした。住居密集区内における遺構変遷を具体的に示すことができたことは、Ｂ調査区における調査成果の一つである。

住居密集区における度重なる竪穴式住居の建て替えの背景には、新たな建て替えスペースの確保が困難であったことが推定される。当然、Ｂ区周辺だけの事情によるものではない。現在整理中の12・14・16次調査地を始めとする住居密集区、さらに大規模集落である文京遺跡全体の中で、今後検討する必要があろう。

（三吉）

巻末表１　文京遺跡 18 次調査遺構一覧

遺構 略号	遺構 番号	調査区		調査所見	埋土類型
SS	1	A区	DR・DS-45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文26頁に報告。	
SS	2	A区	DS・DT-45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文26頁に報告。	
SS	3	A区	DU・DV-45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文27頁に報告。	
SS	4	A区	DR・DS-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文27頁に報告。	
SS	5	A区	DS-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文28頁に報告。	
SS	6	A区	DT・DU-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文28頁に報告。	
SS	7	A区	DU・DV-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文28頁に報告。	
SD	8	A区	DT-45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文33頁に報告。	
SD	9	A区	DT-45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文33頁に報告。	
SD	10	A区	DT～DY-45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文34頁に報告。	
SD	11	A区	DT-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文35頁に報告。	
SD	12	A区	DR-43～DY-42・43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文35頁に報告。	
SS	13	A区	DR・DS-42・43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文28頁に報告。	
SS	14	A区	DS～DU-43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文29頁に報告。	
SS	15	A区	DU・DV-43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文29頁に報告。	
SS	16	A区	DR・DS-41・42	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文29頁に報告。	
SS	17	A区	DS～DV-41・42	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文30頁に報告。	
SD	18	A区	DR-41～DX-42	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文36頁に報告。	
SS	19	A区	DR～DY-41	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文30頁に報告。	
SS	20	A区	DV・DW-45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文30頁に報告。	
SS	21	A区	DW・DX-45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文30頁に報告。	
SS	22	A区	DX・DY-44・45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文31頁に報告。	
SS	23	A区	DY・DZ-44・45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文31頁に報告。	
SD	24	A区	DY-41～45	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文38頁に報告。	
SD	25	A区	DV-42～44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文38頁に報告。	
SS	26	A区	DV・DW-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文31頁に報告。	
SS	27	A区	DW～DY-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文31頁に報告。	
SS	28	A区	DW～DY-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文31頁に報告。	
SD	29	A区	DY-44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文39頁に報告。	
SS	30	A区	DY・DZ-43・44	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文32頁に報告。	
SS	31	A区	DV～DZ-42・43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文32頁に報告。	
SS	32	A区	DX・DY-42・43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文32頁に報告。	
SS	33	A区	DX・DY-42・43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文32頁に報告。	
SS	34	A区	DY・DZ-42・43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文32頁に報告。	
SS	35	A区	DV-42・43	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文32頁に報告。	
SS	36	A区	DV・DW-41・42	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文33頁に報告。	
SS	37	A区	DW・DX-42	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文33頁に報告。	
SS	38	A区	DX・DY-42	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文33頁に報告。	
SS	39	A区	DY・DZ-42	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文33頁に報告。	
SS	40	A区	DY・DZ-41・42	Ⅱ-2-②（上層水田）層水田。詳細は本文33頁に報告。	
SP	40	A区	DT-43	上辺50cm、底辺約70cm前後の隅丸台形状の掘り形をもつ。深さ８cm。埋土は灰黄褐色砂質シルト。径１～1.5mmほど白色砂礫がまばらに混じる。	埋土c
SP	41	A区	DT-43	径45cmの円形の掘り形をもつ。深さ９cm。埋土は灰黄褐色砂質シルト。上部ほど径１～２mmの白色砂礫が多く混じる。	埋土c
SP	42	A区	DS-43	径27～30cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ６cm。埋土は灰黄褐色土。径１mm以下の白色砂礫が多く混じる。	埋土c
SD	101	A区	DR-42～DY-44	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文49頁に報告。	
SD	102	A区	DR-43～DX-44	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文52頁に報告。	
SD	103	A区	DR～DZ-45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文53頁に報告。	
SD	104	A区	DS～DU-41	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文54頁に報告。	
SS	105	A区	DT-42・43	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文43頁に報告。	
SS	106	A区	DT～DV-42・43	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文44頁に報告。	
SS	107	A区	DR・DS-43～45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文45頁に報告。	
SS	108	A区	DS・DT-43・44	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文45頁に報告。	
SS	109	A区	DT・DU-43・44	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文46頁に報告。	
SS	110	A区	DU・DV-43～45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文46頁に報告。	
SS	111	A区	DR・DS-45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文47頁に報告。	
SS	112	A区	DS-45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文47頁に報告。	
SS	113	A区	DT～DV-45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文47頁に報告。	
SD	114	A区	DR・DS-42	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文55頁に報告。	
SS	115	A区	DV～DX-43～45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文48頁に報告。	
SS	116	A区	DX-44・45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文48頁に報告。	
SS	117	A区	DV～DX-45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文48頁に報告。	
SS	118	A区	DX・DY-45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田。詳細は本文49頁に報告。	
SD	119	A区	DY・DZ-45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文55頁に報告。	
SD	120	A区	DY-45	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文55頁に報告。	

遺構 略号	遺構 番号	調査区		調査所見	埋土類型
SX	121	A区	DY-44・45	不整方形の溜池施設。詳細は本文56頁に報告。	
SD	122	A区	DT-42・43	Ⅱ-2-④（中層水田）層水田伴う水路。詳細は本文55頁に報告。	
SK	123	A区	DT-43	Ⅱ-2-④（中層水田）層伴う土壙。詳細は本文56頁に報告。	
SK	201	A区	DT・DU-42・43	SD-301を切る不整円形の土壙。詳細は本文61頁に報告。	
SK	202	A区	DU・DV-43	SD-301を切る膨らみを持つ隅丸方形の土壙。詳細は本文62頁に報告。	
SK	203	A区	DU-45	SS-309・312間畦畔を切る浅い不整な長円形の小型土壙。詳細は本文62頁に報告。	
SK	204	A区	DV-43	SD-301・302間畦畔を切る浅い長円形の小型土壙。詳細は本文62頁に報告。	
SP	205	A区	DS-42	径35×36cmの円形の掘り形をもつ。深さ7cm。淡茶褐色シルトを埋土とする。	埋土c
SP	206	A区	DV-44	径23×28cmの長円形の掘り形をもつ。深さ6cm。埋土は砂礫が少量混じる茶灰色砂質シルト。SP-212・213と比べて茶色みが強い。炭化物小片が出土。	埋土c
SP	207	A区	DV・DW-44	径17～20cmの円形の掘り形をもつ。深さ7～8cm。SP-206と共通した特徴の埋土。SD-302を切る。	埋土c
SD	208	A区	DR～DZ-43～45	詳細は本文62頁に報告。	
SD	209	A区	DR-43・44～DX-45	詳細は本文66頁に報告。	
SP	210	A区	DV-44	径35×29cmの隅丸方形の掘り形をもつ。深さ29cm。埋土は灰茶色砂質シルトを埋土とする。	埋土c
SP	211	A区	DW-43	径18～19cmの円形の掘り形をもつ。深さ17cm。埋土は茶灰色砂質シルト。SD-302を切る。上面で拳大の花崗岩円礫が出土。	埋土c
SP	212	A区	DV-44	径31cmの円形の掘り形をもつ。深さ8cm。茶色みが強い灰茶色砂質シルト。SD-208を切る。炭化物小片が点々と出土。	埋土c
SP	213	A区	DV-44	径74×62cmの不整な長円形の掘り形をもつ。深さ10cm。埋土は灰茶色砂質シルトを埋土。SD-208の溝底で確認。	埋土c
SP	214	A区	DU-43	径26×21cmの長円形の掘り形をもつ。深さ19cm。埋土は茶灰色シルト。親指先大の円礫が点々と混じる。	埋土c
SD	301	A区	DR～DY-42～44	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文73頁に報告。	
SD	302	A区	DS～DV-43・44	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文75頁に報告。	
SS	303	A区	DR・DS-43・44	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文69頁に報告。	
SS	304	A区	DS・DT-43・44	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文69頁に報告。	
SS	305	A区	DS-44	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文70頁に報告。	
SS	306	A区	DR・DS-44・45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文70頁に報告。	
SD	307	A区	DT-43～DS-44・45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田に伴う水路。詳細は本文76頁に報告。	
SS	308	A区	DT・DU-43・44	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文70頁に報告。	
SS	309	A区	DT・DU-44・45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文71頁に報告。	
SS	310	A区	DT・DU-45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文71頁に報告。	
SS	311	A区	DU～DW-44・45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文71頁に報告。	
SS	312	A区	DU・DV-45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文71頁に報告。	
	313	欠番			
SS	314	A区	DW・DX-44・45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文72頁に報告。	
	315	欠番			
SS	316	A区	DV・DW-45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文72頁に報告。	
SS	317	A区	DX～DZ-44・45	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文72頁に報告。	
SS	318	A区	DR・DS-44	Ⅱ-2-⑥（下層水田）層水田。詳細は本文72頁に報告。	
SR	400	A区	調査区北半部	自然流路。詳細は本文78頁に報告。	
SK	401	A区	DV-41	径1.65～1.7mの不整円形の土壙。詳細は本文110頁に報告。	埋土c
SK	402	A区	DX-41	細長い楕円形の土壙。詳細は本文114頁に報告	埋土a
SK	403	A区	DZ-41	SP-570を切る長円形の土壙。詳細は本文116頁に報告	埋土a
SK	404	A区	DZ-42	径1.55mの不整円形の土壙。詳細は本文116頁に報告。	埋土b
SD	405	A区	DY-42・43	幅30～43cm、残存長2.5mの溝。詳細は本文118頁に報告。	埋土c
SK	406	A区	DS-41	残存長1.25mの楕円形の土壙。詳細は本文116頁に報告。	埋土c
SK	407	A区	DV-42	径68×139cmの不整形の土壙。深さ16cm。詳細は本文116頁に報告。	埋土c
SK	408	A区	DV-41	南北径90cmほどの小型土壙。詳細は本文116頁に報告。	埋土c
SA	409	A区	DW・DX-41・42	SP-497・598・599・507・506で構成される柵列。詳細は本文118頁に報告。	埋土c
SB	410	A区	DY-43・44	SP-441・541・559で構成される掘立柱建物。詳細は本文92頁に報告。	埋土a
SB	411	A区	DY・DZ-41	SP-549・551で構成される掘立柱建物。詳細は本文94頁に報告。	埋土a
SB	412	A区	DY・DZ-41	SP-550・570で構成される掘立柱建物。詳細は本文94頁に報告。	埋土a
SB	413	A区	DR・DS-41	SP-456・462で構成される掘立柱建物。詳細は本文95頁に報告。	埋土b
SB	414	A区	DR～DT-41	SP-455・467で構成される掘立柱建物。詳細は本文95頁に報告。	埋土a
SB	415	A区	DS・DT-41	SP-460・461・464・465・468で構成される掘立柱建物。詳細は本文96頁に報告。	埋土b
SB	416	A区	DR～DT-41・42	SP-457・591・592で構成される掘立柱建物。詳細は本文99頁に報告。	埋土c
SB	417	A区	DU・DV-41・42	SP-472・476・478・479・480・571で構成される掘立柱建物。SP-474・477は添え柱もしくは補強用の柱か？　詳細は本文100頁に報告。	埋土c
SB	418	A区	DV・DW-41	SP-483・484で構成される掘立柱建物。詳細は本文102頁に報告。	埋土c
SB	419	A区	DW・DX-42・43	SP-498・526・562・568で構成される掘立柱建物。詳細は本文104頁に報告。	埋土c
SB	420	A区	DW・DX-42・43	SP-513・514・515・516で構成される掘立柱建物。詳細は本文105頁に報告。	埋土c
SB	421	A区	DY-42・43	SP-533・534・535・536・537で構成される掘立柱建物。詳細は本文106頁に報告。	埋土c
SB	422	A区	DY・DZ-42・43	SP-556・557で構成される掘立柱建物。詳細は本文108頁に報告。	埋土a
SB	423	A区	DY・DZ-42・43	SP-545・547・587で構成される掘立柱建物。詳細は本文108頁に報告。	埋土b
SB	424	A区	DW-41	SP-487・492で構成される掘立柱建物。詳細は本文109頁に報告。	埋土c
SK	425	A区	DW-42・43	長軸長1.3m、短軸長70cmの不整形の土壙。詳細は本文118頁に報告。	埋土c
	426～440	欠番			

遺構 略号	遺構 番号	調査区		調査所見	埋土類型
SP	441	A区	DY-44	15次調査８トレンチ SP-１。SB-410を構成する柱穴。詳細は本文92頁に報告。	埋土a
SP	442	A区	DY-43	15次調査８トレンチ SP-２。	埋土a
SP	443	A区	DY-44	花崗岩円礫が出土。詳細は本文119頁に報告。	埋土c
SP	444	A区	DY-44	SP-443に切られる。径28×31cmの不整円形。埋土は砂礫まじりの灰茶色砂質シルト。	埋土c
SP	445	A区	DY-44	径26×30cmの楕円形。砂礫まじりの灰茶色砂質シルトの埋土。	埋土c
SP	446	A区	DY-43	径20cmの円形。砂礫まじりの灰茶色砂質シルトの埋土。	埋土c
SP	447	A区	DX-42	攪乱で東半部が破壊。推定径30～35cm。深さ６cm前後。埋土の特徴を記録せず。	－
SP	448	A区	DX-43	径20×23cmの楕円形。深さ８cm。埋土は砂礫まじりの灰茶色砂質シルト。	埋土c
SP	449	A区	DW・DX-42	径14cmの略円形。埋土は砂礫まじりの灰茶色砂質シルト。	埋土c
SP	450	A区	DW・DX-42	SP-510に切られる。径26cmの不整円形。深さ11cm。埋土は砂礫まじりの灰茶色砂質シルト。	埋土c
SP	451	A区	DR-42	径44×48cmの長円形の掘り形をもつ。浅い窪み状で、確実に小穴とは判断できなかった。上層部分の掘り残しの可能性がある。	
SP	452	A区	DS-42	径32cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ12cm。SP-589を切る。灰色系土が混じる。	埋土c
	453	欠番			
SP	454	A区	DS-42	径35cm前後の浅い窪み状。浅い窪み状で、確実に小穴とは判断できなかった。上層部分の掘り残しの可能性がある。	埋土c
SP	455	A区	DR・DS-41	SB-414を構成する柱穴。詳細は本文95頁に報告。	埋土a
SP	456	A区	DS-41	SB-413を構成する柱穴。詳細は本文95頁に報告。	埋土b
SP	457	A区	DS-41	SB-416を構成する柱穴。詳細は本文99頁に報告。	埋土c
SP	458	A区	DS-41	径36×45cmの長円形の掘り形をもつ。深さ21cm。SP-460を切る。上部には黄褐色砂質土や暗黄灰色砂質土の塊が多く混じる黒褐色砂質シルト、下部は②黄褐色砂質シルトに黒褐色砂質シルトが薄い縞状に混じる。	埋土c
SP	459	A区	DS-41	径39×49cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ６cm。浅い窪み状。黒褐色砂質シルトに暗黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。埋土中から弥生土器の胴部小片２点が出土。	埋土a
SP	460	A区	DS-41	SB-415を構成する柱穴。詳細は本文96頁に報告。	
SP	461	A区	DT-41	SB-415を構成する柱穴。詳細は本文96頁に報告。	埋土b
SP	462	A区	DS-41	SB-413を構成する柱穴。詳細は本文95頁に報告。	埋土b
	463	A区	欠番。		
SP	464	A区	DS-41	SB-415を構成する柱穴。詳細は本文96頁に報告。	埋土b
SP	465	A区	DT-41	SB-415を構成する柱穴。詳細は本文97頁に報告。	埋土b
SP	466	A区	DS-41	詳細は本文119頁に報告。	埋土b
SP	467	A区	DT-41	SB-414を構成する柱穴。詳細は本文95頁に報告。	埋土a
SP	468	A区	DS-41	SB-415を構成する柱穴。詳細は本文97頁に報告。	埋土b
SP	469	A区	DT-41	径50～52cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ43cm。暗灰黄色砂質土と浅黄色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	470	A区	DT-41	径21～23cmの不整円形の掘り形をもつ。暗灰黄色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	471	A区	DT-41	詳細は本文119頁に報告。	埋土a
SP	472	A区	DT・DU-41	SB-417を構成する柱穴。詳細は本文100頁に報告。	埋土c
SP	473	A区	DT-41	詳細は本文119頁に報告。	埋土c
SP	474	A区	DU-41	SB-417の添え柱または補強用の柱と考えられる。詳細は本文102頁に報告。	埋土c
SP	475	A区	DU-41	長径38cm、短径30cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ14cm。SP-476を切る。暗灰黄色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	476	A区	DT・DU-41	SB-417を構成する柱穴。詳細は本文100頁に報告。	埋土c
SP	477	A区	DT・DU-41・42	SB-417の添え柱または補強用の柱と考えられる。詳細は本文102頁に報告。	埋土c
SP	478	A区	DU-41	SB-417を構成する柱穴。詳細は本文101頁に報告。	埋土c
SP	479	A区	DU-41	SB-417を構成する柱穴。詳細は本文101頁に報告。	埋土c
SP	480	A区	DV-41・42	SB-417を構成する柱穴。詳細は本文101頁に報告。	埋土c
SP	481	A区	DV-41	長径23cm、短径16cmの長円形の掘り形をもつ。深さ11cm。埋土は砂礫混じりの褐灰色砂質土。	埋土c
SP	482	A区	DV-41	長径20cm、短径16cmの長円形の掘り形をもつ。深さ６cm。埋土は砂礫混じりの褐灰色砂質土。	埋土c
SP	483	A区	DV-41	SB-418を構成する柱穴。詳細は本文102頁に報告。	埋土c
SP	484	A区	DW-41	SB-418を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土c
SP	485	A区	DV-41	長径20cm、短径15cmの長円形の掘り形をもつ。深さ23cm。埋土は砂礫混じりの褐灰色砂質土。	埋土c
SP	486	A区	DV-41	径15～17cmの円形の掘り形をもつ。深さ14cm。埋土は褐灰色系の砂質土。	埋土c
SP	487	A区	DW・DV-41	SB-424を構成する柱穴。詳細は本文109頁に報告。	埋土c
SP	488	A区	DV-41	長径25cm、短径20cmの長円形の掘り形をもつ。深さ８cm。SP-489と切り合う。埋土は褐灰色系の砂質土。	埋土c
SP	489	A区	DW-41	長径20cm、短径13cmの長円形の掘り形をもつ。深さ８cm。SP-489と切り合う。褐灰色系の砂質土。埋土から弥生土器片５点が出土。1点は甕の屈曲部周辺の破片、内外面ともにナデられている。他は甕の胴部小片。いずれも小片で図示できなかった。弥生中期後葉を前後する時期のものか？	埋土c
SP	490	A区	DW-41	長径17cm、短径14cmの長円形の掘り形をもつ。深さ15cm。褐灰色系の砂質土。	埋土c
SP	491	A区	DW-41	径32～34cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ19cm。褐灰色系の砂質土。	埋土c
SP	492	A区	DW-41	SB-424を構成する柱穴。詳細は本文110頁に報告。	埋土c
SP	493	A区	DW-41	径16～18cmの円形の掘り形をもつ。深さ６cm。褐灰色系の砂質土。	埋土c
SP	494	A区	DW-41	径15cmの円形の掘り形をもつ。深さ18cm。褐灰色系の砂質土。	埋土c
SP	495	A区	DW-41	杭痕跡を確認。詳細は本文120頁に報告。	埋土c
SP	496	A区	DW-41	杭痕跡を確認。詳細は本文120頁に報告。	埋土c
SP	497	A区	DW-42	SA-409を構成する杭穴。詳細は本文118頁に報告。	埋土c
SP	498	A区	DW-42	SB-419を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土c
SP	499	A区	DW-41	径16～17cmの円形の掘り形をもつ。深さ４cm。灰褐色砂質土。	埋土c
SP	500	A区	DW-41	径32×28cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ10cm。灰褐色砂質土。	埋土c

遺構 略号	番号	調査区		調査所見	埋土類型
SP	501	A区	DW-41	径20×16cmの不整楕円形の掘り形をもつ。深さ10cm。灰褐色砂質土。	埋土c
SP	502	A区	DW-42	長径27cm、短径21cmの不整形の掘り形をもつ。深さ30cm。灰褐色砂質土。	－
SP	503	A区	DW-42	径24×33cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ27cm。	－
SP	504	A区	DW-42	径27×28cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ27cm。	－
SP	505	A区	DW-42	径33×38cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ22cm。	－
SP	506	A区	DX-41	SA-409を構成する杭穴。詳細は本文119頁に報告。	埋土c
SP	507	A区	DX-41	SA-409を構成する杭穴。詳細は本文119頁に報告。	埋土c
SP	508	A区	DX-41	古代後半の遺物がかたまって出土。詳細は本文120頁に報告。	埋土c
SP	509	A区	DX-42	径45×40cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ4cm。窪み状。埋土は灰褐色砂質土。	埋土c
SP	510	A区	DW・DX-42	SP-450を切る。径21×27cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ21cm。灰茶色砂質シルトの埋土。	埋土c
SP	511	A区	DW-42	径40cmの円形の掘り形をもつ。深さ52cm。埋土は褐灰色砂質土。炭化物片が出土。	埋土c
SP	512	A区	DW-42	径15×17cmの円形の掘り形をもつ。深さ22cm。SB-579を構成する柱穴か？　埋土は褐灰色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	513	A区	DW-42	SB-420を構成する柱穴。詳細は本文105頁に報告。	埋土c
SP	514	A区	DX-42	SB-420を構成する柱穴。詳細は本文105頁に報告。	埋土c
SP	515	A区	DX-43	SB-420を構成する柱穴。詳細は本文106頁に報告。	埋土c
SP	516	A区	DW-42	SB-420を構成する柱穴。詳細は本文106頁に報告。	埋土c
SP	517	A区	DV-42・43	径60×51cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ12cm。埋土は砂礫混じりの灰黄褐色砂質土を主体として、明黄褐色砂質土やにぶい黄橙色砂質土の塊が少量混じる。	埋土c
SP	518	A区	DW-42	径20cmの略円形の掘り形をもつ。砂礫まじりの灰茶色砂質シルトの埋土。	埋土c
SP	519	A区	DW-42・43	SK-425に振り替え。詳細は本文118頁に報告。	－
SP	520	A区	DW-42・43	SK-425に振り替え。詳細は本文118頁に報告。	－
SP	521	A区	DW-43	径11×14cmの略円形の掘り形をもつ。深さ6cm。埋土は砂礫まじりの灰茶色砂質シルト。	埋土c
SP	522	A区	DW-43	径14×24cmの長円形の掘り形をもつ。深さ6cm。埋土は砂礫まじりの灰茶色砂質シルト。	埋土c
SP	523	A区	DW-42・43	径64×54cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ26cm。埋土は砂礫混じりの灰黄褐色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の塊が少量混じる。	埋土c
SP	524	A区	DW-43	径30×85cmの長円形の掘り形をもつ。深さ9cm。埋土は褐灰色砂質土を主体としてにぶい黄橙色・にぶい黄橙色砂質土の塊が混じる。炭化物片が出土。	埋土c
SP	525	A区	DX-42・43	径23×26cmの長円形の掘り形をもつ。深さ11cm。埋土の特徴を記録せず。	－
SP	526	A区	DX-42・43	SB-419を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土b
SP	527	A区	DX-43	径41～42cmの略円形の掘り形をもつ。深さ13cm。埋土は黒褐色砂質シルトと暗黄灰色砂質土を主体とする。埋土中から、壺もしくは鉢の底部破片（図107-4）と、壺の胴部破片が出土。	埋土b
SP	528	A区	DY-42・43	柱痕跡を確認。詳細は本文121頁に報告。	埋土a
SP	529	A区	DX-43	南西側が一段低くなる。径26×29cmの略円形の掘り形をもつ。深さ14cm。埋土の特徴を記載せず。埋土中から、弥生後期中頃の甕口縁部片（図107-8）と、甕胴部片の2点が出土。	－
SP	530	A区	DX-43	径49×54cmの略円形の掘り形をもつ。深さ5～9cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄灰色砂質土の小塊が多く混じる。	埋土b
SP	531	A区	DX-43	径46×50cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ37cm。埋土の特徴を記録せず。	－
SP	532	A区	DX-42	径31cmの略円形の掘り形をもつ。深さ24cm。埋土の特徴を記録せず。	－
SP	533	A区	DX・DY-42・43	SB-421を構成する柱穴。詳細は本文106頁に報告。	b類似の埋土c
SP	534	A区	DX・DY-43	SB-421を構成する柱穴。詳細は本文106頁に報告。	埋土c
SP	535	A区	DY-43	SB-421を構成する柱穴。詳細は本文107頁に報告。	
SP	536	A区	DY-42・43	SB-421を構成する柱穴。詳細は本文107頁に報告。	埋土c
SP	537	A区	DY-42・43	SB-421を構成する柱穴。詳細は本文107頁に報告。	埋土c
SP	538	A区	DX-43	攪乱によって大部分が失われている。掘り形の推定径64cm。深さ21cm。埋土は黒褐色砂質土に黄褐色砂質シルトおよび黄灰色砂質土が縞状に互層状態でみられる。	埋土b
SP	539	A区	DY-43	詳細は本文122頁に報告。	埋土a
SP	540	A区	DY-43・44	径29×35cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ8cm。砂礫混りの灰茶色砂質シルトの埋土。	埋土c
SP	541	A区	DY-44	SB-410を構成する柱穴。詳細は本文94頁に報告。	埋土a
SP	542	A区	DY-44	径32×35cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ5cm。灰色系土の埋土。	埋土c
SP	543	A区	DZ-42	径31～33cmの円形の掘り形をもつ。深さ6cm。灰色系土の埋土。	埋土c
SP	544	A区	DY-42	径13×15cmの略円形の掘り形をもつ。深さ6cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色シルト小塊が混じる。	埋土a
SP	545	A区	DZ-42	SB-423を構成する柱穴。詳細は本文109頁に報告。	埋土b
SP	546	A区	DY-42	径30×26cmの円形の掘り形をもつ。深さ35cm。灰色系土の埋土。	埋土c
SP	547	A区	DY-42	SB-423を構成する柱穴。詳細は本文109頁に報告。	埋土b
SP	548	A区	DY-41	径40×34cmの不整な長円形。深さ12cm。埋土の特徴を記録せず。埋土上部から弥生中期後葉～後期初頭と考えられる甕の口縁部片・胴部片の2点が出土。	－
SP	549	A区	DY-41	SB-411を構成する柱穴。詳細は本文94頁に報告。	埋土a
SP	550	A区	DY-41	SB-412を構成する柱穴。詳細は本文94頁に報告。	埋土a
SP	551	A区	DY-41	SB-411を構成する柱穴。詳細は本文94頁に報告。	埋土a
SP	552	A区	DX-41	径20～22cmの円形の掘り形をもつ。深さ7cm。灰褐色砂質土の埋土。	埋土c
	553	欠番			
SP	554	A区	DY-42	径13～14cmの略円形の掘り形をもつ。深さ6cm。灰褐色砂質土の埋土。	埋土c
SP	555	A区	DX-42	径27×23cmの長円形の掘り形をもつ。深さ7cm。灰褐色砂質土の埋土。	埋土c
SP	556	A区	DY-41・42	SB-422を構成する柱穴。詳細は本文108頁に報告。	埋土a
SP	557	A区	DY・DZ-41・42	SB-422を構成する柱穴。詳細は本文108頁に報告。	埋土a
SP	558	A区	DY-42	径21cmの略円形の掘り形をもつ。深さ26cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色シルト小塊が点々と混じる。小指先大の炭化物片が少量出土。	埋土a

遺構 略号	遺構 番号	調査区		調査所見	埋土類型
SP	559	A区	DY-43	SB-410を構成する柱穴。詳細は本文94頁に報告。	埋土a
SP	560	A区	DY-41	径19cmの円形の掘り形をもつ。深さ14cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土c
SP	561	A区	DY-41	径16～18cmの円形の掘り形をもつ。深さ8cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土c
SP	562	A区	DW-42	SB-419を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土c
SP	563	A区	DW-42	径21×30cmの長円形の掘り形をもつ。深さ10cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土c
SP	564	A区	DW-42	径24×28cmの楕円形の掘り形をもつ。深さ12cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土c
SP	565	A区	DV-42	径27×29cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ10cm。埋土は灰褐色砂質土。	埋土c
SP	566	A区	DS-41	詳細は本文122頁に報告。	埋土a
SP	567	A区	DS-42	柱痕跡を確認。詳細は本文122頁に報告。	埋土a
SP	568	A区	DX-42	SB-419を構成する柱穴。詳細は本文104頁に報告。	埋土b
SP	569	A区	DS-42	SP-589に切られる。詳細は本文122頁に報告。	埋土b
SP	570	A区	DZ-41	SB-412を構成する柱穴。詳細は本文94頁に報告。	埋土a
SP	571	A区	DV-41	SB-417を構成する柱穴。詳細は本文102頁に報告。	埋土c
SP	572	A区	DS-42	径27×32cmの長円形の掘り形をもつ。深さ5cm。埋土は黒褐色砂質シルトで、下部には黄褐色砂質シルト小塊が点々と混じる。	埋土a
	573	欠番			
	574	SB-413に振り替え。欠番。			
	575	SB-415に振り替え。欠番。			
	576	欠番。			
	577	SB-417に振り替え。欠番。			
	578	SB-418に振り替え。欠番。			
	579	SB-419に振り替え。欠番。			
	580	SB-420に振り替え。欠番。			
	581	SB-421に振り替え。欠番。			
	582	欠番			
	583	欠番			
SP	584	A区	DX-41	SK-403を切る。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	585	A区	DS-42	径26～28cmの円形の掘り形をもつ。深さ4cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。	埋土a
SP	586	A区	DS-42	径40×47cmの長円形の掘り形をもつ。深さ16cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色・暗黄灰色砂質土が混じる。	埋土b
SP	587	A区	DZ-41	SB-423を構成する柱穴。詳細は本文109頁に報告。	埋土b
SP	588	A区	DY-42	径16～17cmの略円形の掘り形をもつ。深さ9cm。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色シルト小塊が混じる。炭化物小片が出土。	埋土a
SP	589	A区	DS-42	径80×61cmの楕円形、深さ15cmの掘り形をもつ。SP-569を切り、SP-452に切られる。埋土は黒褐色砂質シルトに黄灰色砂質土が多く混じり、全体に白っぽい土色。下部には黄褐色砂質シルトの塊が点々と混じる。埋土中から須恵器（図107-15）、弥生土器が出土。	埋土b
SP	590	A区	DW -43	径12×16cmの略円形の掘り形をもつ。深さ14cm。灰黄褐色砂質土を主体とする埋土。	埋土c
SP	591	A区	DT-41	SB-416を構成する柱穴。詳細は本文100頁に報告。	埋土bまたはc
SP	592	A区	DS-42	SB-416を構成する柱穴。詳細は本文100頁に報告。	埋土b
SP	593	A区	DV-41	SK-401を切る小穴。埋土の詳細は本文110頁で、SK-401とともに報告。	埋土b
SP	594	A区	DV-41	SK-401に切られる。推定径50cm。深さ7cm。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	595	A区	DV-42	径31×33cmの略円形の掘り形をもつ。深さ19cm。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	596	A区	DV-42	径26×35cmの不整円形の掘り形をもつ。深さ9cm。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	597	A区	DW-42	径18×24cmの不整円形の掘り形をもつ。埋土は灰黄褐色砂質土を主体とする。	埋土c
SP	598	A区	DW-41	SA-409を構成する杭穴。詳細は本文118頁に報告。	埋土c
SP	599	A区	DW-41	SA-409を構成する杭穴。詳細は本文118頁に報告。	埋土c
SP	600	A区	DW・DX-42	径30×26cmの長円形の掘り形をもつ。深さ11cm。埋土は灰色みが強い灰褐色砂質土。	埋土c
SD	601	B区	DH-32･33	幅3m前後の溝。詳細は本文144頁を参照。	－
SD	602	B区	DG･DH-33	幅1.1～1.5mの東西方向にのびる溝。SK-647と切り合う。詳細は本文144頁を参照。	－
SD	603	B区	DG･DH-39	東西にのびる溝。SD-604・610を切る詳細は本文145頁を参照。	埋土a
SD	604	B区	DG･DH-38･39	東西に延びる深さ15cmの溝。SC-605・606を切る。SD-603に切られる。詳細は本文150頁を参照。	埋土c
SC	605	B区	DH-38･39	方形あるいは長方形の竪穴式住居跡。規模は不明。SD-604、SP-608に切られる。SC-606を切る。詳細は本文124頁を参照。	埋土a
SC	606	B区	DH-38･39	方形あるいは長方形の竪穴式住居跡。SC-605に切られる。詳細は本文125頁を参照。	埋土a
SP	607	B区	DH-38	楕円形。長径74cm、短径70cm、深さ12cm。詳細は本文170頁記載。	埋土a
SP	608	B区	DH-38	立柱痕跡を確認。SC-605を切る。詳細は本文170頁を参照。	埋土a
SP	609	B区	DH-38	東側を撹乱溝により欠損。円形。径56cm、深さ10cm。SC-605を切る。詳細は本文170頁を参照。	埋土a
SD	610	B区	DH-39	SD-604底面下で確認した東西方向にのびる溝。SD-604に切られ、SP-611を切る。詳細は本文150頁を参照。	－
SP	611	B区	DH-39	西側は撹乱、南側はSD-604・610に切られ全形は不明。残存部径46cm、深さ2.5cm。詳細は本文170頁を参照。	－
SP	612	B区	DH-38	立柱痕跡を確認。詳細は本文133頁を参照。	埋土a
SP	613	B区	DH-38	立柱痕跡を確認。詳細は本文134頁を参照。	埋土a
SP	614	B区	DH-38	北側は撹乱によって欠損。楕円形。残存長径44cm、短径35cm、深さ12cm。SP-615を切る。埋土は黒褐色砂質シルト。	埋土a
SP	615	B区	DH-38	不定形。径41cm、深さ9.6cm。SP-613に切られる。埋土は黒褐色砂質シルト。砂礫を少量含む。	埋土a
SP	616	B区	DG-38	円形。径10～11cm、深さ4.2cm。埋土は黒褐色シルト。にぶい黄褐色シルトの2～3cm大の楕円形の塊が多く混じる。	埋土a
SP	617	B区	DG-36	SB-744の柱穴。詳細は本文143頁を参照。	埋土a
SP	618	B区	DG-35	SB-744の柱穴。詳細は本文143頁を参照。	埋土a
SP	619	B区	DH-38	立柱痕跡を確認。詳細は本文125頁を参照。	埋土a
SP	620	B区	DH-38	立柱痕跡を確認。詳細は本文125頁を参照。	埋土a

遺構 略号	番号	調査区		調査所見	埋土類型
SP	621	B区	DH-38	楕円形。径26～29cm、深さ7.4cm。SC-606床面で検出。黒褐色砂質シルトの埋土。	埋土a
SP	622	B区	DH-38	立柱痕跡を確認。詳細は本文128頁を参照。自然礫が出土。	－
SP	623	B区	DH-39	調査区西壁に沿って検出。半円形。残存部径32cm、深さ4.3cm。埋土は黒褐色砂質シルト。	埋土a
SP	624	B区	DH-36	円形。径10cm。深さ16.6cm。埋土は灰褐色シルト。埋土上部から土師器の壺口縁部片が１点出土している（図174-2）。	埋土c
SP	625	B区	DH-35･36	歪な円形の掘り形をもつ。径40cm、深さ17.1cm。埋土は黒褐色シルト。砂礫を多く含む。	埋土a
SP	626	B区	DH-35･36	立柱痕跡を確認。詳細は本文171頁を参照。	埋土a
SD	627	B区	DH-36･37	北西から南東にのび、撹乱部で屈曲し東に延びる近世の溝。詳細は本文151頁参照。	－
SP	628	B区	DH-38	長楕円形の掘り形。長径54cm、短径40cm、深さ10.2cm。埋土は黒褐色砂質シルト。小礫を含む。弥生土器・土師器の小片が11点出土。底部に回転糸切り痕が見られる土師器皿片が１点出土している（図172-12）。	埋土a
SP	629	B区	DH-37	撹乱によって西側・東側は欠損。残存部径25cm、深さ8.2cm。埋土はやや茶色みを帯びた黒褐色砂質シルト。砂礫を多く含む。	埋土a
SP	630	B区	DH-35	円形の掘り形。径25～26cm。深さ6.3cm。埋土は茶褐色シルト。	埋土a
SP	631	B区	DH-36	楕円形の掘り形。長径48cm、短径40cm、深さ30.7cm。灰褐色シルトの埋土。	埋土c
SP	632	B区	DH-36	SB-743の柱穴。詳細は本文141頁を参照。	埋土c
SP	633	B区	DH-36	円形の掘り形。径24cm。西半分は撹乱により一部欠損。円形。径24cm、深さ7.8cm。灰褐色シルトの埋土。	埋土c
SP	634	B区	DH-36	SB-743の柱穴。詳細は本文141頁を参照。	埋土c
SP	635	B区	DH-36	SB-743の柱穴。詳細は本文141頁を参照。	埋土c
SP	636	B区	DH-36	SB-743の柱穴。詳細は本文141頁を参照。	埋土c
SP	637	B区	DH-36	歪な円形の掘り形。径40～43cm、深さ28cm。詳細は本文172頁を参照。	埋土c
SP	638	B区	DH-34	北側は撹乱により欠損。円形。径46cm、深さ27.8cm。埋土は黒褐色砂質シルト。砂質土を多く含む。	埋土a
SP	639	B区	DH-34	円形の掘り形。径42cm、深さ34.3cm。黒褐色砂質シルトの埋土。	埋土a
SP	640	B区	DH-34	楕円形の掘り形。径29～32cm、深さ13cm。埋土は黒褐色砂質シルト。	埋土a
SP	641	B区	DH-34	調査区西壁沿いで検出。半円形。径40cm、深さ13cm。黒褐色砂質シルト。	埋土a
SP	642	B区	DH-34	円形の掘り形。径26cm、深さ18.1cm。埋土は茶色みを帯びた黒褐色砂質土。小石はあまり含まない。	埋土a
SP	643	B区	DH-34	円形の掘り形。径23cm、深さ10.3cm。埋土は茶色みを帯びた黒褐色砂質土。小石はあまり含まない。	埋土a
SP	644	B区	DH-34	楕円形の掘り形。径18～20cm、深さ3.4cm。埋土は茶色みを帯びた黒褐色砂質土。小石はあまり含まない。	埋土a
SP	645	B区	DH-33･34	東側半分は撹乱により欠損。半円形。径28cm、深さ16.2cm。埋土は黒褐色砂質土。小石・砂礫を多く含む。	埋土a
SP	646	B区	DH-33	東側は撹乱により欠損。残存部径30cm、深さ12.5cm。埋土は茶色みを帯びた黒褐色砂質土。小石は余り含まない。	埋土a
SK	647	B区	DH-33	SD-602と切り合う不整楕円形の土壙。詳細は本文152頁を参照。	埋土c
SP	648	B区	DG-34	SB-746の柱穴。詳細は本文143頁を参照。	埋土a
SP	649	B区	DG-34	SB-746の柱穴。詳細は本文143頁を参照。	埋土a
	650	欠番			
SP	651	B区	DH-32	西側は撹乱によって欠損。半円形の掘り形。径25cm、深さ７cm。埋土は黒褐色砂質土。径２cm大の明茶褐色粘質シルトの小塊が２、３点混じる。	埋土a
SP	652	B区	DH-32	東側の一部は撹乱によって欠損。長円形の掘り形。短径19、長径24cm、深さ17cm。埋土は黒褐色砂質シルト。明茶褐色の粘質シルトの３cm×４cm大の塊が落ち込む。	埋土a
SP	653	B区	DH-32	楕円形の掘り形。径32～35cm、深さ26cm。埋土は黒褐色砂質シルト。粗砂・小さな角礫を多く含む。	埋土b
SP	654	B区	DH-32	丸みをおびた五角形の掘り形。径32cm、深さ16cm。黒褐色砂質シルト。にぶい黄褐色砂質土の径２cm大の小塊が点々と混じる。	埋土a
SP	655	B区	DH-32	東半分は撹乱によって欠損。残存部での長辺66cm。隅丸長方形あるいは長楕円形。深さ20cm。埋土は黒褐色砂質土。径１～２cm大の円礫を２、３点含む。弥生土器甕・壺胴部小片が４点出土。壺底部近くの胴部下部片を図化（図173-2）。	埋土a
SP	656	B区	DH-31･32	楕円形の掘り形。径50～58cm。深さ19cm。SC-670を切る。詳細は本文172頁を参照。	埋土a
SP	657	B区	DH-31	東半分は撹乱によって欠損。残存径25cm、深さ15cm。	－
SP	658	B区	DH-32	東側は撹乱に切られ欠損。半円形。径28cm、深さ９cm。黒褐色砂質シルトの埋土。	埋土a
SP	659	B区	DH-32	長円形の掘り形。長径84cm、短径65cm、深さ19cm。SK-662に切られる。SK-695を切る。詳細は本文172頁を参照。	埋土a
SP	660	B区	DH-32	SB-749の柱穴。SK-695を切る。詳細は本文143頁を参照。	埋土a
SP	661	B区	DH-32	楕円形の掘り形。径54cm、深さ15cm。SC-670を切る。詳細は本文173頁を参照。	埋土a
SK	662	B区	DH-32	西端は欠損するが、長辺1.15m、最大幅70cmの長楕円形の土壙。SD-601、SP-658に切られる。SP-659を切る。詳細は本文152頁を参照。	埋土a
SK	663	B区	DH-32	残存長125cm、最大幅45cm、深さ10cmの浅い船底状土壙。SD-601、SP-664・665に切られる詳細は本文152頁を参照。	埋土a
SP	664	B区	DH-32	SK-663を切る。円形。径45cm、深さ９cm。埋土は黒褐色砂質土。にぶい黄褐色砂質土が比較的多く混じる。Ⅲ層部分から弥生時代中期～後期の壺胴部片３点、甕胴部片１点、器種不明土器片１点が出土。埋土中から石が出土しているが、所在不明で石器かどうかについては不明。鉄滓（R-2640）が１点出土。	埋土a
SP	665	B区	DH-32	楕円形の掘り形。径32cm～40cm、深さ10cm。SD-601に切られる。SK-663を切る。埋土は黒褐色砂質土。下部を中心としてにぶい黄褐色砂質土が多く混じる。Ⅲ層部分から弥生時代中期後葉の甕口縁部片と壺あるいは甕胴部片が出土。	埋土a
SK	666	B区	DH-31	残存長南北37cm、東西35cmの長方形あるいは方形を呈する土壙。深さ10cm。SC-670を切る。詳細は本文153頁を参照。	埋土a
SP	667	B区	DH-31	SK-666床面で検出。南は撹乱により欠損。残存部径30cm、深さ８cm。埋土は黒褐色砂質土。	埋土a
SP	668	B区	DH-31	SK-666床面で検出。南側は調査区外へ続く。残存部径48cm、深さ20cm。埋土は黒褐色砂質土。わずかににぶい黄褐色砂質土を混じる。埋土下部から弥生時代中期から後期の鉢が１点出土。	埋土a
SX	669	B区	DI-31	Ⅲ層上部で検出した約50cm四方の炭化物や土器片の広がり。詳細は本文170頁を参照。	埋土a
SC	670	B区	DH･DI-31･32	長辺4.1m、短辺2.95mの長方形竪穴式住居跡。SK-695・710・725を切る。SK-666、SP-656・673・687に切られる。詳細は本文128頁を参照。	埋土a
SP	671	B区	DI-32	SB-740の柱穴。SK-675・710を切る。詳細は本文138頁を参照。	埋土a

遺構 略号	番号	調査区		調査所見	埋土類型
SP	672	B区	DI-32	北東部はSP-727に、西側は撹乱及びSK-739によって破壊されている。歪な円形の掘り形で、径60cm、深さ9cm。埋土は黒褐色砂質シルト。下部ににぶい黄褐色砂質土が少量混じる。弥生時代中期後葉から後期前葉の壺頸部片（図173-9）の他に壺胴部片1点、甕胴部片3点出土。	埋土a
SP	673	B区	DI-32	SB-749の柱穴。SK-710、SC-670を切る。詳細は本文144頁を参照。	埋土a
SP	674	B区	DI-32	SK-739を切る。西側半分は撹乱によって上面を削り取られる。楕円形の掘り形をもち、径35～38cm、深さ30cm。埋土は黒褐色砂質シルト。暗灰色の粗砂が多く混じる。弥生時代中期から後期の土器壺胴部片が1点出土。石が出土しているが所在不明。	埋土a
SK	675	B区	DI-32	残存長1.1m、幅30cm、深さ5cmの隅丸方形あるいは隅丸長方形土壙の一部。SP-671に切られる。詳細は本文154頁を参照。	埋土a
SP	676	B区	DI-31	SC-752の主柱穴。SC-729埋土上面で検出。柱穴の東側は撹乱により破壊されている。掘り形の径47cm。深さは最深部で17cm。詳細は本文137頁を参照。	埋土a
SP	677	B区	DI-31	西側は撹乱により欠損。長円形の掘り形で、長径56cm、残存部短径40cm、深さ17cm。SK-713を切る埋土は暗褐色砂質土。径2～3mmの灰白色砂礫や径10cmの円礫を含む。弥生時代中期後葉～後期前葉の壺・甕胴部片等が約10点出土。縄文時代晩期の深鉢口縁部片（図173-10）と弥生時代中期後葉～後期中葉に見られる弥生土器鉢の胴上部片（同-11）を図化している。遺物の一部には、下部遺構からの混じりがある。	埋土a
SP	678	B区	DI-31	楕円形の掘り形で、径34～37cm、深さ14cm。SP-702を切る。埋土は暗褐色砂質土。径2～3mmの灰白色砂礫を多く含む。径1cm大の円礫を含む。弥生土器壺胴部片1点、壺・甕胴部細片1点が出土。R-2152（取り上げR-152）は壺胴部片が1点出土。R-2153（取り上げR-153）は弥生時代中期の壺胴部片1点、甕小片が1点が出土。	埋土a
SP	679	B区	DI-31	SP-703を切る。やや歪な円形。径18cm、深さ5cm。埋土は暗褐色砂質土。明黄褐色砂質土の丸いブロックが混じる。	埋土a
SP	680	B区	DI-31	SC-751の主柱穴。短径35cm、長径46cmの楕円形の掘り形。深さは21cm。詳細は本文135頁を参照。	埋土a
SP	681	B区	DI-31	SB-740の柱穴。SK-705を切る。詳細は本文138頁を参照。	埋土a
SP	682	B区	DJ-31	SC-689、SP-734を切る。一辺37～38cmの角の丸い三角形状。深さ13cm。暗褐色砂質土。明黄褐色砂質土のブロックを少量混じる。遺物は、東西で取り上げを分けたが、西半分出土遺物には、下部遺構からの混入が生じている。西半分から弥生土器壺胴部片1点、壺・甕小片2点、細片6点が出土。東半分から弥生土器甕の胴部片1点、壺・甕小片7点、細片1点に混じって、須恵器坏蓋口縁部小片が出土（図174-1）。	埋土a
SP	683	B区	DI-31	立柱痕跡を検出。SK-684・SK-725・732、SP-715を切る。詳細は本文174頁を参照。	埋土a
SK	684	B区	DH・DI-31	径35cm以上の楕円形土壙。深さは西側では10cm、東で18cm。SP-683に切られる。詳細は本文154頁を参照。	埋土a
SP	685	B区	DI-31	南側は撹乱で欠損。半円形。径17cm、深さ14cm。埋土は黒褐色砂質シルトで、灰色砂質土が多く混じる。埋土上部から弥生土器壺・甕・高坏・鉢の小片・細片が9点出土。その中には甕あるいは鉢の口縁部端部片で端部内面を上方に摘みあげるものや、高坏脚端部小片で、端部に面取り調整を行い、わずかに下方に突出させるものが見られる。	埋土a
SP	686	B区	DI-31	SC-752の主柱穴。南側・西側は撹乱により欠損。径38cmの円形あるいは隅丸方形状の掘り形。詳細は本文137頁を参照。	埋土a
SP	687	B区	DH・DI-31	SB-740の柱穴。詳細は本文138頁を参照。	埋土a
SP	688	B区	DI-31	SB-740の柱穴。SK-690、SC-689を切る。詳細は本文138頁を参照。	埋土a
SC	689	B区	DI・DJ-31	方形または長方形の竪穴式住居跡。深さ13cm。SP-680・682・688・702・736、SK-693・713に切られ、SK-690、SC-738を切る。詳細は本文131頁を参照。	埋土a
SK	690	B区	DI-31	長辺3m、短辺2m、深さは45cmの隅丸長方形土壙である。SP-677・678・702・709、SC-687・713、SK-689・693・705に切られ、SK-735を切る。詳細は本文155頁を参照。	埋土a
SP	691	B区	DI	SP-688に切られる。半円形。径20cm、深さ12cm。埋土は暗褐色砂質土。明黄褐色砂質土の丸いブロックを少量含む。	埋土a
SK	693	B区	DI・DJ-31	東西残存長1.6m、南北残存長35cmの長楕円形もしくは隅丸長方形の土壙。SP-736に切られる。SP-691、SC-689、SK-690を切る。詳細は本文155頁を参照。	埋土a
SK	695	B区	DH-32	長辺2.2m、幅80cm、深さ9cmの歪な長方形土壙。SC-670・SP-654・659・660に切られる。SP-724・745を切る。詳細は本文156頁を参照。	埋土a
SP	696	B区	DI-31	SK-739を切る。円形、径35cm、深さ12cm。黒褐色砂質シルト。	埋土a
SK	697	B区	DI-31・32	1辺1.15m、残存幅50cm、深さ26cmの隅丸の方形あるいは長方形の土壙と考えられる。南西部にはテラス状の面をもつ。SP-708、SK-739を切る。詳細は本文158頁を参照。	埋土a
SP	698	B区	DI-31・32	西側はSK-739、東側は撹乱溝に切られる。径32cm、深さ19cm。埋土は黒褐色砂質シルト。砂礫を多く含む。	埋土a
SP	699	B区	DI-31・32	SC-670床面で検出。円形。径30cm、深さ21cm。黒褐色シルトの埋土。弥生時代中期後葉の甕口縁部片2点（図173-14・15）、後期中葉の壺口縁部片1点（13）を図化。その他、弥生土器甕片2点、壺・甕胴部片が12点出土。	埋土a
SP	700	B区	DI-31	SC-670床面で検出。主柱穴。掘り形径30cmの円形。最深部で15cm。詳細は本文128頁を参照。	埋土a
SP	701	B区	DI-31	SC-670床面で検出。長円形。長径42cm、短径32cm、深さ22cm。埋土は黒褐色砂質シルト。弥生土器壺・甕胴部小片・細片14点が出土。その中には、甕の頸部片が1点ある。頸部の付け根には、強い横ナデ調整により凹線状を呈する。その他に土製品の一部（図173-16）が出土。	埋土a
SP	702	B区	DI-31	北東部はSP-678に切られる。残存長辺80cm。最大幅62cmを測る長楕円形掘り形。最深部で16cmを測る。詳細は本文174頁を参照。	埋土a
SP	703	B区	DI-31	SC-752主柱穴。壁際に沿って検出したため、掘り形は径55cmの半円状を呈する。深さは最深部で30cmを測る。詳細は本文137頁を参照。	埋土a
SP	704	B区	DI・DJ-31	SC-752主柱穴。SK-693に切られる。SC-689を切る。詳細は本文137頁を参照。	埋土a
SK	705	B区	DI-31	残存長1.1m、幅1.5mを測る隅丸方形または隅丸長方形土壙である。SK-713、SP-728を切り、SP-681に切られる。詳細は本文160頁を参照。	埋土a
SP	706	B区	DH-31	SC-670主柱穴。詳細は本文128頁を参照。	埋土a
SP	707	B区	DH-31	撹乱溝底で検出。楕円形。径32～36cm、深さ7cm。	－
SP	708	B区	DI-32	SK-697に切られる。北西部は調査区外へと続く。深さ18cm。埋土は黒褐色砂質シルト。弥生土器甕胴部片1点と高坏の脚部片と考えられる小片1点（図173-17）が出土。	埋土a
SP	709	B区	DI-31	SB-740の柱穴。詳細は本文139頁を参照。	埋土a
SK	710	B区	DH・DI-32	残存長55cm、幅90cm、深さ10cmの長方形あるいは方形の土壙。SC-670、SP-671・673に切られる。詳細は本文162頁を参照。	埋土a

遺構 略号	遺構 番号	調査区		調査所見	埋土類型
SK	711	B区	DH-31	検出面で長辺１m、幅0.5mの隅丸方形土壙。SP-706に切られる。SP-714を切る。詳細は本文162頁を参照。	埋土a
SP	712	B区	DH-31	SP-687・742に切られる。SC-670床面で検出。内面ケズリ調整が施された弥生土器甕胴部小片が２点出土。	埋土a
SK	713	B区	DI-31	残存長２m、幅2.1m、深さ44cmの隅丸方形あるいは長方形土壙。SK-705・677・678・681・702・709に切られ、SC-689・729・730を切る。詳細は本文164頁を参照。	埋土a
SP	714	B区	DH-31	SC-750主柱穴。詳細は本文134頁を参照。	埋土a
SP	715	B区	DH・DI-31	立柱痕跡を検出。SP-683に切られる。SK-725・732を切る。詳細は本文174頁を参照。	埋土a
SP	716	B区	DH-31	立柱痕跡を検出。SK-732を切る。SC-670に切られる。詳細は本文175頁を参照。	埋土a
	717	欠番			
SP	718	B区	DH・DI-32	SK-725・SC-670に切られる。深さ６cm。南西部はSK-725に切られ欠損。円形の掘り形をもつ。径62cm、深さ６cm。埋土は黒褐色砂質シルト。にぶい黄褐色砂質土の小指先大の小塊が多く混じる。外面に刷毛目調整を施した甕胴部小片が１点、壺・甕胴部小片が１点、細片が１点出土。	埋土a
SP	719	B区	DI-32	SK-725に切られる。歪な円形の掘り形をもち、短径45cm、長径49cm、深さ８cm。黒褐色砂質シルト。にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。外面縦方向にヘラミガキ、内面ケズリ調整を施した甕胴部片１点、壺・甕胴部小片が２点が出土。	埋土a
SP	720	B区	DI-31	SC-750の主柱穴。SK-725を切る。SC-670、SP-687に切られる。掘り形は径55cmの円形。詳細は本文134頁を参照。	埋土a
SP	721	B区	DH-31	SC-670を切る。円形の掘り形で、径65cm、深さ30cm。埋土は黒褐色砂質シルトに、直径２～３cm大の花崗岩円礫を多く含む。壺胴部小片１点、甕胴部小片４点、高坏脚部片が１点出土。脚端部に凹線文が巡る高坏（図174-11）と土師器の甕の口縁部から胴部上部片（同12）を図化している。	埋土a
SP	722	B区	DH・DI-31	SK-687・725に切られる。長楕円形の掘り形で、残存部径70cm、深さ21cm。埋土は黒褐色砂質シルト。にぶい黄褐色砂質土が径１cm大の小塊で多く混じる。埋土上部から外面にヘラミガキを施した壺胴部片１、小片１点が出土。埋土中位から甕口縁部小片が１点出土。埋土下部から弥生土器壺胴部片、胴部小片が各１点出土。	埋土a
SP	723	B区	DH・DI-31	立柱痕跡を検出。SP-687、SK-725に切られる。詳細は本文175頁を参照。	埋土a
SP	724	B区	DH-32	立柱痕跡を検出。SC-670、SK-695に切られる。詳細は本文175頁を参照。	埋土a
SK	725	B区	DH・DI-31・32	長辺2.5m、短辺1.7mの隅丸長方形土壙。SP-722・SC-729・730を切り、SC-670、SP-676・687・699・700・701・709・715・719・720に切られる。SK-732とも切り合うが、先後関係は不明。詳細は本文164頁を参照。	埋土a
SP	726	B区	DI-32	円形の掘り形で、径26cm、深さ10cm。埋土は黒褐色砂質シルト。にぶい黄褐色砂質土が混じる。	埋土a
SP	727	B区	DI-32	SB-740の柱穴。SP-672に切られる。詳細は本文139頁を参照。	埋土a
SP	728	B区	DI-31	SC-751の主柱穴。SK-705に切られる。詳細は本文136頁を参照。	埋土a
SC	729	B区	DI-31	撹乱をはさみながら北東から南東にかけて直線的に約1.4mのびる掘り形ラインから復元した竪穴式住居跡。深さ12cm。SC-670、SP-677・678・702・709、SC-713、SB-740に切られ、SC-730を切る。詳細は本文131頁を参照。	埋土a
SC	730	B区	DI-31	南北に約50cmのびる掘り形ラインから想定した竪穴式住居跡。深さ約３cm。SC-670・713・729、SK-725・739、SP-696・698に切られ、SC-738を切る。詳細は本文132頁を参照。	埋土a
SP	731	B区	DI-31・32	SB-740の柱穴。SK-725に切られる。詳細は本文139頁を参照。	埋土a
SK	732	B区	DI-31	SK-725との関係不明瞭。北西から南東にのびる掘り形ラインを約50cm検出したのみで形状は不明。SK-666・684、SP-683・715に切られる。詳細は本文166頁を参照。	埋土a
SK	733	B区	DI-31・32	掘り形が判然としない浅い土壙。SC-730の造成土部である可能性あり。SC-729・730、SK-739に切られる詳細は本文167頁を参照。	埋土a
SP	734	B区	DJ-31	SC-751の主柱穴。詳細は本文136頁を参照。	埋土a
SK	735	B区	DI-31	南北に25cm程の掘り形ラインを確認したのみで形状不明。深さ17cm。SK-690・SK-705・SK-713に切られる。詳細は本文167頁を参照。	埋土a
SP	736	B区	DI-31	暗褐色砂質土。灰白色砂礫を多く含む。黄褐色砂質土の小ブロックを混じる。調査段階はSP-683とするが重複のため整理段階に改めて番号を付与。SP-688、SK-693を切る。円形。径18cm、深さ８cm。	埋土a
SP	737	B区	DI-31	立柱痕跡を検出。詳細は本文175頁を参照。	埋土a
SC	738	B区	DI・DJ-31	埋土の確認のみで掘り形ラインは未確認。底面は小さな凹凸が目立つ。SP-679・680・734、SC-689・729・730に切られる。詳細は本文132頁を参照。	埋土a
SK	739	B区	DI-31・32	残存長2.7m、幅1.6m以上、深さ33cm。推定一辺3m前後の胴張りの土壙。。SP-674・696・708、SK-697に切られる。SP-698、SK-733を切る。詳細は本文168頁を参照。	埋土a
SB	740	B区	DH・DI-31・32	SP-671・681・687・688・709・727・731で構成される３×３間の掘立柱建物。SP-689、SC-670、SK-725を切る。詳細は本文138頁を参照。	埋土a
SC	741	B区	DG-38	調査区東壁際で確認した方形の竪穴式住居跡。深さ22cm。詳細は本文133頁を参照。	埋土a
SP	742	B区	DH-31	SP-712を切る。埋土の調査記録をとりわすれた。	－
SB	743	B区	DH-36	SP-632・634・635・636で構成される１間×１間の掘立柱建物。詳細は本文141頁を参照。	埋土c
SB	744	B区	DG-35・36	SP-617・618で構成される掘立柱建物。詳細は本文142頁を参照。	埋土a
SP	745	B区	DH-32	SK-695に切られる。調査段階では、番号をふっていなかったが、整理段階で番号を付与。残存径25cm、深さ５cm。観察データなし。	－
SB	746	B区	DG-34	SP-648・649で構成される掘立柱建物。詳細は本文143頁を参照。	埋土a
SC	747	B区	DH-38	北、東、西は撹乱により欠損し形状は不明。円形住居あるいは隅丸方形竪穴式住居の隅丸部分を検出した。詳細は本文133頁を参照。	埋土a
SC	748	B区	DG-38	方形あるいは長方形土壙あるいは竪穴式住居跡の隅部を検出。詳細は本文134頁を参照。	埋土a
SB	749	B区	DH・DI-32	SP-660・673で構成される掘立柱建物。詳細は本文143頁を参照。	埋土a
SC	750	B区	DH・DI-31	SP-714・720を主柱穴とする竪穴式住居跡。SK-711に切られる。詳細は本文134頁を参照。	埋土a
SC	751	B区	DI-31	SP-680・728・734を主柱穴とする竪穴式住居跡。詳細は本文135頁を参照。	埋土a
SC	752	B区	DI・DJ-31	SP-676・686・703・704を主柱穴とする竪穴式住居跡。詳細は本文137頁を参照。	埋土a

巻末表２　文京遺跡 18 次調査出土遺物観察表

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図14	1	A区	DT-44・DU-43・44区	塹壕跡	埋土	銅製品	弾丸	重量9.2ｇ。	4434	26	図版40-⑧(写真)、図版40-⑫（X線）
	2	A区	DU-41区	塹壕跡	埋土	銅製品	薬莢	薄い銅板を巻いてつくる。重量8.1ｇ。	4435	26	図版40-⑨(写真)、図版40-⑪（X線）
	3	A区	DS-42区	塹壕跡	埋土	銅製品	薬莢	２破片に破損。薄い銅板を巻いてつくる。残存重量7.8ｇ。	4436	26	図版40-⑩
	4	A区		塹壕跡	埋土	鉄・銅製品	ベルト金具？	銅製の薄板を折り曲げ、裏面に薄い鉄板を取り付ける。残存重量1.2ｇ。	4437	26	
	5	A区	DX-41～43区	攪乱部		石器	打製石鏃	サヌカイト製。先端部を欠損。平基式。現存重量2.7ｇ。	4420	26	図版38-②
図16	1	A区	調査区東半部	Ⅱ-２-①層		土師器	皿	全周の1/6ほどの破片。口縁部～胴部の内外面は回転横ナデ。外底面には回転糸切り離し痕が残る。	4215	12	
	2	A区	DS-45区	Ⅱ-２-①層		土師器	皿	全周の1/5ほどの破片。胴部外面は回転横ナデ。内面は横ナデ。	4216	12	
	3	A区	DR-45区	Ⅱ-２-①層		土師器	埦または坏	内外面ともに回転横ナデか？	4232	12	
	4	A区	調査区南東部	Ⅱ-２-①層		土師器	坏？	全周の1/8ほどの底部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4217	12	
	5	A区	DU-44区	Ⅱ-２-①層	水田面直上	土師器	坏	全周の1/10ほどの破片のため、復元口径は不確実。内外面ともに器面の荒れが進み調整不明。	4218	12	
	6	A区	DT-42区	Ⅱ-２-①層	SS-17直上	土師器	坏	全周の1/4の胴部下半～底部の破片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。	4209	12	
	7	A区	DR・DS-45区	Ⅱ-２-①層	段落ち部水田面上面	土師器	埦	全周の1/8の高台部破片。高台部の内外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4223	12	
	8	A区	調査区南東部	Ⅱ-２-①層		土師器	埦	全周の1/10ほどの破片のため、高台径はやや不確実。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4222	12	
	9	A区	DS・DT-45区	Ⅱ-２-①層	SS-２直上	土師器	埦	全周の1/8ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4212	12	
	10	A区	調査区南東部	Ⅱ-２-①層		土師器	埦	全周の1/8ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4221	12	
	11	A区	DX-44区	Ⅱ-２-①層	水田面直上	土師器	埦	内面と外底面が黒色であるが、焼成不良のための黒変と考え、土師器と判断した。全周の1/4弱の高台部周辺の破片。外面は横ナデ。内面はナデと考えられるが、判然としない。	4214	12	
	12	A区	DY・DZ-44・45区	Ⅱ-２-①層	SS-23直上	土師器	埦	全周の1/3ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4208	12	
	13	A区	調査区南東部	Ⅱ-２-①層		土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。他の部位は荒れが進み調整不明。	4220	12	
	14	A区	DV-42区	Ⅱ-２-①層	水田面直上	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4202	12	
	15	A区	DS・DT-45区	Ⅱ-２-①層	SS-２直上	土師器	埦	全周の1/7ほどの高台部～底部の破片。外面は回転横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4213	12	
	16	A区	DU-42区	Ⅱ-２-①層	SS-17直上	土師器	埦	全周の1/4弱の高台部周辺の破片。外面は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4211	12	
	17	A区	調査区南東部	Ⅱ-２-①層		土師器	埦	高台部周辺の1/7ほどの破片で、高台径はやや不確実。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4231	12	
	18	A区	調査区東半部	Ⅱ-２-①層	水田面直上	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4205	12	
	19	A区	調査区東半部	Ⅱ-２-①層		土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4219	12	
	20	A区	DY-45区	Ⅱ-２-①層	段落ち部水田面直上	土師器	埦	厚でのつくり。全周の1/5ほどの高台周辺の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4207	12	
	21	A区	DU-42区	Ⅱ-２-①層	SS-17直上	土師器	埦	全周の1/4強の胴部下半～高台部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4210	12	
	22	A区	DV-42区	Ⅱ-２-①層		黒色土器	埦	両黒土器。外面は荒れが進み調整不明。内面は部分的にミガキ仕上げの痕跡が残る。	4234	12	
	23	A区	DW・DX-45区	Ⅱ-２-①層	SS-21直上	黒色土器	埦	両黒土器。口径は不確実。外面は横ナデ、胴部下半には指頭痕が残る。内面はミガキ仕上げ。	4233	12	
	24	A区	DS・DT-45区	Ⅱ-２-①層	SS-２上面	黒色土器	埦	両黒土器。外面は荒れが進み調整不明。内面は部分的にミガキ仕上げの痕跡が残る。	4235	12	
	25	A区	DS・DT-45区	Ⅱ-２-①層	SS-２直上	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/7ほどの高台部破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4204	12	
	26	A区	DS-42区	Ⅱ-２-①層		瓦質土器	壺	肩部の破片。外面は横ナデ。内面には平行条線の圧痕が残る。その後、横ナデ仕上げを行う。	4236	12	
	27	A区	DR・DS-45区	Ⅱ-２-①層	段落ち部上層水田面	白磁	碗	中国白磁。内外面とも全面施釉。胴部外面は回転ケズリ。	4319	12	図版33-③
	28	A区	DR・DS-41・42区	Ⅱ-２-①層	SS-16上面	白磁	碗	中国白磁。内外面とも全面施釉。胴部外面は回転ケズリ。玉縁口縁下半には目砂が部分的に付着。	4320	12	図版33-④
	29	A区	DS-45区	Ⅱ-２-①層		白磁	碗	中国白磁。内外面とも全面施釉。	4318	12	図版33-②
	30	A区	DX-43区	Ⅱ-２-①層		白磁	碗	中国白磁。胴部下半は露胎のまま。他は施釉。大きめの貫入。玉縁口縁下半には釉垂れ。	4321	12	図版33-⑤
	31	A区	DT・DU-45区	Ⅱ-２-①層	段落ち部上層水田面	白磁	碗	中国白磁。胴部下半は露胎のまま。回転ヘラケズリ。内面は全面施釉。	4324	12	図版33-⑥

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図16	32	A区	DT-42区	Ⅱ-2-①層	SS-17上面	白磁	埦もしくは皿	中国白磁。内外面ともに施釉。二次的な火熱を受けているためか、釉色はくすんでいる。	4323	12	図版33-⑦
	33	A区	DW・DX-42区	Ⅱ-2-①層		青白磁	蓋	合子蓋。口縁端面と胴部下半の内面は露胎のまま。他は施釉。	4322	12	図版33-⑧
	34	A区	調査区東半部	Ⅱ-2-①層		青白磁	皿？	胎はやや灰色みを帯びた白色。内外面ともに施釉。大振りの貫入がみられる。	4332	12	図版33-⑨
	35	A区	調査区南東部	Ⅱ-2-①層		須恵器	蓋	摘み部周辺の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4226	12	
	36	A区	調査区南東部	Ⅱ-2-①層		須恵器	壺	胴部下半～底部の1/4ほどの破片。胴部の内外面は横ナデ。内底面はナデ。外底面には指頭によるかなり強いナデ痕跡が残されている。	4227	12	
	37	A区	DU・DV-45区	Ⅱ-2-①層	SS-3直上	須恵器	甕	内外面ともに横ナデ。頸の付け根には幅が狭い強い横ナデ痕跡が残る。	4228	12	
	38	A区	DS・DT-45区	Ⅱ-2-①層	SS-2上面	須恵器	壺	内外面ともに横ナデ。	4229	12	
	39	A区	DT-41区	Ⅱ-2-①層	水田面直上	弥生土器	甕	全周の1/8ほどの平底破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4224	12	
	40	A区	調査区東北部	Ⅱ-2-①層		陶器	壺	口縁部を逆L字形に折り曲げ、上面に2条の幅広の凹線を巡らす。口縁上面～頸部内面には暗赤褐色の釉を施す。口縁部下面～頸部外面は露胎のまま。	4238	12	
	41	A区	DS-41・42区	Ⅱ-2-①層		陶器	蓋	扁平な体部の偏った位置に推定径9㎜の小孔を穿孔する。下面と上面の一部に暗赤褐色の釉を施す。	4237	12	
図21	1	A区	DT-45区	SD-8・9・10合流部	埋土	土師器	埦	全周の1/4弱の高台周辺の破片。高台部周辺は横ナデ、他は荒れが進み調整不明。	4282	12	
	2	A区	DT-45区	SD-9	埋土下部②層	黒色土器	埦	両黒土器の口縁部小片。内外面ともに荒れが進み調整は不明。	4189	12	
	3	A区	DX-45区	SD-10	埋土	土師器	埦	全周の1/5強の高台部破片。外面は横ナデ。内面はナデ仕上げか？	4203	12	
	4	A区	DX-45-4・5区	SD-10	溝底	土師器	埦	全周の1/5ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面はナデ。内面はナデ仕上げか？	4188	12	
	5	A区	DT-43区	SD-11	埋土	土師器	皿	底径から皿と考えた。全周の1/7ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。	4193	12	
	6	A区	DW・DX-43区	SD-12	埋土	土師器	埦	口縁部の小片。内外面ともに回転横ナデ。	4195	12	
	7	A区	DS-43区	SD-12	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4196	12	
	8	A区	DT-43-16区	SD-12	埋土下部	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4194	12	
	9	A区	DT-43区	SD-12	埋土下部	土師器	埦	高台部周辺の1/8～1/9の破片のため、高台部径は不確実。内外面ともに荒れが進み、調整不明。	4241	12	
	10	A区	DV-43区	SD-12・25合流部	埋土	土師器	埦	比較的大粒の礫を含むが、胎土自体は精選され、薄でのつくり。内外面ともに回転横ナデ。	4198	12	
	11	A区	DV-43区	SD-12・25合流部	埋土	土師器	坏	全周の1/6ほどの破片。内外面ともに荒れが進み、調整は判然としない。	4199	12	
	12	A区	DV-43区	SD-12・25合流部	埋土下部	白磁	碗	中国白磁。	4326	12	
	13	A区	DT-43区	SD-12・SS-14間水口	埋土	須恵器	壺	外面はカキメ調整。内底面の角を指頭で押さえ、ナデ仕上げする。	4197	12	
	14	A区	DY-45区	SD-24	埋土下部	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部破片。外面は荒れが進み調整不明。高台内面と内面は不定方向のナデか？	4183	12	
	15	A区	DY-45区	SD-24	埋土	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面および内面は丁寧なナデ仕上げ。	4187	12	
	16	A区	DY-42区	SD-24	埋土	土師器	埦	全周の1/8ほどの高台部破片。内外面ともに荒れ進み調整不明。	4185	12	
	17	A区	DY-45区	SD-24	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部破片。外面は高台部を含めて横ナデ。内面は荒れているが、不定方向のナデ仕上げか？	4184	12	
	18	A区	DY-42区	SD-24	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/5ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺の横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4242	12	
	19	A区	DY-45区	SD-24	埋土	黒色土器？	埦	内黒土器。全周の1/4～1/5の高台部破片。高台周辺は強い横ナデ。外底面と内底面は不定方向のナデ。	4186	12	
	20	A区	DT-41区	SD-18	埋土	黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/6弱の高台部破片のため、高台部径はやや不確実。内外面ともに、黒色の器表面がほとんど摩滅しており、調整は不明。	4200	12	
	21	A区	DV-44区	SD-25	埋土下部	土師器	埦	全周の1/9～1/10の高台部破片。そのため高台部径はやや不確実。内外面ともに荒れが進み、調整不明。	4191	12	
	22	A区	DV-44区	SD-25	溝底付近	土師器	埦	全周の1/4弱の高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4192	12	
	23	A区	DV-42区	SD-25	埋土下部	瓦器	埦	全周の1/6ほどの高台部～底部の破片。内外面ともに黒色。高台部端部は擦り切れている。胴部外面には指頭痕が残る。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げと考えられるが、判然としない。	4190	12	
	24	A区	DY-44区	SD-29	溝底	土師器	埦	全周の1/8～1/9の高台部破片のため、高台径はやや不確実。内外面ともに荒れが進み、調整不明。	4182	12	
	25	A区	DS-45区	SS-1・2間水口	埋土	土師器	埦	全周の1/7ほどの高台部～胴部下半の破片。外面は回転横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4206	12	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図21	26	A区	DY-45区	SS-23東側水口	埋土下部	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4201	12	
図22	1	A区	DU-42-11・16・21区	SS-17	耕作土層～床土層	土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	4259	12	
	2	A区	DV-45区	SS-20	耕作土層	土師器	埦	外面は回転横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4260	12	
	3	A区	DX-45区東半部	SS-22	耕作土層～床土層	土師器	坏	全周の1/4弱の底部破片。外面は横ナデ。内面は回転横ナデ。外面には黒斑が生じている。	4256	12	
	4	A区	DS-43区	SS-13	耕作土層	土師器	坏	全周の1/4強の底部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4261	12	
	5	A区	DW-45区	SS-20	耕作土層～床土層	土師器	埦	高台部周辺の全周の1/6ほどの破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4248	12	
	6	A区	DX-45区東半部	SS-22	耕作土層～床土層	土師器	埦	高台部周辺の1/5ほどの破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4254	12	
	7	A区	DX-43区	SS-32・33	耕作土層～床土層	土師器	埦	高台部周辺の1/4弱の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4250	12	
	8	A区	DX-44東半部	SS-27	耕作土層下部～床土層	土師器	埦	高台部周辺の全周の1/4強の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4245	12	
	9	A区	DV-45区	SS-20	耕作土層	土師器	埦	高台周辺部の全周の約1/2の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4251	12	
	10	A区	DY-44区	SS-23	耕作土層～床土層	土師器	埦	高台部～底部の全周の1/4弱の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面は荒れが進み調整不明。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4253	12	
	11	A区	DX-43区	SS-32・33	耕作土層～床土層	土師器	埦	高台部周辺の全周の1/5強の破片。高台部周辺は横ナデ。内面はナデか？	4244	12	
	12	A区	DW-44区	SS-26	耕作土層	土師器	埦	胴部下半以下の全周の1/4強の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4247	12	
	13	A区	DY-45区	SS-23	耕作土層～床土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面は強い指ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4246	12	
	14	A区	DU-43区	SS-14	耕作土層	土師器	埦	高台部～底部の全周の1/5の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4249	12	
	15	A区	DV-45区	SS-20	耕作土層	土師器	埦	高台周辺部の全周の約1/5の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4252	12	
	16	A区	DU-43区	SS-14	耕作土層	土師器	埦	胴部下半～高台部周辺の全周の1/4強の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4243	12	
	17	A区	DY-45区	SS-23	耕作土層～床土層	土師器	埦	ほぼ全周する高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面も横ナデ。内面は荒れが著しく調整不明。	4240	12	
	18	A区	DY-45区	SS-23	耕作土層～床土層	土師器	皿	全周の1/4ほどの底部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4255	12	
	19	A区	DW-44区	SS-26	耕作土層	土師器	埦	ほぼ全周の底部破片。内外面とも荒れが進み、調整の詳細は不明。	4257	12	
	20	A区	DY-41区	SS-19	耕作土層	土師器	柱状高台土器	全周の1/4弱の底部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4258	12	
	21	A区	DX-45区	SS-22	耕作土層	黒色土器	埦	両黒土器。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4262	12	
	22	A区	DY-43区	SS-33	耕作土層～床土層	黒色土器	埦	両黒土器。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4263	12	
	23	A区	DS-44区	SS- 5	耕作土層	白磁	碗	中国白磁。	4331	12	図版34-④
	24	A区	DW-45区	SS-21	耕作土層	白磁	皿？	中国白磁。内外面とも全面施釉で、細かな貫入がみられる。	4317	12	図版34-⑤
	25	A区	DW-45区	SS-21	耕作土層	白磁	皿？	中国白磁。内外面とも全面施釉。	4325	12	図版34-⑥
	26	A区	DU-42区	SS-17	耕作土層～床土層	須恵器	瓶	全周の1/4強の頸部付け根周辺の破片。外面は横ナデ。頸部内面は横ナデ仕上げされているが、絞り痕がわずかに残る。	4271	12	
	27	A区	DX-45-12区	SS-22	耕作土層	須恵質土器	壺	高台部～底部の全周する破片。胴部外面は横ナデ。内面はナデ。	4266	12	
	28	A区	DZ-45区	SS-23	耕作土層～床土層	須恵質土器	壺	全周の1/4弱の胴部下半～高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。高台部の付け根付近を強くヘラナデし、胴部下半は乱雑な横ナデ。内面は横ナデ。	4268	12	
	29	A区	DV-44区	SS- 7	耕作土層	須恵質土器	壺	全周の1/8ほどの底部破片。平行条線のタタキ目が残る。底部近くに細く鋭い沈線1条が巡る。内面は横ナデ。	4267	12	
	30	A区	DV-43区	SS-15	耕作土層	須恵器	坏	身部破片。内外面ともに横ナデ。	4273	12	
	31	A区	DS-45区	SS- 2	耕作土層	須恵器	壺	全周の1/5ほどの口縁部破片。口径から長頸壺の口縁部と判断した。内外面ともに横ナデ。外面には自然釉が薄く付着。	4272	12	
	32	A区	DW-45区	SS-21	耕作土層	須恵器	甕	内外面ともに横ナデ。	4265	12	
	33	A区	DY-45区	SS-23	耕作土層～床土層	弥生土器	甕	ほぼ全周の脚台状の上げ底底部。外面は縦方向の指頭によるナデの後にナデ仕上げ。内面には指頭によるナデ調整痕が部分的に残る。	4270	12	
	34	A区	DU-42区	SS-17	耕作土層～床土層	弥生土器	甕	全周の1/4ほどの上げ底底部の破片。外面はナデと考えられるが、荒れが進み、判然としない。内面はナデ仕上げ。	4269	12	
図23	1	A区	DS-42区	SS-14・17間畦畔	畦畔本体	土師器	坏	全周の1/6ほどの底部周辺の破片。底径はやや不確実。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4308	13	
	2	A区	DU-41-23・24区	SS-17・SD-18間畦畔	畦畔本体	土師器	坏	全周の1/5ほどの胴部下半～底部の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4306	13	
	3	A区	DS-42区	SS-14・17間畦畔	畦畔本体	土師器	坏	全周の1/6ほどの底部周辺の破片。底径はやや不確実。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4307	13	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図23	4	A区	DW-43－24・25区	SD-12北側畦畔	畦畔本体	土師器	坏？	ほぼ全周の底部破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4310	13	
	5	A区	DV-43・44区	SS-26東側畦畔	畦畔本体	土師器	柱状高台土器	全周の1/3ほどの底部近くの破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は横ナデ。	4309	13	
	6	A区	DX-45区東半部	SS-22・SD-10間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/3弱の胴部下半～底部の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4289	13	
	7	A区	DY-44区	SS-30・SD-29間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4297	13	
	8	A区	DU-42区	SS-14・17間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4295	13	
	9	A区	DU-43区	SS-14・SD-12間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4弱の高台部周辺～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。他は荒れが進み調整不明。	4302	13	
	10	A区	DU-43区	SS-14・15間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。他は荒れが進み調整不明。	4294	13	
	11	A区	DX-45区	SS-22・SD-10間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	胴部下半～底部の約1/2の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4292	13	
	12	A区	DU-43区	SS-7・SD-12間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/5強の高台部周辺の破片。外面は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4296	13	
	13	A区	DW-43-24・25区	SD-12北側畦畔	畦畔本体	土師器	埦	胴部下半～底部の全周の1/3ほどの破片。高台部周辺は横ナデ、他は荒れが進み調整不明。	4281	14	
	14	A区	DX-43・44区	SS-27・SD-12間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4強の胴部下半～底部の破片。高台部径はやや大きめ。内外面ともに荒れが進み調整は判然としないが、外面は横ナデか？	4301	13	
	15	A区	DW-45区	SS-20・21間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部周辺の破片。高台周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4303	13	
	16	A区	DT-43区	SS- 6・SD-12間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/5ほどの胴部下半～高台部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4291	13	
	17	A区	DT-44-21・22区	SS- 6・SD-10間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/7ほどの底部周辺の破片。荒れが進み調整不明。	4290	13	
	18	A区	DY・DZ-43区	SS-30・34間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/5ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4300	13	
	19	A区	DW-45区	SS-21・SD-10間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4～1/5の高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。他は荒れが進み調整不明。	4293	13	
	20	A区	DV-43区	SS-15北側畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4弱の高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4299	13	
	21	A区	DS-43区	SS- 5・SD-12間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/6の高台部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4305	13	
	22	A区	DV-43区	SS- 7・SD-12間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4の高台部周辺～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4304	13	
	23	A区	DV-42区	SS-35西側畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部周辺の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4298	13	
	24	A区	DW-43-20・25区	SS-31・32、SD-12間畦畔	畦畔本体	黒色土器	皿	両黒土器。外面は部分的にミガキ痕が残る。内面は荒れが進み調整不明。	4313	13	
	25	A区	DW-44区	SS-26・27間畦畔	畦畔本体	黒色土器	埦	両黒土器。胴部外面上半は横ナデ、下半には指頭痕が残る。内面は横方向のミガキ仕上げ。	4311	13	
	26	A区	DX-45区	SS-22南側畦畔	畦畔本体	黒色土器	埦	内黒土器。器体の傾きはやや不確実。外面は横ナデ。内面には部分的にミガキ痕を観察できる。	4312	13	
	27	A区	DY-44区	SS-30・SD-29間畦畔	畦畔本体	白磁	碗	中国白磁。内外面とも全面施釉。	4316	13	図版34-③
	28	A区	DS～DU-43区	SS-14北側畦畔	畦畔本体	白磁	碗	中国白磁。ほぼ全周の高台部破片。外面は露胎のまま。内面は全面施釉。胴部下半外面～高台部は回転ヘラケズリ。外底面は回転横ナデ。内面には指頭による強いナデ痕が残る。	4315	13	図版34-②
	29	A区	DY-42区	SS-39東側畦畔	畦畔本体	青磁	碗？	同安窯系青磁。	4415	13	図版34-⑧
	30	A区	DV-45区	SS- 3・20間畦畔	畦畔本体	青磁	碗	龍泉窯系青磁。胎は灰色。	4414	13	図版34-⑦
	31	A区	DT-41区	SS-17・SD-18間畦畔	畦畔本体	須恵器	甕	内外面ともに横ナデ。	4314	13	
	32	A区	DW-45区	SD-10・SS-21間畦畔	畦畔本体	土師質土器		胴部破片で、器体の傾きは不明。内面は荒れが進み調整不明。	4330	13	
図24	1	A区	DW-43区北西部	SS-31	床土層	土師器	埦	全周の約1/2の高台部～底部の破片。高台部周辺は横ナデ、他は荒れが進み調整不明。	4283	13	
	2	A区	DS-42区	SS-16	床土層	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ、他は荒れが進み調整不明。	4285	13	
	3	A区	DV-42区	SS-35	床土層	土師器	埦	高台周辺の1/6の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4280	13	
	4	A区	DT-42区	SS-17	床土層	土師器	埦	全周の1/7ほどの高台部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4276	13	
	5	A区	DS-42区	SS-16	床土層	土師器	埦	高台部～底部の全周の1/5の破片。高台部周辺は横ナデ、他は荒れが進み調整不明。	4284	13	
	6	A区	DY-42区	SS-38	床土層	土師器	埦	胴部下半～底部の全周する破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4274	13	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図24	7	A区	DW-45区	SS-22	床土層	土師器	埦	胴部下半～底部のほぼ全周の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4275	13	
	8	A区	DW-43区	SS-43	床土層	土師器	埦	高台周辺の1/4強の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4277	13	
	9	A区	DZ-43区	SS-34	床土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの高台部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4286	13	
	10	A区	DX-45・DY-45区	SS-22	床土層最下部	白磁	碗	中国白磁。内面と外面胴部上半までは施釉。胴部下半外面は露胎のまま。	4287	13	DX-45区 SS-22耕作土層出土破片（R-254）と接合。平安。図版34-①。
	11	A区	DY・DZ-43・44区	SS-30	床土層	白磁	碗	中国白磁。内外面ともに施釉。	4288	13	
図25	1	A区	DV-45区	SS-21・SD-10間畦畔		鉄器	不明	横断面、縦断面ともにわずかに弧を描く三角形の鉄片。素材か製作残滓の可能性が考えられる。	4466	26	図版40-⑦
図26	1	A区	DT・DU-43・44区	Ⅱ-2-③層	SS-109水田面精査時	鉄器	刀子	刃部と柄の大部分が欠失するため、刃関の有無は不明。刃部は断面が二等辺三角形を呈する。	4461	26	図版40-④
	2	A区	DT・DU-43・44区	Ⅱ-2-③層	SS-109上面	鉄器	釘	断面が長方形を呈する板状の鉄棒の一端を7mmほど直角に曲げて釘頭とする。	4463	26	図版39-⑩（写真）、図版40-⑮（X線）
図27	1	A区	DU-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	皿	全周の1/4～1/5の破片。外面～外底面は荒れが進み調整不明。内面は回転横ナデ。	4011	10	
	2	A区	DW-41区	Ⅱ-2-③層		土師器	皿	全周の1/4弱の破片。内面は荒れが進み調整不明。	4012	10	
	3	A区	DY・DZ-45区	Ⅱ-2-③層		土師器	皿	全周の1/2強の破片。内外面ともに荒れが進み、調整は不明。	4004	10	
	4	A区	DS・DT-43～45区	Ⅱ-2-③層	SS-108上面	土師器	皿	全周の1/5の破片。内外面ともに横ナデ。	4086	10	
	5	A区	DV-42・43区	Ⅱ-2-③層		土師器	皿	全周の1/4弱の破片。底径はやや不確実。内外面ともに荒れが進み、調整不明。	4006	10	
	6	A区	DS-45区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	胎土には細砂粒が多く混じるが、薄でのつくり。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。にぶい黄橙色の焼き上がり。	4020	10	
	7	A区	DS-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。褐灰色の焼き上がり。	4017	10	
	8	A区	DS-43	Ⅱ-2-③層	水田面直上	土師器	埦	内外面ともに荒れが進み調整不明。灰白色の焼き上がり。	4023	10	
	9	A区	DT～DV-45区	Ⅱ-2-③層	SS-113上面	土師器	埦	灰白色の焼き上がり。外面は横ナデ。内面はヘラ状工具で軽く撫でたような調整痕が残る。	4095	10	
	10	A区	DV～DX-44・45区	Ⅱ-2-③層	SS-115上面	土師器	埦	外面は回転横ナデ、内面は部分的にミガキ痕がみられる。	4093	10	
	11	A区	DW-42区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。外面には黒斑。	4024	10	
	12	A区	DV-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	内外面ともに荒れが進み調整不明。	4022	10	
	13	A区	調査区東半部	Ⅱ-2-③層	下部	土師器	埦	外面は荒れが著しく調整不明。内面は丁寧な横ナデ仕上げ。	4021	10	
	14	A区		Ⅱ-2-③層	SS-110上面	土師器	埦	内外面ともに横ナデ。	4365	10	
	15	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	土師器	埦	薄でのつくり。器面が荒れ調整不明。	4015	10	
	16	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	薄でのつくり。外面は回転横ナデ。内面にはミガキ痕が部分的に残る。やや黄色みをおびた灰白色の焼き上がり。	4018	10	
	17	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	口縁部周辺は横ナデ。他は荒れが進み調整不明。口径はやや不確実。	4364	10	
	18	A区	DU-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	内外面ともに回転横ナデか？　褐灰色の焼き上がり。	4016	10	
	19	A区	DV～DX-44・45区	Ⅱ-2-③層	SS-115上面	土師器	坏	全周の1/10以下の破片で、底径は不確実。胴部外面は横ナデ、内面は不定方向のナデ。外底面はナデ仕上げのため、切り離し方法は不明。	4088	10	
	20	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	土師器	坏	全周の1/6～1/7の破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は横ナデ仕上げ。	4008	10	
	21	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	坏	全周の1/5ほどの破片。外面は回転横ナデ、内面はナデ？灰白色の焼き上がり。	4002	10	
	22	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	土師器	坏	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに荒れが著しく、調整不明。黄褐色の焼き上がり。	3998	10	
	23	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	SS-110上面	土師器	坏	全周の1/5ほどの破片。胴部外面は荒れが進み調整不明、内面は回転横ナデ。	4087	10	
	24	A区	DV-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	坏	全周の1/3ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4013	10	
	25	A区	DS-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	坏	全周の1/7ほどの破片。器体が歪んでいるため、底径はやや不確実。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4003	10	
	26	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	坏	全周の1/5ほどの破片。厚でのつくり。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4007	10	
	27	A区	DT-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/7～1/8の破片。外面は横ナデ。内面はナデ。	3984	10	
	28	A区	DT-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/6強の破片。高台部周辺に横ナデの痕跡が残る以外、器面の荒れが進み調整は不明。	3990	10	
	29	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/7ほどの破片。外面は荒れが進み調整不明。内面はナデ仕上げか？	3979	10	
	30	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/7ほどの高台部周辺の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4363	10	
	31	A区		Ⅱ-2-③層	水田面上	土師器	埦	全周の1/3ほどの破片。外面は高台部を中心として横ナデ。内面は荒れが著しく調整不明。	4361	10	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図27	32	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/4弱の破片。内外面ともに荒れが進み、調整不明。	3967	10	
	33	A区	DW-45区	Ⅱ-2-③層	SS-117上面	土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。外面の高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進むが、ナデ仕上げか？	4362	10	
	34	A区	DU-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。内外面ともに荒れが進み、調整不明。	3965	10	
	35	A区	DU・DV-43～45区	Ⅱ-2-③層	SS-110上面	土師器	埦	全周の1/3ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4360	10	
	36	A区	DS-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は荒れが進み調整不明。内面はナデ仕上げか？	3971	10	
	37	A区	DS-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/6の破片。内面は黒変したまま。内外面ともに荒れが著しく、調整不明。	3969	10	
	38	A区	DT-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/8ほどの破片。外面は横ナデ。内面はナデ仕上げか？　器面が荒れ、判然としない。	3994	10	
	39	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/7～1/8の破片。内外面ともに荒れが進み調整は不明。	3993	10	
	40	A区	DU-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/7の破片。外面は回転横ナデ。内面はナデ仕上げ。	3980	10	
	41	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/8強の破片。高台部周辺が横ナデ調整である以外、器面の荒れが進み調整不明。	3985	10	
	42	A区	DU・DV-43～45区	Ⅱ-2-③層	SS-110上面	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は横ナデ？　高台内面は不定方向のナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4073	10	
	43	A区	DT-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。器体が歪んでいるため、復元底径はもう少し小さくなるか？　外面は回転横ナデ、内面はナデ。	3976	10	
	44	A区		Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/3弱の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4090	10	
	45	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/7の破片。外面は荒れが進み調整不明。高台～外底面は横ナデ。内面はナデ調整か？	3970	10	
	46	A区	DT-42・43～DV-43区	Ⅱ-2-③層	SS-106上面	土師器	埦	ほぼ全周する破片。胴部外面～高台部周辺は横ナデ。内面はナデ調整後にミガキ仕上げ。	4359	10	図版34-⑨
	47	A区	DV-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/4強の破片。外面は回転横ナデ。内面はナデ仕上げ	3981	10	
	48	A区	DS-45区	Ⅱ-2-③層	水田面検出時	土師器	埦	全周の1/4弱の破片。高台部～外底面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	3983	10	
	49	A区	DT-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/6～1/7の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3972	10	
	50	A区	DV ～ DX-44・45区	Ⅱ-2-③層	SS-115上面	土師器	埦	全周の1/2弱の破片。灰白色の焼き上がり。内外面ともに荒れ調整不明。	4096	10	
	51	A区	DT-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/5～1/6の破片。外面は回転横ナデ。内面はナデ仕上げ。	3975	10	
	52	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	SS-110上面	土師器	埦	全周の1/4程の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4085	10	
	53	A区	DS-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/7ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3974	10	
	54	A区	DU-44-16区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	土師器	埦	全周の1/3の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3988	10	
	55	A区	DS-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/6の破片。内外面ともに器面が荒れ調整不明。	3986	10	
	56	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	SS-110上面	土師器	埦	全周の1/3ほどの破片。	4091	10	
	57	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/3弱の破片。内外面ともに荒れが進む。外面はナデか？　内面は調整不明。	3966	10	
	58	A区	DS-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/7の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3982	10	
	59	A区	DS-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/5の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3992	10	
	60	A区	DU-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/5程の破片。外面は横ナデ。内面はミガキに近い丁寧なナデ仕上げ。	3991	10	
	61	A区	DR・DS-43・44区	Ⅱ-2-③層	SS-107上面	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。胴部下半はヘラ状工具で横ナデ。内面にはごく一部にミガキ痕がみられる。	4084	10	
	62	A区	DS-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/4強の破片。器体の歪みが著しい。内外面ともに荒れが進み、調整不明。	4014	10	
	63	A区	DS-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに荒れが進み、調整不明。ただし、内面はナデ仕上げの可能性あり。	3973	10	
	64	A区	DS-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/4弱の破片。内外面ともに荒れが進み、調整不明。	3989	10	
	65	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	土師器	埦	全周の1/4～1/5の破片。内外面ともに荒れが著しく、調整不明。	3987	10	
	66	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	SS-110上面	土師器	埦	外面はナデ、内面は指頭による回転ナデ。	4083	10	
	67	A区	DR-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周する破片。外面は荒れが進み調整不明。	3997	10	
	68	A区	DR-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/3の破片。外面は横ナデ、外底面はナデ仕上げのため、切り離し方法は不明。内面は荒れが進み調整不明。	4000	10	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図27	69	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周する破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は指頭による回転横ナデ。	3995	10	
	70	A区	DU-44区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/3～1/4の破片。かなり厚でのつくり。外面は荒れが進み調整不明。内面は乱雑な指頭によるナデ。橙色の焼き上がり。	4001	10	
	71	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		土師器	埦	全周の1/4の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3999	10	
	72	A区	DT-42区	Ⅱ-2-③層		土師器	土鍋	器壁の芯部に黒色の黒化層が残る。	4050	10	
	73	A区	DV ～ DX-44・45区	Ⅱ-2-③層	SS-115上面	黒色土器	埦	内黒土器。外面～口縁部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4108	10	
	74	A区	DS・DT-42・43区	Ⅱ-2-③層	SS-105上面	黒色土器	埦	内黒土器。外面～口縁部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4109	10	
	75	A区	DV-43区	Ⅱ-2-③層	SS-106上面？	黒色土器	埦	内黒土器。内外面ともにミガキ仕上げ。ただし、外面にはミガキ痕がそれほど明瞭に残っていない。	4107	10	
	76	A区		Ⅱ-2-③層		黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/6～1/7の破片。薄でのつくり。高台周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4101	10	
	77	A区		Ⅱ-2-③層		黒色土器	埦	内黒土器。薄でのつくり。全周の1/4～1/5の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4105	10	
	78	A区	DX-45区	Ⅱ-2-③層	SS-117上面	黒色土器	埦	内黒土器。厚でのつくり。全周の1/5の破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げと考えられるが、器表面が薄く剥がれ判然としない。	4106	10	
	79	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	黒色土器	皿	両黒土器。外面は荒れが進み調整不明。内面はミガキあるいは丁寧なナデ仕上げ。	4044	10	
	80	A区		Ⅱ-2-③層		黒色土器	埦	両黒土器。薄でのつくり。外面～口縁端部は回転横ナデ。内面には部分的にミガキ痕が残る。	4103	10	
	81	A区	DS・DT-43～45区	Ⅱ-2-③層	SS-108上面	黒色土器	埦	両黒土器。厚でのつくり。口縁部周辺は横ナデ。胴部外面には指頭痕が多く残る。内面はヘラ状工具でミガキ様の調整を施す。	4104	10	
	82	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	黒色土器	埦	両黒土器。非常に薄く、精選された胎土をもつ。全周の1/5ほどの破片。外面は荒れが進み調整不明。内面はミガキ仕上げ。	4045	10	
	83	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	SS-110上面	黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/6弱の破片。外面は横ナデ。内面はミガキで仕上げていると考えられるが、器面が荒れて判然としない。	4102	10	
	84	A区	DU-42区	Ⅱ-2-③層		黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/5ほどの破片。外面は横ナデ、内面はミガキ仕上げか？	4043	10	
	85	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/6ほどの破片。胴部外面には指頭圧痕が残り、高台周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4042	10	
	86	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	SS-110上面	黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/5強の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4099	10	
	87	A区		Ⅱ-2-③層		黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/6ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4100	10	
	88	A区	DT-44-20区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/4ほどの破片。胴部外面には指頭圧痕が残り、高台周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4041	10	
図28	1	A区		Ⅱ-2-③層	水田面検出時	白磁	碗	全面施釉。内外面ともに横ナデ。	4068	10	
	2	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		白磁	碗	内外面ともに横ナデ。全面施釉。	4029	10	
	3	A区	DU-43区	Ⅱ-2-③層		白磁	碗	中国白磁。内外面ともに回転横ナデ。全面施釉。	4027	10	
	4	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		白磁	碗	中国白磁。内外面ともに回転横ナデ。全面施釉で、内外面には細かな貫入が生じている。	4028	10	
	5	A区	DU-44区	Ⅱ-2-③層		白磁	碗	中国白磁。内外面ともに回転横ナデ。全面施釉。	4025	10	
	6	A区	DT-42区	Ⅱ-2-③層		白磁	碗	中国白磁。内面は施釉。釉には貫入がはいる。	4032	10	
	7	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		白磁	碗	全周の1/4～1/5の破片。中国白磁。胴部外面は回転ヘラケズリ、内面は横ナデ。	4026	10	
	8	A区	DS-44区	Ⅱ-2-③層		白磁	皿	器面は摩滅し、部分的に釉が剥がれている。	4030	10	混入の可能性。図版35-④
	9	A区	DV-43区東半部	Ⅱ-2-③層		白磁	皿	中国白磁。全周の1/8ほどの破片。釉には細かな貫入がみられる。	4031	10	
	10	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		緑釉陶器	壺	内外面に施釉。胎は須恵質。内外面ともに横ナデ。	4033	10	
	11	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		須恵器または須恵質土器	壺	短頸壺。口縁部周辺は横ナデ。胴部外面はカキメ調整の後に頸部付近をナデ、内面はヘラ状工具による横ナデ。	4034	10	
	12	A区	DR-44区	Ⅱ-2-③層		須恵質土器	甕または壺	ほぼ全周の平底破片。胴部下半は横ナデ。内面は不定方向のナデ。	4170	10	
	13	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		須恵質土器	壺	外面は指頭によるナデ調整。内面は丁寧な不定方向のナデ仕上げ。	4037	10	
	14	A区	DT-44区	Ⅱ-2-③層		須恵質土器	壺	底部近くの胴部破片。内外面ともに横ナデ。	4175	10	
	15	A区		Ⅱ-2-③層		須恵質土器	壺	器体の傾きはやや不確実。外面は荒れが進むが、平行条線タタキの後にナデ。内面は横ナデ。	4177	10	
	16	A区	DS・DT-42・43区	Ⅱ-2-③層	SS-105上面	須恵質土器	壺	丸底の底部破片。底部近くにヘラ描き沈線を1条巡らす。外面は平行条線タタキを施す。内面は当て具を乱雑に押さえつけるようにして成形したまま。	4174	10	
	17	A区	DU-45区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	須恵器	蓋	短頸壺の蓋。全周の1/7ほどの破片。内外面とも横ナデ仕上げ。	4035	10	
	18	A区	DT-42区	Ⅱ-2-③層		須恵器	蓋	坏蓋。1/10ほどの破片のため、口径はやや不確実。内外面ともに横ナデ。	4038	10	

挿図	遺物№	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図28	19	A区	DU-42区	Ⅱ-2-③層		須恵器	坏	坏身。全周の1/8ほどの破片。内外面ともに横ナデ。	4040	10	
	20	A区	DS-42区	Ⅱ-2-③層		須恵器	坏	坏身。全周の1/9ほどの破片。内外面ともに横ナデ。	4039	10	
	21	A区	DT-43区	Ⅱ-2-③層		須恵器	壺	内外面ともに横ナデ。	4036	10	
	22	A区	DY-45区	Ⅱ-2-③層	SS-118上面	瓦	丸瓦	土師質。端部の破片。	4178	10	
	23	A区	DU-43区	Ⅱ-2-③層	SS-106上面	弥生土器	壺	外面に赤褐色粘質土の化粧がけを施す。	4098	10	
	24	A区	DV-44区	Ⅱ-2-③層	水田面直上	弥生土器	鉢	手捏ねの小型品。外面はナデ、内面は指頭によるナデ仕上げ。	4048	10	
図32	1	A区	DY-44-2・3・7・8区	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/6の高台部破片。外面は横ナデ。内面は非常に丁寧なナデ仕上げ。	4141	11	
	2	A区	DY-44-2・3・7・8区	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4154	11	
	3	A区	DY-44-2・3・7・8区	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4131	11	
	4	A区	DV-43区西半部	SD-101	埋土下部	土師器	埦	内外面ともに横ナデ。	4371	11	
	5	A区	DV・DW-43区	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/3ほどの高台部の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4153	11	
	6	A区	DV・DW-43区	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/5ほどの高台部破片。外面～高台部は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4129	11	
	7	A区	DV-42・43区	SD-101	埋土上部	土師器	埦	全周の1/4強の胴部下半～高台部の破片。外面は指頭による回転横ナデ。内面はミガキ痕跡がごく一部に残る。	4157	11	
	8	A区	DV・DW-43区	SD-101	埋土	土師器	皿	底部のほぼ全周の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4145	11	
	9	A区	DV-42-20・25区	SD-101	南側張り出し部埋土	土師器	皿	全周の1/4～1/5/ の底部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4149	11	
	10	A区	DW・DX-43区	SD-101	埋土下部	土師器	坏	全周の1/5程の破片。外面はナデ、内面は荒れが進み調整不明。	3947	11	
	11	A区	DV-43-13～15・18～20区	SD-101	埋土	白磁	碗	中国白磁。高台周辺の破片。外面は回転ヘラケズリで、露胎のまま。内面は全面施釉。	4064	11	
	12	A区	DV・DW-43区	SD-101	埋土	黒色土器	埦	両黒土器。外面は荒れが進み調整不明。内面はミガキ仕上げ。	4162	11	
	13	A区	DV・DW-43区	SD-101	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。厚でのつくり。外面は横ナデ。内面はミガキ仕上げの痕跡が部分的に残る。	4167	11	
	14	A区	DV-43-13～15・18～20区	SD-101	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。厚でのつくり。外面は横ナデ、内面はミガキ仕上げ。	4166	11	
	15	A区	DW-43北西部～DX-43北東角	SD-101	埋土	土師器	皿	全周の1/4弱の破片。器体の歪みが著しい。内面は指頭による強い回転横ナデ。外面は器面の荒れが進み調整不明。	4388	1	
	16	A区	DW-43区北西部・DX-43区北東角	SD-101	埋土	土師器	皿	全周の1/6ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。	4150	11	
	17	A区	DW-43区北西部・DX-43区北東角	SD-101	埋土	土師器	皿	全周の1/6ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。外底面の切り離し方法は不明。	4152	11	
	18	A区	DW-43区北西部～DX-43区北東角	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部破片。厚でのつくり。外面は横ナデ。内面は非常に丁寧なナデ仕上げ。	4127	11	
	19	A区	DW-43区北西部・DX-43区北東角	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの高台部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4139	11	
	20	A区	DW-43区北西部～DX-43区北東角	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/4～1/5の破片。。外面～高台部は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4130	11	
	21	A区	DW-43北西部～DX-43北東角	SD-101	埋土	土師器	埦	口縁部周辺は横ナデ。胴部外面は指頭による押さえの後にナデ仕上げ。内面は荒れが進むが、ナデ仕上げか？	4367	11	図版35-⑪
	22	A区	DW-43区北西部・DX-43区北東角	SD-101	埋土	土師器	皿	底部のほぼ全周の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4144	11	
	23	A区	DW-43区北西部・DX-43区北東角	SD-101	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。外面は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4169	11	
	24	A区	DW-43北西部～DX-43北東角	SD-101	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。全周1/3弱の高台部破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4386	11	
	25	A区	DS-42区	SD-101	埋土上部	土師器	皿	全周の1/8の破片。内外面ともに横ナデ。外底面の切り離し方法は不明。	4158	11	
	26	A区	DS-42区	SD-101	埋土中部～上部	土師器	坏	全周の1/8ほどの底部破片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。外面は二次的な火熱を受けているためか赤変。	4147	11	
	27	A区	DS-42区	SD-101	埋土中部～上部	土師器	埦	外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4160	11	
	28	A区	DT-42区西半部	SD-101	埋土上部	土師器	皿	底部のほぼ全周の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4143	11	
	29	A区	DS-42区	SD-101	埋土上層～中層	土師器	埦	ほぼ全周する底部～高台部の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4339	11	
	30	A区	DU-42区	SD-101	埋土中部～上部	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部破片。外面は指頭による強い横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面はミガキ仕上げ。	4122	11	
	31	A区	DS-42区	SD-101	埋土	土師器	埦	全周の1/6～1/7の高台部破片。高台部は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4132	11	
	32	A区	DU-42区	SD-101	埋土中部～上部	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部破片。厚でのつくり。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4124	11	
	33	A区	DS-42区	SD-101	埋土上層～中層	土師器	埦	全周の1/4弱の胴部下半～底部の破片。高台部周辺～胴部は横ナデ。内面は幅の広いミガキ仕上げ。	4338	11	
	34	A区	DS-42区	SD-101	埋土中部～上部	土師器	埦	全周の1/6の高台部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4142	11	

挿図	遺物№	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図32	35	A区	DR-42区	SD-101	埋土中部～上部	土師器	埦	全周に1/4ほどの高台部破片。外面は指頭による強い横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4128	11	
	36	A区	DT-42区	SD-101	埋土上部	土師器	埦	全周の1/4ほどの高台部周辺の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4156	11	
	37	A区	DT-42区	SD-101	埋土上部	土師器	埦	全周の1/4強の胴部下半～高台部の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4155	11	
	38	A区	DR-42区	SD-101	埋土中部～上部	黒色土器	埦	両黒土器。口径は不確実。胴部上半は横ナデ、下半には指頭痕が多く残る。内面はミガキ仕上げ。	4163	11	
	39	A区	DS-42区	SD-101	埋土中部～上部	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/5ほどの高台周辺の破片。厚でのつくり。高台部の付け根には浅く細い沈線が巡る。外面は荒れが進み調整不明。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4165	11	
	40	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部	土師器	埦	内外面ともに横ナデ。	4370	11	
	41	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部	土師器	埦	外面は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4368	11	
	42	A区	DS-42-４・９・14区	SD-101	埋土下部	土師器	埦	全周の1/3ほどの胴部下半～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4337	11	
	43	A区	DU-42-20区	SD-101	溝底貼り付き状態	土師器	埦	ほぼ全周の胴部上半～底部の破片。胴部の内外面は幅広のミガキ仕上げ。高台部周辺は横ナデ。外底面は不定方向のナデ仕上げ。内底面は丁寧なナデ調整の後にやや乱雑なミガキ仕上げ。	4340	11	図版35-⑫
	44	A区	DT-42区	SD-101	埋土下部	土師器	埦	全周の1/4強の高台部破片。外底面は不定方向のナデ仕上げ。他は器面が荒れ調整不明。	4123	11	
	45	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部	土師器	埦	全周の1/5ほどの高台部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4125	11	
	46	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部～溝底	土師器	皿？	全周の1/5ほどの底部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4148	11	
	47	A区	DS-42区	SD-101	埋土下部	土師器	埦	全周の1/3強の破片。外面は回転横ナデ。外底面と内面はナデ調整。	3863	11	
	48	A区	DT-42	SD-101	埋土下部	土師器	埦	全周の1/3弱の胴部下半～底部の破片。高台部周辺は横ナデ。内面は不定方向のナデ仕上げ。他は荒れが進み調整不明。	4336	11	
	49	A区	DT-42区	SD-101	埋土下部	土師器	坏	全周の1/4強の底部破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。外底面はナデ仕上げか？	4151	11	
	50	A区	DT-42区	SD-101	埋土下部	土師器	土鍋	口縁部の破片。外面には煤が付着。指頭で口縁部を湾曲させ、横ナデを施して仕上げる。	4161	11	
	51	A区	DT-42区	SD-101	埋土下部	瓦器	埦	内外面ともにミガキ仕上げ。	4164	11	
	52	A区	DU-42区	SD-101	埋土下部	瓦	丸瓦	端面の破片	4062	11	
	53	A区	DU-42区東半部	SD-101	溝底	土師器	皿	全周の1/10以下の破片で、口径は不確実。内外面ともに横ナデ。外底面の切り離し方法は不明。	4159	11	
	54	A区	DT-42区	SD-101	溝底	土師器	埦	全周の1/6強の高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面はナデ仕上げ。	4387	11	
	55	A区	DS-42区	SD-101	溝底	土師器	埦	全周の1/6の高台部周辺の破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4140	11	
	56	A区	DT-42区	SD-101	溝底	土師器	埦	全周の1/3ほどの胴部下半～底部の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4335	11	
	57	A区	DS-42-7区	SD-101	溝底貼り付き状態	土師器	埦	全周の2/3ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4333	11	図版35-⑦
	58	A区	DT-42区東半部	SD-101	溝底	黒色土器	埦	内黒土器。全周の破片。胴部外面はミガキ。胴部下半～高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4385	11	図版36-③
	59	A区	DS-42-19区	SD-101	SD-114との合流部	黒色土器	埦	内黒土器。外面は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4168	11	
	60	A区	DS-42-19・24区	SD-101	SD-114との合流部	黒色土器	埦	内黒土器。口縁部周辺は回転横ナデ。他はミガキ調整。	4070	11	
	61	A区	DS-42-19・24区	SD-101・114合流点	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/4ほどの破片。胴部外面の上半は横ナデ、下半は擦過に近い乱雑なミガキ。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4389	11	図版36-④
図34	1	A区	DS-42-22・23、DS-43-2・3区	SD-102・114合流部	埋土	土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	4080	11	
	2	A区	DS-43-2・3・7・8区	SD-102	埋土	土師器	埦	内外面ともに横ナデ。	4369	11	
	3	A区	DV-43区西半部	SD-102	埋土下部	土師器	坏	全周の1/4弱の破片。内外面ともに二次的な火熱を受けて赤変。また、器面が荒れ調整不明。	3949	11	
	4	A区	DU-43区	SD-102	埋土上部	土師器	坏	全周の1/3ほど破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は回転横ナデ。	4075	11	
	5	A区	DR-43～DX-44区	SD-102	埋土	土師器	坏	全周の1/6～1/7の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。底部の器壁芯部には淡黒色の黒化層が残る。	4077	11	
	6	A区	DT-43-９区	SD-102・122合流部	埋土	土師器	埦	1/10ほどの破片のため、底径は不確実。外面は荒れが進み調整不明。内面は横ナデか？	4076	11	
	7	A区	DT-43区	SD-102	埋土上部	土師質土器	壺	全周の1/2強の破片。	4078	11	図版35-⑤
	8	A区	DS-42-22・23、DS-43-2・3区	SD-102・114合流部	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキらしい痕跡もみられるが判然としない。	4081	11	
	9	A区	DV-43-25区	SD-102	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。外面は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4074	11	
	10	A区	DR-42・43区	SD-102	埋土下部	黒色土器	埦	内黒土器。内外面ともにミガキ仕上げ。	4072	11	
	11	A区	DX-44-1・2区	SD-102	埋土	白磁	碗	中国白磁。胴下部は露胎のまま。内外面ともに横ナデ。	4063	11	図版34-⑩
	12	A区	DX-44-1・2区	SD-102	埋土	白磁	碗	中国白磁。全面施釉。細かな貫入が入る。	4138	11	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図34	13	A区	DW-43-23・DW-44-3区	SD-102	埋土	白磁	皿	外面は露胎のまま。内面施釉。	4069	11	
	14	A区	DS-43区	SD-102	埋土上部	須恵器	甕	内外面ともに横ナデ、また自然釉が付着。	4079	11	
	15	A区	DT-43区	SD-102	埋土上部	弥生土器	高坏	内外面ともに横ナデ。	4082	11	
図35	1	A区	DW-45区	SD-103	埋土上部	土師器	埦	全周の1/4弱の破片。外面及び高台部周辺は横ナデ。内面はミガキもしくは非常に丁寧なナデ仕上げ。	4118	11	
	2	A区	DW-45区	SD-103	埋土上部	土師器	埦	全周する胴部下半～底部の破片。胴部外面～高台部周辺は横ナデ。外底面には板目圧痕が残る。内底面を不定方向のナデの後に胴部内面を乱雑にナデ調整。	4341	11	図版36-①
	3	A区	DV-43区	SD-103	埋土上部	土師器	埦	ほぼ全周の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4112	11	
	4	A区	DU-45区	SD-103	埋土下部	土師器	埦	全周の1/5～1/6の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4119	11	
	5	A区	DX-45区	SD-103	東半部、埋土上部	土師器	坏	全周の1/6ほどの破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は指頭による横ナデ。	4117	11	
	6	A区	DU-45区	SD-103	埋土上部	土師器	柱状高台土器	外面は横ナデ、内面は指頭による横ナデ。	4116	11	図版35-⑥
	7	A区	DW-45区	SD-103	埋土下部	黒色土器	埦	内黒土器。外面と口縁部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4120	11	
	8	A区	DV-45区	SD-103	埋土下部	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/3弱の破片。厚でのつくり。内外面とも二次的な火熱を受け、器面が荒れ調整不明。外面は薄いピンク色に変色。	4113	11	
	9	A区	DX-45区	SD-103	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/3弱の破片。胴部下半の外面はヘラ状工具で回転横ナデ。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4114	11	
	10	A区	DT-45-1・6区	SD-103	埋土？	白磁	碗	全面施釉。内外面ともに横ナデ。	4066	11	図版35-②。上層水田層からの混入の可能性も高い。
	11	A区	DX-45区	SD-103	埋土	白磁	碗	全面施釉。玉縁口縁の下端にはヘラ状工具で小さな段を設ける。	4065	11	図版35-①
	12	A区	DS-45-1・6区	SD-103	埋土上部	須恵器	甕	口縁端部を折り曲げて横ナデ調整で成形。	4121	11	
	13	A区	DT-41区	SD-104	西半部埋土	白磁	碗	中国白磁。全面施釉。見込み部分に段状の沈線を巡らす。	4137	11	
	14	A区	DS-42区	SD-114	埋土上部	須恵質土器	甕	器体の傾きはやや不確実。外面は平行条線タタキ、内面は横ナデ。	4176	11	
	15	A区	DY-45区	SD-119	南部埋土	須恵質土器	坏	内外面ともに回転横ナデ。胎土に大粒の砂礫が混じり、ややざらついた質感であるので、須恵質土器と判断した。	4171	11	
	16	A区	DT-42・43区	SD-122	埋土	土師器	埦	外面は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4110	11	
	17	A区	DT-42・43区	SD-122	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。底径はやや不確実。外器表面が荒れ調整不明。	4111	11	
	18	A区	DT-42・43区	SD-122	埋土	土師器	埦	全周の1/2弱の胴部下半の破片。外面は荒れが進み調整不明。内面はミガキ仕上げか？	4136	11	
	19	A区	DT-42-20区	SD-101・122、SS-106間水口	埋土	土師器	柱状高台土器	全周の1/5ほどの底部破片。内外面ともに横ナデ。外底面には回転糸切り離し痕が部分的に残る。	4146	11	
図36	1	A区	DX・DY-44・45区	SX-121	土層観察用ベルト埋土	土師器	皿	全周の1/3ほどの破片。内外面ともに横ナデ。外底面には回転糸切り離し痕が残る。	4089	11	
	2	A区	DY-45区東半部	SX-121	埋土	土師器	坏	全周の1/7ほどの破片。内外面ともナデ仕上げ。外底面は回転糸切り離し。	3913	11	
	3	A区	DY-45区東半部	SX-121	埋土	土師器	埦	胴部下半～底部の2/3弱の破片。胴部外面～高台部周辺は横ナデ。外底面には板目圧痕が残る。内面はナデ仕上げ。	4342	11	図版35-⑨
	4	A区	DY-44-23・24区	SX-121	埋土上部	土師器	埦	全周の1/4弱の破片。外面は荒れが進み調整不明。内面はナデの可能性があるが、判然としない。	4092	11	
	5	A区	DX・DY-44・45区	SX-121	西半部底面	土師器	埦	3/4ほどの全周する破片。外面は荒れが進み調整不明。内面、とくに内底面は指頭による強い横ナデ。	4391	11	図版36-②
	6	A区	DX・DY-44・45区	SX-121	西半部底面	土師器	埦	全周の1/4弱の破片。外面は回転横ナデ。内面、とくに内底面は指頭による強い横ナデ。	4390	11	
	7	A区	DY-44-23・24区	SX-121	埋土上部	白磁	碗	全面施釉。内外面ともに横ナデ。二次的な火熱を受けているためか、釉・破面はくすんだ色調に変化。	4067	11	図版35-③
	8	A区	DX・DY-44・45区	SX-121	東半部、底面直上	弥生土器	甕	内外面ともに横ナデ。	4097	11	
図37	1	A区	DX-45区	SS-117	耕作土層	土師器	皿	全周の1/6ほどの破片。薄でのつくり。内外面ともに荒れが進み、内面の一部にナデ調整痕が認められる以外、調整は不明。	3907	9	
	2	A区	DT-44区	SS-108	耕作土層	土師器	皿	全周の1/10ほどの破片のため、復元口径は不確実。内外面ともに器面の荒れが進み調整不明。	3912	9	
	3	A区	DT-44区	SS-109	耕作土層	土師器	皿	全周の1/3の破片。胴部の内外面は横ナデ。外底面には指頭痕が多く残る。内底面は乱雑で不定方向のヘラナデ。	4054	9	
	4	A区	DS-43区	SS-108	耕作土層	土師器	皿	全周の1/4ほどの破片。内面には指頭による強いナデ調整を施す。	3916	9	
	5	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	皿	全周の1/4ほどの破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は不定方向のナデ仕上げ。	3911	9	
	6	A区	DS-45区	SS-112	耕作土層	土師器	皿	全周の1/6ほどの破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は指頭による不定方向のナデ。	3915	9	
	7	A区	DT-44区	SS-109	耕作土層	土師器	坏	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに荒れが著しく、調整は不明。	3909	9	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図37	8	A区	DT-44区	SS-109	耕作土層	土師器	坏	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに荒れが著しく調整は不明。	3908	9	
	9	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	坏	全周の約1/2ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4394	9	
	10	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	坏	全周の1/6の破片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3914	9	
	11	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	坏	全周の1/7ほどの破片。胴部外面は荒れが進み調整不明。内面はナデ調整か？	3910	9	
	12	A区	DU-44区	SS-109	耕作土層	土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	3929	9	
	13	A区	DT-44区	SS-109	耕作土層	土師器	埦	外面と口縁部内面の一部が黒色化。内外面ともに荒れが進み、調整の詳細は不明。	3924	9	
	14	A区	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	埦	外面は横方向の指頭ナデ。指頭痕が全面に残る。内面はナデ仕上げ。	4357	9	
	15	A区	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	埦	外面は横方向の指頭ナデ。指頭痕が全面に残る。内面は横ナデ仕上げ。	4358	9	
	16	A区	DS-43・44区	SS-108	耕作土層	土師器	埦	内外面ともに荒れて、調整の詳細は不明。	3927	9	
	17	A区	DT-45区	SS-113	耕作土層	土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面は荒れが著しく調整不明。	3900	9	
	18	A区	DT-44区	SS-108	耕作土層	土師器	埦	全周の1/2弱の破片。高台部周辺は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4350	9	
	19	A区	DS-43区	SS-108	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。胴部外面はヘラ状工具でナデ。高台部周辺は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4348	9	
	20	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	3897	9	
	21	A区	DU-43区	SS-106	耕作土層	土師器	埦	全周の2/5ほどの破片。外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4351	9	
	22	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層	土師器	埦	全周の1/2ほどの破片。外面は荒れが進み調整不明。内面はミガキ仕上げと考えられるが判然としない。	4349	9	
	23	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4強の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4352	9	
	24	A区	DW-44区	SS-116撹乱部より西側	耕作土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3894	9	
	25	A区	DS-45区	SS-112	耕作土層	土師器	埦	内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3889	9	
	26	A区	DV-45区	SS-117	耕作土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げか？	3904	9	
	27	A区	DT-45区	SS-113	耕作土層	土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。薄でづくり。内外面ともに荒れが進み調整は不明。	3901	9	
	28	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。やや褐色みをおびた灰白色の焼き上がり。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4055	9	
	29	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層	黒色土器	埦	全周の1/4強の破片。外面は全面、内面は部分的に黒色化。外面は回転横ナデ。内面はナデ。	3919	9	
	30	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/6の破片。外面は回転横ナデ。内面は非常に丁寧なナデ仕上げ。	3905	9	
	31	A区	DU-45区	SS-113	耕作土層	土師器	埦	全周の1/2～1/3の破片。外面は荒れが著しく調整不明。内面は丁寧なナデ仕上げ。	3953	9	
	32	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/5～1/6の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4053	9	
	33	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。胴部外面はミガキ、高台部周辺はナデ。内面は荒れが著しく調整不明。	3891	9	
	34	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は荒れが進み調整は不明。内面は丁寧なナデ仕上げ。	3890	9	
	35	A区	DS-43区	SS-107	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4～1/5の破片。内外面ともに器面が荒れ調整不明。ただし、内面はミガキ仕上げか？	4052	9	
	36	A区	DT-44区	SS-109	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3903	9	
	37	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は荒れが著しく調整不明。内面はナデ調整	3893	9	
	38	A区	DU-45区	SS-113	耕作土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに丁寧なナデ仕上げ。	3917	9	
	39	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。	3918	9	
	40	A区	DU-45区	SS-113	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面はナデ？	3902	9	
	41	A区	DU-44区	SS-109	耕作土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3895	9	
	42	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3899	9	
	43	A区	DU-44区	SS-109	耕作土層	土師器	埦	ほぼ全周の破片。胴部外面～高台部は回転横ナデ。内面はナデ調整。	4051	9	
	44	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	土師器	埦	全周の1/3ほどの破片。胴部外面は回転横ナデ、高台付け根をヘラ状工具でナデつけ。内面は不定方向の丁寧なナデ仕上げ。	3955	9	

挿図	遺物No	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図37	45	A区	DS-43区	SS-108	耕作土層	土師器	土鍋	外面には指頭痕が多く残る。内面は横ナデ。	3930	9	
	46	A区	DW-44区	SS-115	耕作土層	黒色土器	埦	内黒土器。外面は荒れが進み調整不明。内面には部分的にミガキ痕がみられる。	3925	9	
	47	A区	DX-44-12・17・18・22・23区	SS-116	耕作土～床土層	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/4ほどの高台部破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4395	9	
	48	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層	黒色土器	埦	両黒土器。薄でのつくりで、胎土も砂粒が混じらない精製粘土を用いている。外面はナデ。内面は目の細かなミガキ仕上げ。	3923	9	
	49	A区	DS-43区	SS-108	耕作土層	黒色土器	埦	両黒土器。外面は回転横ナデ。内面には部分的にミガキ痕が残る。	3926	9	
	50	A区	DT-44区	SS-109	耕作土層	黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/4の破片。高台端部は摩滅。外面は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面はミガキ仕上げ。	3920	9	
	51	A区	DT-45区	SS-113	耕作土層	黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/7ほどの破片。内外面ともに荒れが進み、調整不明。外底面は不定方向のナデ。高台端部は摩滅。	3921	9	
	52	A区	DS-43区	SS-108	耕作土層	白磁	碗	中国白磁。全面施釉。小片のため器体の傾きは不確実。内底面見込み近くに沈線が１条巡る。	4056	9	
	53	A区	DT-44区	SS-109	耕作土層	須恵器	?	内外面ともに自然釉が付着。横ナデ仕上げ。	3932	9	
	54	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層	須恵器	壺	全周の1/5～1/6の破片。外面は横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	3931	9	
	55	A区	DS-43区	SS-108	耕作土層	瓦	丸瓦	端面がわずかに残る。	4061	9	
図38	1	A区	DS-43区	SS-107・108間畦畔	畦畔本体	土師器	皿	全周の1/6ほどの破片で、器体の歪みもあり、口径は不確実。内外面ともに横ナデ。	4397	9	
	2	A区	DY-45区	SD-101南側畦畔	畦畔本体上部	土師器	皿	全周の1/4の破片。外面は回転横ナデ。内面は荒れが進むがナデか？	3948	9	
	3	A区	DX-44-8・13・18・15区	SD-102・SS-116間畦畔	畦畔本体	土師器	皿	全周の1/4～1/5の破片。内外面ともに荒れが著しく調整は不明。	3946	9	
	4	A区	DX-44-1・2区	SD-101・102間畦畔	畦畔本体	土師器	坏	全周の1/2弱の破片。器体の歪みが著しい。内外面ともに荒れが進み調整不明。ただし、内面は回転横ナデか？	4396	9	
	5	A区	DX-44区	SD-102・SS-116間畦畔	畦畔本体	土師器	坏	全周の1/7ほどの破片。内外面ともに荒れが著しく調整の詳細は不明。	3950	9	
	6	A区	DV-45区	SD-103・SS-113間畦畔	畦畔本体	土師器	坏	全周の1/7ほどの底部周辺の破片。胴部外面は横ナデ。内面はナデ仕上げ。	4398	9	
	7	A区	DT-43区	SD-102・SS-109間畦畔	畦畔本体	土師器	皿	内外面ともに回転横ナデ。	3943	9	
	8	A区	DT-42区	SD-101・SS-105間畦畔	畦畔本体	土師器	皿	全周の1/3ほどの破片。外面は回転横ナデ、内面は荒れが進み調整不明。	3944	9	
	9	A区	DR-45区	SD-103・SS-107間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/2弱の厚い円盤高台の破片。外面は棒状工具を用いた強めの横ナデ。内面は回転横ナデ。	4399	9	
	10	A区	DY-45区	SD-119南側畦畔	畦畔本体上部	土師器	埦	内外面ともに横ナデ。	4366	9	
	11	A区	DS-42・43区	SD-102・SS-114間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	器体はもう少し傾きが急か？　外面は回転横ナデ。内面はヘラケズリの後にナデ仕上げ。口縁部内面にヘラケズリ痕が部分的に残る。	3956	9	
	12	A区	DV-45区	SD-103・SS-117間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/3～1/4の破片。外底面と内面には回転横ナデ。他は器面の荒れのため、調整不明。	3937	9	
	13	A区	DZ-45区	SD-119南側畦畔	畦畔本体	土師器	埦	高台部が全周する破片。高台部周辺をナデ仕上げ、外底面を不定方向の指頭によるナデ調整で仕上げる。内面は丁寧なナデ。	3934	9	
	14	A区	DU-43区	SS-106・SD-102間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/3強の胴部下半～底部の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4343	9	
	15	A区	DT-42区	SD-122・SS-106間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。外面は横ナデ、外底面は不定方向のナデ調整。内面はミガキ仕上げ。内底面の一部には指頭によるナデ痕跡がみられる。	3936	9	
	16	A区	DT-43区	SD-102・SS-108・109間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4弱の破片。外面は回転横ナデ。内面は不定方向の丁寧なナデ仕上げ。	3938	9	
	17	A区	DS-42区	SD-101・114間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	ほぼ全周する高台部～底部破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4344	9	図版35-⑩
	18	A区	DU-43区	SD-101・SS-106間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/2強の胴部下半～底部の破片。高台部周辺は横ナデ、外底面は不定方向のナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。	4347	9	SK-123埋土出土の破片と接合。
	19	A区	DT-42区	SD-122・SS-106間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/3～1/4の破片。外面は荒れているが、ナデ調整か？　内面は丁寧なナデ仕上げ。	3935	9	
	20	A区	DX-44区	SS-115・116間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3940	9	
	21	A区	DU-43区	SS-106・SD-102間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/5ほどの高台部周辺の破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4346	9	
	22	A区	DX-44区	SS-115・116間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4～1/3の破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は非常に丁寧なナデ仕上げ。	4059	9	
	23	A区	DX-44区	SS-115・116間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4弱の破片。外面は回転横ナデ。高台近くはヘラ状工具が用いられている。内面は丁寧なナデ仕上げ。	3960	9	
	24	A区	DU-45区	SD-103・SS-110間畦畔	畦畔本体下部	土師器	埦	全周の1/4弱の破片。器面も荒れ調整の詳細は不明。	3951	9	
	25	A区	DV-45区	SS-110・115間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面は丁寧なナデ仕上げ。外底面は不定方向のナデ調整。	3952	9	

挿図	遺物№	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図38	26	A区	DT-44区	SS-108・109間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/3弱の破片。内外面ともに器面が荒れ、調整不明。	3939	9	
	27	A区	DU-45区	SD-103・SS-110間畦畔	畦畔本体下部	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は荒れが著しく調整不明。内面はミガキもしくは丁寧なナデと考えられるが、判然としない。	3941	9	
	28	A区	DV-45区	SD-103・SS-117間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/3ほどの破片。外面は荒れが著しく調整不明。内面は丁寧な不定方向のナデ仕上げ。	3954	9	
	29	A区	DU-43区	SS-106・SD-102間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/3ほどの胴部下半～底部の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4345	9	
	30	A区	DX-44区	SD-102・SS-116間畦畔	畦畔本体	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3942	9	
	31	A区	DR-45区	SD-103・SS-107間畦畔	畦畔本体	土師器	鍋	内外面ともに指頭による成形後に横ナデ。内面には煤が薄く付着。	3957	9	
	32	A区	DU-43区	SD-101・SS-106間畦畔	畦畔本体	黒色土器	埦	内黒土器。口縁部周辺～内面はミガキ仕上げ。胴部外面は丁寧な横ナデ。	3945	9	
	33	A区	DX-44-1・2区	SD-101・102間畦畔	畦畔本体	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/3ほどの高台部周辺の破片。外面～高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4133	9	
	34	A区	DX-44区	SD-102・SS-116間畦畔	畦畔本体	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/3ほどの破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4400	9	
	35	A区	DT-44区	SS-108・109間畦畔	畦畔本体	瓦器	埦	胴部破片のため、径はやや不確実。	3961	9	
	36	A区	DS-42区	SD-101・SS-114間畦畔	畦畔本体	須恵器	壺または甕	胴部破片のため器体の傾きは不明。外面には目の細かな平行条線タタキを交差して施す。内面には同心円文の当て具痕が残る。	3962	9	
	37	A区	DT-43区	SD-122・SS-106間畦畔	畦畔本体	弥生土器	壺	平底の底部破片。全周の1/4ほど。外面にはヘラ状工具で掻き上げたような痕跡が部分的に残る。その後、ナデ仕上げ	3958	9	
	38	A区	DX-44区	SD-102・SS-116間畦畔	畦畔本体	弥生土器	甕	脚台状の上げ底。胴部外面はヘラ状工具でナデ上げる。底部周辺は横ナデ。内面はナデ上げ。	4060	9	
図39	1	A区	DS-43区	SS-108	床土層上部	土師器	皿	全周の1/5～1/6の破片。胴部外面の上半部～内面は回転横ナデ。胴部下半はヘラ状工具を押さえつけてのナデ調整。外底面はナデ仕上げ。	3859	9	
	2	A区	DU-43区	SS-106	床土層	土師器	皿	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。外底面はナデ仕上げのため、切り離し方法は不明。	3855	9	
	3	A区	DT-44区	SS-109	床土層	土師器	皿	全周の1/5ほどの破片。内面は回転横ナデ。	3858	9	
	4	A区	DS-44区	SS-108	床土層下部	土師器	皿	全周の1/6ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。	3856	9	
	5	A区	DU-44区	SS-110	床土層	土師器	埦	外面は回転横ナデか？内面は荒れが進み調整不明。	3873	9	
	6	A区	DU-44区	SS-109	床土層	土師器	埦	内外面ともに荒れが進み調整の詳細は不明。	3872	9	
	7	A区	DT-45区	SS-113	床土層	土師器	埦	内外面ともに横ナデ。	3871	9	
	8	A区	DT-44区	SS-109	床土層	土師器	埦	口縁部周辺は横ナデ。胴部外面はヘラ状工具でナデ。内面はミガキ仕上げ。	3875	9	
	9	A区	DT-43区	SS-109	耕作土層～床土層	土師器	埦	口縁部は部分的に歪んでいる。内外面ともに回転横ナデ。	3928	9	
	10	A区	DX-45区	SS-117	床土層	土師器	埦	外面は回転横ナデ。器面は荒れて調整は不明。	3867	9	
	11	A区	DT-44区	SS-109	床土層	土師器	埦	内外面ともに丁寧な横ナデ。	3870	9	
	12	A区	DS-43区	SS-108	床土層上部	土師器	坏	全周の1/8以下の破片のため、底径はやや不確実。もう少し大きくなるか？　胴部外面は回転横ナデ。他の部位は荒れが進み調整不明。	3861	9	
	13	A区	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	坏	全周の1/7ほどの破片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3857	9	
	14	A区	DS-43区	SS-108	床土層下部	土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。器面は荒れ調整不明。	3888	9	
	15	A区	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	皿	全周の1/4～1/5の破片。内外面ともに回転横ナデ。外底面はナデ仕上げのため、切り離し方法は不明。	3860	9	
	16	A区	DU-43区	SS-110	床土層	土師器	皿	全周の1/2ほどの破片。外面は荒れが著しく調整の詳細不明。内面はナデ。	3854	9	
	17	A区	DR-43区	SS-107東半部	床土層	土師器	埦	全周の1/5ほど破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4071	9	
	18	A区	DV-44・45区	Ⅱ-2-④層	耕作土層～床土層	土師器	埦	全周の1/4強の破片。外面は回転横ナデ。高台部の付け根には細いヘラ状工具で撫でつけた沈線状の窪みが巡る。内面は丁寧な不定方向のナデ仕上げ。	3964	9	
	19	A区	DV-44区	SS-115	床土層	土師器	埦	全周の1/4～1/5の破片。外面は回転横ナデ、内面はナデ仕上げ。	3865	9	
	20	A区	DT-43区	SS-105	床土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。他は荒れが進み調整不明。	4355	9	
	21	A区	DV-44区	SS-115	床土層	土師器	埦	全周の1/3～1/4の破片。外面～高台部周辺は回転横ナデ。内面はナデ調整。	3862	9	
	22	A区	DS-43区	SS-108	床土層上部	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4354	9	
	23	A区	DT-43区	SS-109	耕作土層～床土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。外底面がナデ調整である以外、器面の荒れが著しく調整不明。	3898	9	
	24	A区	DS-43区	SS-108	床土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面は荒れが進み調整は判然としないが、ナデ仕上げか？	3869	9	
	25	A区	DU-44区	SS-110	床土層	土師器	埦	全周の1/5～1/6の破片。内外面ともに荒れが進む。外面は回転横ナデか？	3874	9	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図39	26	A区	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	埦	全周の1/4の破片。高台部周辺は回転横ナデ。外底面はナデ。内面は荒れが進み調整不明。	3864	9	
	27	A区	DS-44区	SS-108	床土層	土師器	埦	外面は器面の荒れが進み調整不明。内面はナデ仕上げ。	3868	9	
	28	A区	DU-44区	SS-109	床土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。外底面はナデ仕上げ。	3886	9	
	29	A区	DT-45区	SS-113	床土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面～外底面は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4057	9	
	30	A区	DT-43区	SS-109	耕作土層～床土層	土師器	埦	全周の1/6の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	3906	9	
	31	A区	DW-44区	SS-115	床土層	土師器	埦	全周の1/2弱の破片。胴部外面は横ナデ。内面は横ナデ仕上げ。	4353	9	
	32	A区	DU-45区	SS-113	床土層	土師器	埦	高台部周辺の全周の1/4の破片。内外面ともに荒れが進み調整不明。	4356	9	
	33	A区	DT-43区	SS-109	耕作土層～床土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3892	9	
	34	A区	DV-44区	SS-115	床土層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。器面が荒れ、胴部外面に回転横ナデを施していることを確認できるだけである。	3887	9	
	35	A区	DX-44-12・17・18・22・23区	SS-116	耕作土層～床土層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3896	9	
	36	A区	DT-43区	SS-105	床土層	土師器	土鍋	内外面ともに横ナデ。口縁部下面に指頭痕が集中して残る。	3878	9	
	37	A区	DW-44区	SS-115	床土層	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/5ほどの破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4402	9	
	38	A区	DT-45区	SS-113	床土層	黒色土器	埦	内黒土器。全周の2/5ほどの破片。器面が荒れ調整不明。	4403	9	
	39	A区	DW-44区	SS-115	床土層	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/6ほどの破片。高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4401	9	
	40	A区	DR-44区	SS-107	耕作土層～床土層	黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/5の破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は丁寧なナデ仕上げ。	3922	9	
	41	A区	DU-43区	SS-110	床土層	瓦器	埦	外面は乱雑なナデ。内面は丁寧なミガキ仕上げ。堅緻に焼き上がる。	3866	9	
	42	A区	DS-44区	SS-108	床土層	須恵質土器	壺？	底径から壺と考えた。全周の1/5～1/6の破片。	3876	9	
	43	A区	DT-43区	SS-109	耕作土層～床土層	土師器	高坏	脚部破片。坏部との接合面で欠損。	3933	9	
	44	A区	DY-45区	SS-119	耕作土層～床土層	須恵器	坏	内外面ともに回転横ナデ。	4172	9	
	45	A区	DR-44区	SS-107	床土層～耕作土層	須恵器	蓋	短頸壺の蓋。口径13.2cmで復元したが、推定口径は12.2～13.2cm。内外面ともに回転横ナデ。	3879	9	
	46	A区	DS-44区	SS-108	床土層下部	須恵器	甕または壺	外面は縦方向の平行条線タタキ痕をカキメ調整で消す。内面には同心円文の当て具痕が残る。	3884	9	
	47	A区	DS-43区	SS-108	床土層	弥生土器	脚台付き鉢	小型品。内外面とも指頭によるナデ。	3881	9	
	48	A区	DT-44区	SS-109	床土層	弥生土器	壺	外面がミガキ仕上げのため壺の肩部片と判断。	3883	9	
	49	A区	DS-44区	SS-108	床土層下部	弥生土器	壺	内外面ともに横ナデ。	3885	9	
	50	A区	DS-44区	SS-108	床土層	弥生土器	脚台付き鉢	内外面ともにナデ仕上げ。脚台接合部と内底面には粘土接合のための指頭圧痕が残る。	3882	9	
	51	A区	DS-45区	SS-112	床土層	弥生土器	壺	全周の1/5ほどの破片。外面の調整は、底部裾を指頭で押さえている以外、器面の荒れが進み不明。内面はナデ、内底面には指頭で押さえつけた痕跡が残る。	3877	9	
図40	1	A区	DS-43区	Ⅱ-2-③層		石器	打製石鏃	サヌカイト製。基部を欠損。現存重量1.2g。	4419	26	
	2	A区	DT-45区	SD-103・SS-109間畦畔	畦畔本体	石器	磨製石庖丁	片岩製。両刃。残存重量13.3g。	4423	26	図版38-③
	3	A区	DS-44区	SS-108	耕作土層下部	石器	磨製石庖丁	片岩製。両刃。刃こぼれが著しく、中央部は大きく欠損。重量74.7g。	4422	26	図版38-⑤
	4	A区	DU-44区	SS-110	床土層	石器	敲打具	半折品。残存重量112.4g。	4430	26	図版39-①
図43	1	A区	DT・DU-42・43区	SK-201	埋土最下層	土師器	坏	全周の1/4強の底部破片。外面は荒れが進み調整不明。内面は不定方向のナデ仕上げ。	4392	11	図版36-⑨
	2	A区	DU・DV-43区	SK-202	東半部埋土	土師器	Ⅲ	全周の2/3ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。外底面の切り離し方法は荒れが進み不明。	4393	11	図版36-⑥
	3	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	土師器	Ⅲ	全周の1/3～1/2の破片。内外面ともに回転横ナデ。外底面は荒れ、切り離し方法は不明。	3733	8	
	4	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	Ⅲ	小片のために復元底径はやや不確実。内外面ともに回転横ナデ。外底面はナデ仕上げされ、切り離し方法は不明。	3761	8	
	5	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	Ⅲ	全周の1/3ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。その後、内底面に指頭によるナデを部分的に施す。	3734	8	
	6	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	Ⅲ	内外面ともに回転横ナデ。外底面は回転ヘラ切り離し。	3666	8	
	7	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	埦	器面が荒れているが、内外面ともに回転横ナデか？	3716	8	
	8	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	3721	8	
	9	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	土師器	埦	外面は横ナデ。内面は荒れが進み調整不明。	4376	8	
	10	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	坏	内外面ともに回転横ナデ。外底面は回転ヘラ切り離しの後にナデ仕上げ。	3718	8	
	11	A区	DV-44区	SD-208	埋土	土師器	坏	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに荒れている。内面の一部では回転横ナデの痕跡をわずかに観察できる。	3717	8	
	12	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	坏	胴部は回転横ナデ。内底面は不定方向の指ナデ。	3711	8	

挿図	遺物No.	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図43	13	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	埦	全周の1/7ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面は回転横ナデ。	3724	8	
	14	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。	3668	8	
	15	A区	DV-44区	SD-208	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。胴部外面～高台部周辺は横ナデ。外底面と内面は荒れが進み調整不明。	4373	8	
	16	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	埦	全周の1/6ほどの破片。外面は回転横ナデ、内面はミガキ仕上げ。	3669	8	
	17	A区	DW-44区	SD-208	埋土	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。内面は荒れが進み調整不明。口縁部周辺は横ナデ。胴部外面は指頭による横ナデ。胴部下半の高台部周辺は回転ヘラケズリ。高台部は横ナデ。	4379	8	
	18	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキ調整。	3709	8	
	19	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキ調整。	3706	8	
	20	A区	DW-44区	SD-208	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。薄でのつくり。外面は回転横ナデ。内面はミガキ調整。	3707	8	
	21	A区	DW-44区	SD-208	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。内外面ともにミガキ調整。	3708	8	
	22	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/4ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面はミガキ。外底面の中央はナデ仕上げ。	3737	8	
	23	A区	DW-44区	SD-208	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/4～1/5の高台部片。内面はミガキ。外面は回転横ナデ。	3763	8	
	24	A区	DW-44区	SD-208	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキ。	3735	8	
	25	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/8ほどの破片で、高台径は不確実。高台の付け根付近はヘラで強く回転ナデ。内面はミガキ調整。	3714	8	
	26	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/6の破片。外面は回転横ナデ。内面は非常に丁寧なナデ仕上げ。	3703	8	
	27	A区	DW-44区	SD-208	溝底付近埋土	土師器	皿	全周の1/8ほどの破片で、底径はやや不確実。内外面ともに回転横ナデ。内底面は不定方向の指頭によるナデ仕上げを施す。	3727	8	
	28	A区	DW-44区	SD-208	炭ブロック内	土師器	坏	胴部～内底面は回転横ナデ。	3713	8	
	29	A区	DW-44-12区	SD-208	炭ブロック内	土師器	皿	全周の1/3～1/2の破片。内外面ともに回転横ナデ。	3731	8	図版36-⑦
	30	A区	DW-44-12区	SD-208	炭ブロック直上（裏返し状態で出土）	土師器	皿	完形品。内外面ともに回転横ナデ。	3732	8	図版36-⑤
	31	A区	DW-44-12区	SD-208	灰ブロック内	土師器	埦	ほぼ全周の破片。胴部外面～高台部周辺は横ナデ。特に高台部周辺のナデは強い。外底面中央はナデ。内面はミガキ痕跡が部分的に残る。	4374	8	
	32	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土中層	土師器	皿	内外面ともに回転横ナデ。	3729	8	
	33	A区	DV-44区	SD-208	埋土	土師器	皿	全周の1/10の破片で、口径は不確実。内外面ともに回転横ナデ。外底面の切り離し方法は不明。	3728	8	
	34	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土中層	土師器	皿	全周の1/5ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。	3725	8	
	35	A区	DV-43区	SD-208	埋土	土師器	埦	外面は回転横ナデ。内面はミガキ。	3726	8	
	36	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土中層	土師器	埦	口縁部内外面は回転横ナデ。胴部はミガキ仕上げ。	3670	8	
	37	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土中層	土師器	埦	内外面ともに器面が荒れ調整不明。	3667	8	
	38	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土中層	土師器	埦	全周の1/5ほどの破片。胴部内外面は回転横ナデ。内底面は指頭による不定方向のナデ。外底面はナデ仕上げのために切り離し方法は不明。	3738	8	
	39	A区	DV-43区	SD-208	埋土	土師器	埦	全周1/6ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。外底面は回転ヘラ切り離しの後にナデ？	3723	8	
	40	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土中層	土師器	埦	全周の1/4ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面はミガキ調整と思われるが、器面が荒れ判然としない。	3722	8	
	41	A区	DV-43区	SD-208	埋土	土師器	埦	全周の1/6～1/7の破片。胴部外面～高台部周辺は横ナデ。内面は荒れが進み判然としないが、ナデか？	4375	8	
	42	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土中層	黒色土器	埦	内黒土器。外面は口縁部付近が回転横ナデ、胴部の調整は荒れが進み不明。内面はミガキ仕上げ。	3765	8	
	43	A区	DV-44区	SD-208	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。推定口径はやや不確実。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3762	8	
	44	A区	DW-44区	SD-208	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/4ほどの破片。外面は回転横ナデ。内面はミガキ。	3736	8	
	45	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土下層	土師器	皿	全周の1/3ほどの破片。器体が歪み、推定口径は7.9～8.5cm。内外面ともに回転横ナデ。	3679	8	
	46	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土下層	土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	3720	8	
	47	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土下部	土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	4377	8	
	48	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土下部	土師器	埦	口縁部周辺は横ナデ。胴部外面は指頭による横ナデで、器面にはかなりの凹凸がある。内面はミガキ仕上げ。	4378	8	
	49	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土下層	土師器	坏	内外面ともに回転横ナデ。	3715	8	
	50	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土下層	黒色土器	埦	内黒土器。推定口径はやや不確実。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3764	8	
	51	A区	DW-42区	SD-208	溝底付近埋土	土師器	皿	推定口径はやや不確実。内外面ともに回転横ナデ。外底面は回転ヘラ切り離し。	3719	8	
	52	A区	DU-43区	SD-208	埋土	土師器	埦	全周の1/3ほどの破片。胴部外面～高台周辺は横ナデ。外底面は不定方向のナデ。内面はミガキ仕上げ。	4372	8	

挿図	遺物№	調査区		出土層位・遺構	出土状況	種別	器種	形状・器面調整・胎土・焼成などの特徴	遺物登録番号	コンテナ番号	備考
図43	53	A区	DR-43区	SD-208	埋土上部	土師器	柱状高台土器	全周の1/4ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。	3712	8	
	54	A区	DU-44区	SD-208	埋土	須恵器	坏	坏身の受け部周辺の破片。内外ともに回転横ナデ。	3742	8	
	55	A区	DW-44区	SD-208	埋土	弥生土器	甕	口縁先端部を横ナデして上方にわずかに摘み上げる。内外面ともに横ナデ。	3741	8	
	56	A区	DW-44区	SD-208	埋土	弥生土器	甕	外面は二次的な火熱を受けて赤変し器面が荒れ調整不明。内面はナデ。脚台状の底部内面は指頭で押さえてナデ。	3740	8	
	57	A区	DW-44区	SD-208	埋土中層	弥生土器	甕	平底。内外面ともに荒れが進み、底部側面に指頭痕が部分的に観察できるのみ。	3739	8	
	58	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土下層	縄文土器	深鉢	粗製。器体が歪んでいるためか、口縁部は緩やかに波打っている。外面は貝殻条痕。内面には細密条線の調整痕が残る。	3745	8	
	59	A区	DV-44区以西	SD-208	埋土中層	縄文土器	深鉢	粗製。外面は乱雑なケズリ。内面には幅２～３㎜のナデ調整痕が残る。	3746	8	
図44	1	A区	DT・DU-42区	SK-201	南半部埋土上部	石器	敲打具	円盤形の砂岩円礫の周縁に敲打痕が残る。残存重量201.1ｇ。	4432	26	図版39-③
	2	A区	DT・DU-42区	SK-201	南半部埋土上部	石器	磨石	円盤形の砂岩円礫の周縁に擦過痕が残る。また一部には敲打痕がみられる。残存重量160ｇ。	4433	26	図版39-④
図45	1	A区	DT･DU-42･43区	SK-201	北半部最下層	鉄器	棒状鉄器	先端を環状に曲げた棒状鉄器。断面は隅丸方形を呈す。残存重量4.1ｇ。	4456	26	図版39-⑫
	2	A区	DT･DU-42･43区	SK-201	北半部最下層	鉄器	不明	断面が方形を呈する棒状鉄器。残存重量1.3ｇ。	4467	26	
	3	A区	DV-44-７区	SD-208		鉄器	刀子？	断面が長方形を呈する。刀子の柄の可能性が考えられる。残存重量3.8ｇ。	4460	26	図版40-①(写真)、図版40-⑱(Ｘ線)
	4	A区	DV-44-15区	SD-208		鉄器	環状	環状の鉄製品。残存重量13.4ｇ。	4464	26	図版40-⑥
	5	A区	DV-44-25区	SD-209	埋土下部	鉄器	鏃	残存重量11.4ｇ。	4457	26	図版39-⑧(写真)、図版40-⑬（Ｘ線）
	6	A区	DV-44-20区	SD-209	埋土下部	鉄器	釘	残存重量41.9ｇ。	4462	26	図版39-⑨(写真)、図版40-⑭（Ｘ線）
図46	1	A区	DV-44-18･19区	SD-209	埋土	土師器	皿	内外面ともに荒れが著しく調整不明。	3781	8	
	2	A区	DV-44･45区	SD-209	埋土上部	土師器	埦	内外面ともに荒れが著しい上に、外面は部分的に器面が削げ落ちている。調整不明。	3767	8	
	3	A区	DW-44区	SD-209	埋土	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3776	8	
	4	A区	DV-44･45区	SD-209	埋土上部	黒色土器	埦	内黒土器。ほぼ全周の破片。胴部外面は回転横ナデ。高台部付近は回転ケズリ。高台部は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4381	8	図版36-⑩
	5	A区	DV-44･45区	SD-209	埋土上部	黒色土器	埦	内黒土器。全周の1/6ほどの破片。胴部外面は回転横ナデ。高台部は横ナデ。内面はミガキ仕上げと考えられるが、判然としない。	4383	8	
	6	A区	DU-44区	SD-209	埋土	黒色土器	埦	両黒土器。全周の1/5ほどの破片。胴部外面～高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4382	8	
	7	A区	DU-44-19･24区	SD-209	埋土	瓦器	埦	外面は荒れが著しく調整不明。内面は回転横ナデか？	3780	8	
	8	A区	DW-44･45区	SD-209	埋土中部	土師器	皿	全周の1/7ほどの破片。内外面ともに回転横ナデ。外底面はナデ仕上げのため、切り離し方法は不明。	3766	8	
	9	A区	DU-44区	SD-209	埋土中部	土師器	埦	外面は回転横ナデ。内面は荒れが著しく調整不明。	3778	8	
	10	A区	DU-44区	SD-209	埋土中部	土師器	埦	口縁部周辺を横ナデした後に、胴部外面をミガキ仕上げ。内面はナデ仕上げと考えられるが、荒れが進み判然としない。	4384	8	
	11	A区	DW-44・45区	SD-209	埋土中部	土師器	埦	薄でのつくりで、胎土も砂粒を含まず精選されている。外面は荒れが著しく調整不明。内面は回転横ナデ。	3779	8	
	12	A区	DW-44・45区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3769	8	
	13	A区	DW-44・45区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。口径はやや不確実。口縁部内外面は回転横ナデ。胴部の内外面はミガキ仕上げ。	3774	8	
	14	A区	DU-44区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3773	8	
	15	A区	DW-44・45区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。口縁部外面は回転横ナデ。胴部外面は荒れが著しく調整不明、内面はミガキ仕上げ。	3771	8	
	16	A区	DU-44区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。口縁部内外面は回転横ナデ。胴部の内外面はミガキ仕上げ。	3848	8	
	17	A区	DU-44区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。口縁部内外面は回転横ナデ。胴部は内外面ともにミガキ仕上げ。	3775	8	
	18	A区	DW-44・45区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3772	8	
	19	A区	DW-44・45区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3783	8	
	20	A区	DU-44区	SD-209	埋土中部	黒色土器	埦	内黒土器。ほぼ全周の破片。胴部外面～高台部周辺は横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	4380	8	図版36-⑨
	21	A区	DW-44・45区	SD-209	埋土下部	土師器	埦	外面は回転横ナデ。内面はミガキ仕上げ。	3777	8	
	22	A区	DX-45区	SD-209	埋土	弥生土器	甕	口縁部周辺は横ナデ。強い横ナデのため、口縁下端は粘土がよれて突出する。口縁外面には横ナデに先行するヘラ状工具痕が残る。胴部外面は刷毛目調整、内面はヘラ状工具で強いナデ。	3784	8	
図47	1	A区	DX-44区	Ⅱ-2-⑤層		土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	3691	6	
	2	A区	DV-45区	Ⅱ-2-⑤層	SS-312上面	土師器	埦	胴部外面に部分的にミガキ調整痕が残る。内面～口縁部周辺は回転横ナデ。	3804	6	
	3	A区	DU-44区	Ⅱ-2-⑤層	SS-308上面	土師器	埦	小片のため口径は不確実。内外面ともに回転横ナデ。	3687	6	
	4	A区	DW-45区	Ⅱ-2-⑤層		土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	3689	6	
	5	A区	DU-44区	Ⅱ-2-⑤層	SS-311上面	土師器	埦	内外面ともに回転横ナデ。	3690	6	